

*REVIEW OF ARCHITECTURAL DESIGN COURSE,  
KANAGAWA UNIVERSITY*

**RAK**  
*vol. 13*





## 目次

・特集 JINDAI KENCHIKUの記憶	1
インタビュー 高木幹朗+金丸壽男	2
エッセイ 津田良樹	15
エッセイ 鄭一止	22
特集後記 内田青蔵+中井邦夫	24
・2016年度学生優秀作品紹介	25
修士論文	26
卒業設計・論文	39
総評	52
全作品リスト	55
学部設計課題優秀作品	57
・NEWS	79
課外活動・学外コンペ受賞作品	80
留学生レポート	82

# [特集] JINDAI KENCHIKUの記憶

1965年に創設された神奈川大学建築学科は、2015年に50周年を迎えました。この半世紀、建築や社会、大学教育をめぐる時代の状況は刻々と変わっていています。しかし、私たちが今いる場所を落ち着いて見定めるには、時に過去に目を向けることも必要でしょう。今年度のRAKUでは、これまで本学科で教育・研究活動に従事してこられた先生方に、それぞれの立場から「JINDAI KENCHIKUの記憶」を語っていただきました。

巻頭のインタビューに应邀いただいた高木幹朗先生は、1965年度の後期から2007年に定年退職されるまで、本学科とともに歩んでこられました。本学科の7期生であり、卒業後は大学職員として学科を支えてこられた金丸壽男さんにも加わっていただき、学科創設期のことを中心にお話をうかがっています。続いて文章をお寄せいただいた津田良樹先生と鄭一止先生は、お二人とも昨年度で本学を退職されました。津田先生は学生時代から数えておよそ50年間、鄭先生は5年間、本学でのそれぞれの活動を振り返ってくださっています。



1980年代の夜間のキャンパス。手前に本館、奥に建築学科が入る8号館。4～6階の製図室・研究室は深夜まで明かりが灯る。(神奈川大学デジタルアーカイブ)

# 神奈川大学建築学科の歩み

語り手=高木幹朗+金丸壽男  
聞き手=内田青蔵+中井邦夫+長島明夫(編集担当) 2017年4月25日

## ▼略歴

### 高木幹朗(たかぎ・みきお)

1937年兵庫県生まれ。1958年東京工業大学理工学部入学。1962年に卒業後、石本建築事務所入社。1965年10月、神奈川大学助手に着任(69年から専任講師、76年から助教授、2001年から教授)。2007年神奈川大学退職、同名誉教授。共著書に「建築計画・設計シリーズ」(市ヶ谷出版社)の『設計基礎—計画・製図・単位空間』『ホテル・旅館』『幼稚園・保育所/児童館』など。



高木幹朗名誉教授

### 金丸壽男(かなまる・ひさお)

1951年神奈川県生まれ。1971年神奈川大学工学部建築学科入学。1975年に卒業後、2017年3月まで職員として神奈川大学に勤務。



金丸壽男氏

### 内田青蔵(うちだ・せいぞう)

1953年秋田県生まれ。1971年神奈川大学工学部建築学科入学。1975年に卒業後、同大学院修士課程入学(77年修了)。1977年東京工業大学研究生。1978年同大学院博士課程入学(83年満期退学)。その後、東京工業大学工学部附属工業高等学校教諭・文化女子大学教授・埼玉大学教授等を経て、2009年に神奈川大学教授に就任。



内田青蔵教授

### 中井邦夫(なかい・くにお)

1968年兵庫県生まれ。1991年東京工業大学工学部建築学科卒業。1993年同大学院修士課程修了。1999年同博士課程満期退学。その後、東京工業大学助手(助教)を経て、2008年に神奈川大学准教授に着任(15年から教授)。



中井邦夫教授

## ■ 学科創設と谷口忠先生の尽力

**内田** 神奈川大学の建築学科は1965年に創設されました。私は1971年入学の7期生ですから、その頃のことは多少知っていますが、デザイン系のメンバーはほとんど新しくなっていますので、初期のことは知りません。今日は、以前高木先生がお書きになった「建築学科草創記」(『神奈川大学工学部研究所報』30号、2007年)を基にしながら、建築学科創設期のお話を中心に伺いたいと思います。

「建築学科草創記」の最初のところで、神奈川大学で建築学科がつけられた当時は、日本全体で建築学科の創設ブームだったと書かれています。その頃の社会状況のなかで、建築学科が雨後の筍のようにできている。神奈川大学は1928年に横濱学院として設立され、文理融合型として初の専門学校ということですが、戦後に大学となり、建築学科が設立されたのは工学部のなかではいちばん遅い。学科の20周年記念誌には、建築学科の初代の学科長である**谷口忠先生**(1900-1995)の証言として、次のような記述があります。「建築学科創設のきっかけは、谷口先生が工業大学付属工業高校を退職する前後だった。神奈川大学に建築学科をつくったらどうかと話したところ、津村先生が当時の学長の米田さんにはかり、歯学部か薬学部をつくる計画がなかなか進まなかった時期でもあって、建築学科の設立にいたった」(『旧教職員だより』『神奈川大学工学部建築学科創設20周年記念誌』1985年)。まずこのあたりで、ご記憶のことをお聞かせください。

**高木** 私は学科が発足してから半年くらい経って移ってきたから、その前の段階はあまり知らないんです。応用化学科や電気工学科あたりは東工大で定年になった先生方が来られて、機械工学科は津村利光先生(1898-1989)が学科長をされていた。それで谷口先生はご自宅が自由が丘で、津村先生とご近所だったんですよ。だからご近所付き合いで、何か話があったのかもしれませんが。それで谷口先生が人集めをされた。谷口先生はもともと東京高等工業学校(蔵前にあった東京工業大学の前身)でしたが、東大で論文を書かれているので、そこで知り合いだった**堀口捨己先生**(1895-1984)などに声をかけて、呼んでこられた



【図1】1962年撮影の横浜キャンパス全景。古い木造校舎と真新しいRC造校舎(設計=RIA建築総合研究所)が入り混じる。8号館の建設は1965年4月の建築学科開始に間に合わず、研究室の入居は翌66年1月まで先延ばしになった。

のだと思います。

**内田** 時代の要請のなかで、次に建築が行けるぞということですか。

**高木** 学科設立の1年前が東京オリンピックなので、それに向けていろいろな建物、道路、新幹線、要するにスクラップ・アンド・ビルドをやっていたわけです。建設関係はものすごく景気がいい時代で、技術者が足らなかった。そういう時流に乗って、あちこちで建築学科をつくりだしたんです。ですから卒業生は引く手あまただったし、どこの大学も定員オーバーでね。神奈川大も定員80名で始まったのが、その倍以上の学生を入れてしまった。本当は4階の製図室は一部屋で足りるはずだったのに、二部屋にしないと入りきらない。

**内田** それで二部屋なんですか。今もそうですが、二部屋で同時に授業をするなんて、どうしてこんな不便なことをしているのかと思っていました(笑)。谷口先生は構造物用動的試験装置を据えた実験棟、つまり12号館もつくられました。これは当時は東工大にもなかったものです。

**高木** 地震力に対する実物大実験をするのは谷口先生の一つの夢で、神奈川大学に来るときにあれをつくるのが、まず一つ条件だったようです。おそらく学長の**米田吉盛さん**(1898-1987)



米田吉盛

教育者・政治家。愛媛県出身。1926年中央大学専門部法学科卒業。1928年に横濱学院を開設し、1949年の学制改革で神奈川県に移行後は初代学長に就任、1951年からは理事長を兼任（ともに68年まで。78年に名誉理事長）。また、戦前戦後で衆議院議員を計4期務めた。勲二等旭日重光章受章、正四位。



谷口忠（在職1965-70年度）

建築構造学。大分県出身。1921年東京高等工業学校（現・東京工業大学）卒業。東京帝国大学助手などを経て、1929年東京工業大学助教授に着任（36年に教授、61年に名誉教授）。日本建築学会賞・同大賞受賞、勲二等瑞宝章受章、正四位。著書に『耐震構造汎論』（佐野利器との共著、岩波書店）、『建造力学』（裳華房）など。

と、そういう約束があったと思います。

**内田** それこそ相当なお金をかけたわけですよね。僕らも入学するときに、構造実験の設備がすごいと聞いてきたので、当初は神奈川大学の建築学科は構造がメインなのかと思っていました。今、建築学科は女子の割合が2割弱で、他の大学と比べると少ないですが、これももしかしたら、当時の構造のイメージが残っているのかもしれません（笑）。谷口先生から直に聞いたのではなかったと思いますが、建築はシンメトリーがいちばん経済的で美しい、構造計算もシンメトリーなら半分計算すれば済む、そういう言葉が記憶に残っています。ただ、建築はやはり歴史や意匠もあるわけですね。実際、授業を受けてみると、私のときは歴史で**竹島卓一先生**（1901-1992）がいたり、それからデザイン系も高木先生や**白濱謙一先生**（1926-2010）がいて、全体のバランスは取れているなと思いました。

**中井** 当時の学報に、谷口先生が、学科をつくるに当たっての主旨のようなことを書かれているんです。「大建築家となるための修養に必要な条件は第一に大自然の法則を深く研究した科学者でなければならない。第二に社会組織、経済機構、産業組織、人口問題等都市学に通暁し、新しい環境を創造する技術者でありたい。第三には真の幸福は何かを追求した修道者、すなわち哲学者で禅僧のように実践的に真・善・美を悟り得た人格の所有者が理想である」。そして当時の建築教育批判もされていて、「最近の建築教育は、単なる知識と技能を授けた職人の養成に終わっているように思われる。社会科学と精神科学の一致した広い視野に立って総合的な見解を持つ建築技術者の養成こそ急務だ」と（『横顔』『神奈川大学報』77号、1965年）。こ

のあたりに神奈川大のユニークさがあるでしょうか。

**高木** 谷口先生自身は構造屋さんだけれども、建築にデザインがあることは十分ご存知ですからね。あの頃、東工大には谷口吉郎先生（1904-79）や清家清先生（1918-2005）、僕も清家研出身ですが、そういうデザイン系の先生方がいらしたわけですから、そのあたりも参考にされていたと思う。

**中井** そこは大事なところですね。私立大学でたくさん建築学科ができるときに、例えば東海大学なら山田守さん（1894-1966）、明治大学なら堀口捨己さん、日本大学なら佐野利器さん（1880-1956）、そういう学科を引っ張る方がデザイン系なのか構造系なのかで、だいぶカラーが違ってくる。

**高木** 谷口先生は一応網羅されたのでしょね。大御所の堀口先生や竹島先生も呼ばれたし、非常勤教授の渡辺要さん（1902-71、当時明治大学教授）は、それこそ「建築計画原論」という言葉をつくった先生ですからね。

**内田** 谷口先生は学生には怖い印象もありましたが、どういうお人柄でしたか？

**高木** 怖そうですね、真面目な方でした。僕らが学生の頃は、お喋りしているとチョークが飛んでくる（笑）。

**金丸** 授業中、時折ドイツ語で板書されてね、できれば日本語でとお願いしたら、「何を言うか！」と叱られました（笑）。

#### ■ 歴史系の特徴―堀口捨己先生と竹島卓一先生

**内田** 当時、堀口先生も明治大学を辞めて、70歳で来られるわけですね。堀口先生は実際に授業をなさっていたのですか？

**高木** されていました。私はよく堀口先生の建築史の授業の手

差しスライドを手伝いましたから。

**中井** 設計も教えられていたのですか？

**高木** 設計は白濱先生あたりの担当で、堀口先生は指導されていなかったな。建築史のトレースの課題はよく出されていましたけどね。薬師寺東塔の断面図だとかを、小さなプリントの図から拡大して、ケント紙にインキングでコピーする。

**金丸** 僕らのときは竹島先生の西洋建築史で、エンタシスの柱を描かされました。

**内田** エンタシスってどう描くんですかと聞いたら、「T定規の後ろ側の曲線を使えばきれいに描ける」と言われて。

**高木** 竹島先生は最初は東洋建築史ですね。それと図学もやられていた。

**内田** 堀口先生は、基本的には授業のときに来られるだけで、大学にいらっしやることはあまりないですか？

**高木** そうですね。たぶんこの部屋（8-59）が使われたのではないかな。それか隣か。

**内田** やはりかなり厳格な方でしたか。

**高木** ええ。ただ、8号館が完成するまでは4号館を間借りして、同じ部屋に竹島先生なんか一緒にいたでしょう。朝からいろいろとお二人で建築の歴史の話がされていてね。××××××（貴重な建物）の中に入った話をしている。

**内田** すごいですね。

**高木** 僕が写真はないのですかと聞いたら、「ない」と言われました（笑）。堀口先生は学生のコピーの課題の採点をなかなかやってくれなくて、採点してもらいに、僕が大森山王のご自宅まで図面を担いで持って行ったことがありますよ。堀口先生が1枚

ずつ「A」とか「B」とか仰って、僕がそれを紙に控えて、そこからすぐ電話で教務課に報告する、もう間に合わないから（笑）。堀口先生が図面を見るときは舐めるように見てね、平仮名で「ほ」というサインを入れる。

**内田** 「ほりぐち」の「ほ」ですね。

**中井** 堀口先生の歴史は、日本建築史の通史ですか？ 必修科目だったのでしょうか。

**高木** 通史ですね。最初はほとんどの専門科目が必修だったんです。

**中井** 竹島先生が東洋建築史だと、西洋はどなたですか？

**高木** 西洋は堀口先生だったのではないかな。

**金丸** 僕らの時代はすでに堀口先生はおられず、竹島先生が西洋と日本の両方をやられていたと記憶しています。

**内田** でも竹島先生は法隆寺の話しかしなかった。法隆寺だけで半年（笑）。

**高木** それは昭和の大修理の責任者になっていたから。

**金丸** 「法隆寺だけで日本建築史は語れないでしょう」と文句を言いに行ったことがありますよ（笑）。今からすれば、あの授業のノートをきちんと取っていたら、素晴らしい資料になったと思うのだけだ。

**内田** そうですね。僕も初めは辞易しましたが、でもやっぱりすごいなと思った。

**高木** 歴史は実習として関西旅行というものもありましたね。僕は竹島先生の補佐で何度か付いていきました。法隆寺から法起寺に行って薬師寺まで、とにかく奈良の都を歩く。

**中井** そういった建築史の位置づけは、当時の大学も似たよ



堀口捨己（在職1965-68年度）

建築意匠。岐阜県出身。1920年、東京帝国大学在学中に同級生と分離派建築会を設立。以降、日本の近代建築を牽引する。数寄屋建築、茶の湯、日本庭園の研究、また歌人としても知られる。1949年明治大学教授に着任、1965年に退職し、本学着任。日本建築学会賞・日本芸術院賞受賞、紫綬褒章・勲三等瑞宝章受章。



竹島卓一（在職1965-71年度）

東洋建築史。三重県出身。1927年東京帝国大学卒業。東方文化学院東京研究所研究員、名古屋高等工業学校（後の名古屋工業大学）教授、法隆寺国宝保存工事事務所所長を歴任。1965年名古屋工業大学を定年退官後、本学着任。1972年国土館大学教授（～76年）。著書に『营造法式の研究』（全3巻、日本学士院恩賜賞、中央公論美術出版）など。

うなものでしょうか。先ほどの時代状況を伺うと、歴史をやるというよりはどんどん建てていこうという世相にも思えますが。

**内田** やはり歴史はいちばん縁遠い世界でしたよ。大学によっては歴史の先生がいなかったり、デザインの先生がちょっとやって終わりだったり。そういう意味で、歴史の専門家が二人いたことは珍しいと思います。

**高木** 東工大の西洋建築史は谷口吉郎さんで、日本建築史は藤岡通夫さん(1908-88)、その弟子に平井聖さん(1929-)がいた。だからそこも東工大方式に近いかもしれませんね。

### ■ 設計系の特徴—白濱謙一先生

**中井** 設計担当として白濱先生が着任された経緯はご存知ですか？

**高木** 僕が来たときにはいらっしやったので、やはり谷口忠先生が呼んでこられたのだと思います。

**中井** 谷口吉郎さん経由ということとは？

**高木** ああ、それもあるかもしれませんね。白濱先生の先生である谷口吉郎さんと忠先生は、東工大では隣の部屋ぐらいいましたから。それから同じく創設期のメンバーである構造の川崎浩司先生(1929-)は、もともと東工大で谷口忠先生の助手をされていました。

**中井** 白濱先生は1926年のお生まれですから、当時39歳。定年まで長くいらしたから、神奈川大の設計系は白濱イズムが強い印象があります。

**内田** それは確かにね。というか白濱先生は「建築はこうでなければならぬ」と明確に言うことを拒否していた先生ですよ。

**金丸** 非常に自由で、ある意味でいい加減(良い加減)だった。

**内田** 学生がこれどうですかと聞くと、決まってまず「いいんじゃない〜」という答えが返ってくる(笑)。でも学生がきちんと向き合えば、それだけのものを返してくれる。

**高木** お父さんが当時のニコンの社長でしたから、白濱先生は育ちが良いんです。だから気まぐれなところはあるんですけどね。

**中井** 私立大学は先生が入れ替わり立ち替わりになるので、師弟関係を繋いでいきにくいところがありますね。ただ、ここ数年

でも見ていると、なんとなく神奈川大らしさもあるように思えます。例えば女子が少ないということも絡むかもしれませんが、RIA による質実剛健な校舎、無駄なものが削ぎ落とされた建物が建ち並んでいるとか、個人的な印象ですが、思想的にリベラルな人が多いのではないかと。以前、白濱研のOBの方からは、白濱先生は作家としての建築家ではなく町医者のような建築家という言い方をされていたと伺ったこともあります。

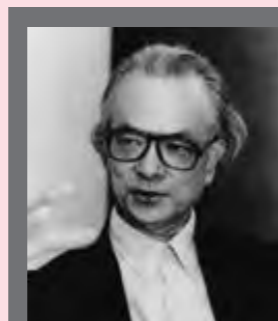
**高木** 白濱先生は住宅設計が主でしたからね。

**中井** 住宅設計でも、だいぶ後に特任教授として来られた**篠原一男さん**(1925-2006)のような方とは違いますよね。篠原先生のような作家主義というよりは、もっと民衆に寄り添うような。

**高木** 篠原さんは白濱先生が呼ばれたんですよ。お二人とも東工大でしたけど、白濱先生は谷口吉郎研の出身で、篠原さんは東北大学の数学科を出て、建築をやりたいくて清家研に来られた。



白濱謙一(在職 1965-96年度)  
建築意匠。東京出身。1952年東京工業大学卒業、島藤建設入社(〜54年)。東京工業大学研究生(谷口吉郎研究室)を経て、1961年大岡山建築設計研究所設立。ギリシアの伝統的な民家を継承して研究。編著書に『住宅I』『住宅II』(ともに「建築計画・設計シリーズ」市ヶ谷出版社)など。2011年の『RAKU』vol.7で追悼特集。



篠原一男(在職 1994-97年度)  
建築意匠。静岡県出身。1953年東京工業大学卒業、同助手に着任(62年から助教授、70年から教授、86年定年退官)。本学では特任教授を務めた。日本建築学会賞・同大賞・毎日芸術賞特別賞受賞、紫綬褒章・勲三等旭日中綬章受章。著書に『住宅論』『続住宅論』(ともに鹿島出版会)など。

**中井** 谷口さんより清家さんのほうが民衆的な感じがするのに、弟子のお二人はその逆ですね。白濱先生の作品を見ると、清家先生の影響を強く感じます。

**内田** やっぱり自分で独立するためには、師匠とは違うことをやらないといけないしね。白濱先生自身は確かに使い勝手のいいものを目指した。それは美しいものでもあるのだけど、篠原さんみたいな作品づくりの意識はないですね。

### ■ 学生運動の時代

**金丸** リベラルという話をすると、60年代後半、神奈川大でも学生運動が起こり、民主化闘争と呼ばれる運動が大きくなっになっていきました。建築学科でも建築学科闘争委員会という組織がセクトとは異なる立ち位置で大学の民主化と建築を語り、様々な活動を行っていた。僕らはその後のぶら下がり世代なのですが、当時たしか白濱先生は学生部長をされていて、大講堂で行なわれた「大衆団交」で、学生たちに一晩中、缶詰めにさせられていたことなどもあったと思います。

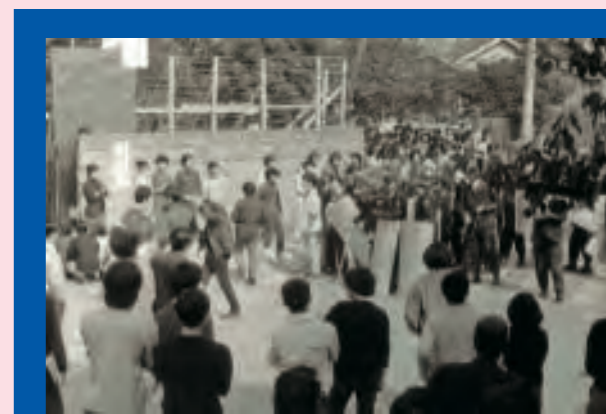
**高木** 団交(団体交渉)というのがよくありました。4期生なんてヘルメットを被って、8号館のマップホールあたりに机を積み上げてね。

**金丸** ただ、そういう学生たちとも白濱先生や高木先生は真摯に向き合っていた。私は7期生ですが、当時は**ロックアウト(学内立入禁止措置)**などもあり、紛争の影響で授業は4年のうち半分ほどだったのでしょうか。試験の代わりにレポートで卒業できた世代です。

**内田** 今の人には想像できないでしょう。朝、大学に来て、「あ、今日も入れないや」と。

**高木** あれは学生が封鎖したのではなくて、大学が学生の封鎖を解いてロックアウトしたんですよ。機動隊を入れて学生を排除してしまった。僕らも急に入れなくなって、資料も何も無い。それで学外教授会をしていました。2週間から3週間くらい入れませんでしたから。

**金丸** 僕たちは、なぜ大学側が門を閉ざして授業をできなくするんだと憤っていました。もともと神奈川大学の学生運動は、学内の民主化に端を発したものだだったんです。教授会権限や学則



【図 2】1971年、構内がロックアウトされ、機動隊と向かい合う学生たち。

改定に繋がる運動で、そこに一般学生も加わった。

**高木** 最終的に学長を選挙で選ぶようになって、それで一応決着したんです。選挙による最初の学長は、たしか建築設備の勝田千利先生(1908-81)だったと記憶していますが。そういう点ではかなり民主化されていった。授業形態も、それまでのぎりぎりに締め付けたかたちからすこし解き放たれてね。「カリキュラム闘争」とか言っていましたが、それまでほとんどが必修だったものを、半分くらいは選択科目にして、より自由に選ぶことができるようになった。

**金丸** 私たちが入学したときは卒業単位が136単位でしたが、初期は150単位近くあって、非常に多かったと思います。

### ■ 学科の充実と大学院の創設

**内田** 学科設立の2年後に**志水英樹先生**(1935-)が着任されますね。それはどういう経緯ですか？

**高木** 志水さんは東工大を出て大成建設にいたときに、シアトルの万博の設計コンペに通ってアメリカへ行き、そのまま向こうのルイス・カーン(1901-74)の事務所で働いていたんです。それで戻ってきて就職をどうするかというときに、東工大に谷口忠先生の息子さんの汎邦さん(1931-)がいて、汎邦さんの口利きで神奈川大学に来られた。

**中井** どなたかの後任ではなく、志水先生の枠がプラスされたわけですか？

**高木** 志水先生はどちらかという都市計画ですよ。あの頃、最初からスタッフ全員が揃っていたわけではないんです。学年が進むにしたがって必要な先生が入ってくる感じでした。

**内田** 今だと最初からスタッフを揃えないといけませんけど。

**高木** 志水研の助手の福井通さん(1945-)は卒業生でしたね。福井さんは一期生？

**金丸** 一期生です。

**長島** 新しい先生を呼ばれるときは、例えば谷口先生に強いイニシアティブがあるわけですか？ それとも皆さんで相談して決めるのでしょうか。

**高木** 今の公募みたいなやり方ではないですね。「この人でどうでしょう？」という人づてで。まあ、履歴書ぐらい見せてもらって。

**長島** やはり卒業生が教員になるというのは、一つの望ましい姿でしょうか。

**高木** それはそうでしょうね。

**中井** でも新設だと最初は無理ですよ。そのあたりに関連する話で、建築学科は最初から大学院があったわけではないですが、一般的に言うと、大学は研究機関として、研究者や教員を養成するという面もあるわけですよ。

**高木** 大学院は何年にできていますか？

**中井** 修士課程が1971年。ですから最初の卒業生が出る時には、まだ大学院がなかった。博士課程はかなり後で、1990年。

**内田** 博士課程は僕らがいた頃もなかったから、外に出ないといけなかった。

**中井** 大学院がないと研究室の運営もしづらと思うのですが、大学として学位を出して後進を育てていくという方向性は、あまり意識されていなかったのでしょうか。

**高木** 意識はしていたのだけど、やはり体制が整わなかったのでしょう。要するにドクターを持ったスタッフがそれだけ揃っていなかった。大学院は文部省に申請するにもいろいろ必要ですから。

**中井** 内田先生の頃は博士課程がなかったと仰いましたが、学生側からすると、それは不自由ではなかったですか？ もっと研究をしたいと思っても大学院がないと。



**志水英樹** (在職 1967-87 年度)  
都市計画。大阪府出身。1958年東京工業大学卒業、大成建設入社。1962年ペンシルヴェニア大学大学院修士課程に入学、1964年修了後、ルイス・カーン建築設計事務所に入所(67年帰国)。本学退職後は東京工業大学・東京理科大学・駒沢女子大学で教授を務める。日本建築学会賞受賞。著書に『街のイメージ構造』(技報堂出版)など。

**内田** それはそうですね。僕自身は大学4年のとき、歴史の**森史**<sup>ちか</sup>**お**先生(1938-)に修士課程に進学しますと言ったら、「ああいよいよ」と言ってくださって、それでいざ行くとなったら、「ごめん、僕辞めるから」と言われた(笑)。

**金丸** 当時は社会に出て働かないといけないという思いを持っている学生が非常に多かったですね。

**内田** ええ。だから修士課程はあっても、学生はほとんどいなかったんです。就職も引く手あまたで待っているという環境があつて。

**高木** 研究者になろうなんて学生はほとんどいなかった。4年が終わったら即社会へ出ていく。

**金丸** ただ、それがちょうど私たちの頃にオイルショックがあつて、就職がぜんぜんないという時代になった。

**内田** それと当時は研究と言っても、今とすこし意味合いが違う。今みたいに学術論文をどんどん書くという意味の研究体制ではなかったですよ。僕が博士課程でいた東工大は、当然のごとく「黄表紙」(日本建築学会論文報告集)に論文を書かないといけないという教育をしていました。だから神奈川大のそういう気質は外へ出て初めて分かった。そういう意味では、神奈川大でドライに論文を発表していくという流れができたのは、1977年に日工大から**西和夫先生**(1938-2015)が来られて以降でしょうね。

**高木** 彼自身が博士号を取ってきたからね。設計系に関して言えば、その頃までは作品を発表することが目標であつて、研究をして博士論文を書こうとか、あるいは書けるとは、正直あまり



**森史夫** (在職 1972-74 年度)  
建築意匠。東京出身。1963年日本大学卒業。東京工業大学助手(藤岡通夫研究室)を経て、本学専任講師。1975年東京造形大学助教授着任、1980年から教授(~2004年)。著書に『自然感覚の木造住宅—カントリースタイルから現代民家調まで』(主婦と生活社)、『亜流年譜住宅造形森史夫』(デザインオフィースケイ)など。

思っていませんでした。東大の吉武泰水先生(1916-2003)の「建築計画の研究」(1964)が先駆けですね。

**内田** 西先生は若くしてドクターを取って、バリバリの研究者だったから、そういう意味で学科の体質改善がされた。それまではもうすこしゆったりしたものづくりを、みんななんとなく志向していたんじゃないかな。具体的に言うと、修士の学生が建築学会の大会に論文を出すということを、僕らがいた頃はあまりやっていませんでした。でも西先生は、論文を書いたら発表しなさいと散々言われていた。

**金丸** 院生も多かったですよ。

**中井** 分野にもよると思うんです。設計系はやはり実務をしたという学生が多いと思いますが、歴史は大学にいないとできませんし。

**内田** だから西先生が、論文を書けば研究者としての道が開けるということを示してくれたとも言えるかもしれない。つまりそれまでの谷口先生も堀口先生も竹島先生も、研究者としては大家だから、大会論文を書くとかいうレベルではないわけですよ。

**中井** 西先生の前が森先生ですか？

**内田** 森先生は住宅の設計がやりたくてしょうがなかった。森先生はお父さんが**森蘊**<sup>おさむ</sup>さん(1905-88)という日本庭園の研究の大家ですが、その森蘊さんと東工大の藤岡通夫先生が研究仲間だった関係もあつて、もともと藤岡先生のところで助手をされていた。それで竹島先生が辞められた後、専任で神奈川大学に来られた。でも3年で辞めてしまったんです。やはり歴史よりデザインがやりたいということで、東京造形大に移られた。



**西和夫** (在職 1977-2008 年度)  
日本建築史。東京出身。1962年早稲田大学卒業。1967年東京工業大学大学院博士課程修了。日本工業大学助教授を経て本学着任。日本建築学会賞受賞。著書に『建築史に何ができるか—町並み調査と町づくり』『建築史から何が見えるか—日本文化の美と心』(ともに彰国社)など多数。2015年の『RAKU』vol.11で追悼特集。

**中井** 西先生がいらした経緯は？  
**内田** その頃、神奈川大の歴史の授業は、東工大で白濱先生と同期だった平井先生が非常勤で来られていたの、その関係で、同じ藤岡先生の弟子である西先生になったのだと思います。

### ■ 初期の設計教育

**中井** 設計は白濱先生を中心に教えられていたということですが、今のように課題を出して、それを指導するというやり方ですか？

**高木** はい。学生が設計をして、その間に何度か、1対1で向き合つてのチェックですね。非常勤の先生も何人か並んでいて、1人ずつその場で。

**中井** 非常勤はどういった方が？

**高木** えーとね、卒業生がけっこう来ていたけれど。

**金丸** それも白濱先生、高木先生あたりが議論されて、何割かは卒業生にしたいという思いがあつた。それがずっと今に繋がっている。卒業生だと年齢的な距離も近いですから、けっこう丁寧に見てくれました。

**中井** 卒業生だと最初の頃はすごく若いですよ。

**金丸** 30代ではなかったでしょうか。彼らも設計事務所をやっていました。

**内田** そのあたりはやはり今とは違う。

**中井** 最近はデザイン系の人気がなくて、構造や環境志望が多いんです。そこから溢れた学生がデザイン系に来るという。

**高木** 昔と逆ですね。僕がいた頃はデザイン系が多かった。研究室の定員は決めてあったから、希望数がオーバーすると切るしかなかった。

**中井** やはり独立して設計をしたいという人が多かったのでしょうか？

**高木** 多かった。あの当時の設計をやる人は、将来は自分で独立して事務所を構えるのが夢でしたから。そのためにいくつか事務所を渡り歩いて、事務所のやり方を覚えて。まあ、ゼネコンの設計部なんかに入った人はそのまま続けていたかな。あの頃は今で言う大手5社にもけっこう入っていましたからね。

**中井** 将来独立したいという人はどのくらいの割合でしょうか。

**内田** 飲み会なんかでは、10人いれば、7、8人は、将来は田舎に帰って事務所を構えると言っていましたよ。東京ではなく田舎に帰って事務所を開くというのが多かった。

**金丸** ただ、結果的にオイルショックで帰れなくて、東京で勤め始めて都心で事務所を持つというのが、私たちの学年からすぐ下5年ぐらひは多かったと思います。首都圏で神大卒の設計事務所は、案外多いかもしれません。

**長島** 神奈川大学は割と全国から学生が来るのでしょうか。

**内田** そうですね。一つには地方試験を売りにしていたんです。北海道の札幌あたりでもやったりするので、それで全国から集まる。

**金丸** 私のような地元出身者は3割もいなかったですね。

**内田** かつ奨学金制度があったり、授業料も安かったんですよ。当時、私学では東京理科大と神奈川大が、国立並みに安いと言われていた。

**金丸** 年間8万円くらい？

**内田** それで親から受けると言われた。

**長島** それで独立心が高い学生も多いと。

**金丸** ずっと帰らずに、四六時中大学にいて生活をしている。

**内田** 4年になると、製図をやる連中はみんな下宿を引き払ってくる。みんな布団を持って製図室に行くんです。それでペニヤで仕切って、自分の部屋を作ってさ。朝やって来ると、味噌汁のにおいがしてきたり(笑)。だから今の製図室の使い方もその延長

線上にあつて、夜間使用が許されていますよね。

**高木** 昔は他学科から、夜中も電気が点いているじゃないかとクレームが来た。だから我々が、あれは遊んでるわけではなくて、みんな勉強しているのだからいいではないかと言って。

**中井** 製図室も研究室も、空間的には恵まれていますよね。他大学の先生が来ると、皆さん驚いて帰ります。

**高木** RIAが基本設計したあたりから白濱先生が関わっていて、建築学科の部屋割をどうするか、けっこう口を出していたんです。それが基本計画に反映された。

**中井** よくこれだけのスペースを獲得してくれたなと思います(笑)。『RAKU』vol.8(2012)のキャンパス特集のインタビューで、RIAの近藤正一さん(1930-)にお話を聞いたところでは、米田吉盛さんは「建築学科の先生の意見は聞いたら駄目だ」と言われていたそうですね。

**内田** それはやっぱり、自分の仕事にしてしまうから。

**高木** 建築学科ができたときにはもう**RIAのキャンパスプラン**があつて、8・9・10号館の工事をしていました。堀口捨己さんはずっと分離派の人ですね。僕は以前石本事務所にて、石本喜久治さん(1894-1963)も分離派だから、「君、喜久治君のところに行ったのか」なんて言われたのだけど、RIAの山口文象さん(1902-78)はその分離派に製図工でいた。それで**大講堂**(1969)、今はもうないけれども、あれを建てるときに、8号館の5階から見ていた堀口さんが「文象君はまったく何をやってるんだ」と言われたんです(笑)。つまり、もともと長手方向に梁を渡す構造だったんです。

**中井** 最終的には短手の門型ですよ。

**高木** 長手で架けていって段状にするつもりだったのが、工事中に梁を落としてしまった。それで谷口忠さんは構造屋さんだから、これはまずいということで、結局、短手方向でトラスを組ませた。そのとき堀口さんがつぶやいたのを傍で聞いていたんです。

**金丸** 大講堂はいい建築でしたけど。

**内田** きれいだった。あれは好きでした。

**中井** 校舎もかなり壊されてしまいましたね。



【図3】RIA 建築総合研究所によるキャンパス計画。手前の正門を入れて左に、帯状に屋根が架かる大講堂。その右隣に、キャノピーが張り出した本館。1953年に山口文象が設立したRIA (RESEARCH INSTITUTE OF ARCHITECTURE) は、建築家の作家主義ではない、社会を見据えた共同設計を旨とした。



【図4】大講堂(1969年竣工、1999年解体)内部。座席数3000。



【図5】左から8号館(1965年竣工)、本館(1959年竣工、1999年解体)、3号館(1955年竣工、2012年解体)。1966年撮影。

**高木** **本館**(1959)もなくなっちゃったしね。本館もいい建築で、「建築設計資料集成」(日本建築学会編、丸善)にも載っていますよ。

#### ■ 昔の学生と今の学生

**中井** **高橋志保彦先生**(1936-)がいらしたのは1988年で、**室伏次郎先生**(1940-)が94年。この頃はまだ人づての採用ですか？

**内田** 高橋さんは僕らが学生の頃に、もう非常勤で来ていたね。どうして来られたのかは分からないけど、習ったことは確か。

**長島** 50周年記念誌で、「1973年、アメリカ留学時代に知己を得た志水英樹教授から推されて、以来13年間、本学の非常勤講師となった」と書かれていました(高橋志保彦「創設50周年によせて」『神奈川大学工学部建築学科 創設50周年記念誌』2014年)。

**金丸** 高橋先生は、志水先生が東工大に戻られた後に専任になられました。

**中井** 室伏先生は誰の後任でもなくて、新しく研究室を増やしたと聞いたことがあります。

**高木** うん、そうかもしれません。

**内田** 今、研究室を増やすのは大変ですよ。

**金丸** あときはデザインコースの学生が圧倒的に多くて、その議論があったのではないですか。

**中井** 室伏先生という人選も絶妙な気がします。デザイン的に奇をてらわず躯体をストレートに見せるという系譜みたいなものが、無意識にできている気がしてきます。

**内田** いま活動している弟子たちの仕事を見ていくと、確かに繋がってくるかもしれないですね。

**長島** 高木先生は学科が始まった頃と退職される頃で、学生の変化はお感じになりますか？

**高木** 僕はあまり感じていなかったですね。最後のほうも、けっこうみんな元気よかったもんな。

**中井** ここ10年くらいで大きく変わったのかもしれないですね。いわゆる「ゆとり教育」との関係もあるのかもしれない。

**金丸** 私は2000年まで建築学科の所属だったんです。最初は高木先生の研究室で教務技術職員として勤務していましたが、最後の10年くらいはデザインコースにいました。朝が早くて、だいたい8時過ぎにコーヒーを淹れていると、研究室関係なく学生が来るわけです。そこでコーヒーを飲みながら1時間くらい、課題のことも話せば、彼女のことも話す。その頃までの学生さんは元気があったと思いますね。

**内田** 僕が神奈川大学に戻ってきたのは2009年ですが、一つ感じたのは、学生の気質がだいぶ小ぶりになった。就職するにしても、例えばさつき先生が仰ったように、昔は「大手5社の設計部に行きたい」だの平気で言いましたよね。今の学生はそういうことを言うのがほとんどいない。どうせ自分なんて相手にしてくれないみたいな雰囲気を感じます。別に大手を目指さなくてもいいのですが、みんながみんな現実路線で、自分はこれをしたいという話ができる学生がいなくなりました。

**中井** それは世の中の風潮かもしれないですね。デザインの社会的な意味が分からないのかもしれない。震災もありましたし、環境の問題もこれだけ言われていますから、勢いそちらのほうに目が行ってしまふ。

**内田** デザインでは解決できない、みたいな。

**高木** 作りたいという意欲が湧かないのかね。

**金丸** 建築の設計って、哲学や思想とか、とにかく並行してそういう勉強もして、それと建築がどう繋がっていくのか、それで社会とどう対峙していくか、そういう議論を青臭くやっていた気がしますけどね。

**中井** 僕もぎりぎり、哲学や社会学なんかも含めて建築を考えようとした世代ですが、それがどこかでぶつ切り切れてしまった。最近学生が熱心なのは、市民とのワークショップみたいなものですね。もっとストレートに社会と関わるというか、思想や学問よりも実践あるのみ。だけど、それだとその先があまりない。そういう意味では谷口忠先生の言葉が今また響いてくると思います。「社会科学と精神科学の一致した広い視野に立つて総合的な見解を持つ建築技術者の養成こそ急務だ」。



**高橋志保彦**  
(在職 1988-2005 年度)  
建築意匠・都市計画。宮城県出身。1959年早稲田大学卒業、竹中工務店入社（～68年）。1965年ハーバード大学大学院修士課程修了。1969年独立。2003年より中国の武漢理工大学客員教授（～10年）。著書に『都市環境のデザイン—空間創造の実践』（プロセスアーキテクチャー）など。現在、本学名誉教授。



**室伏次郎**  
(在職 1994-2009 年度)  
建築意匠。東京出身。1963年早稲田大学卒業、坂倉準三建築研究所入所。1971年独立、1984年よりスタジオ・アルテック主宰。日本建築学会賞受賞。著書に『埋め込まれた建築—58の断章』（住まいの図書館出版局）、『いい(家)をつくりたい』（光芒舎）など。現在、本学名誉教授。

## ■ 神大建築の伝統

**中井** あらためて、高木先生は神奈川大学の建築、特にデザインコースの特徴をどうお考えになっているのでしょうか？

**高木** うーん、学生にとってはかなり自由でいいと思っていました。要するに、どこの研究室に顔を出そうと、誰とつるんで何をしよう、まったくお構いなしでね。僕がいる頃は、学生たちがよく泊まり込んでコンペをしていましたよ。あの頃、コンペはけっこう入選していた。

**金丸** 研究室に所属はしているのだけど、かなり横断的で、接点がそれぞれたくさんあった。ですから白濱先生のところでコンペをやるぞと言うと、他の研究室の学生も絵を描いて持って行ってね。ゼミ生ではないのだけど、そこに混ざって一緒に学ぶ環境がありました。

**高木** 出入り自由という感じ。今から思うと、僕なんか、うちの研究室の学生だけでなく他の研究室の学生もよく知っているんですよ。

**中井** 神奈川大は、研究室の敷居は低いほうですね。6階の各研究室は、研究室に所属していない下級生でも製図の場所として使えるようにしていますし。ただ、自由というのは、単に学生にとって活動が好きにできる場として自由ということなのか、あるいはその自由さ自体からなんらか学ぶものがあつたのか。

**高木** 自由に徒党を組んで色んなことをみんながやっていた。つまり自主性ですよ。

**金丸** あその研究室に行くにああいう本があるとか、こういう議論が成立するとか、それぞれの興味でその都度どこに行けば何が手に入るか、みんな分かっていた。

**内田** 高木先生がいらした頃は、学生はいつもなんとなく組んず解れつ大学をうろろうろしていたんですよ。今の学生は「あ、もう時間、アルバイト」と言って、パッと消えてしまふ。

**高木** 他にやることあるんだね。

**内田** やっぱあの頃、僕も学校が楽しかった。帰るのが惜しくて、誰も帰ろうとは言わなくて。

**中井** それは何をしていたんですか？



【図6】 往年の高木幹朗先生（1987年）

**内田** なんとなく建築の話はしているんですよ。誰かがこの本を読んだと言ったら、「そうか、じゃあその本読もう」とかさ。友達の下宿に行くと、SD選書が何冊あるか見て、読んでいないのがあると早速借りて読むとかさ。みんなそんなことをやっていました。

**金丸** 上級生は下級生の課題を見に行くわけです。それであれこれ言ってチェックしておいて、自分の卒計のときに「あいつを呼ぼう」というふうになる。

**内田** 上級生は1年違うだけで知識量が違って、いろいろ言われていたんです。今はそういう差がないですね。

**金丸** ある時期までは、卒業生の事務所から「誰かいい人いませんか？」という話もずいぶん来ていました。2年生か3年生くらいになると、今で言うオープンデスクというか、卒業生の事務所のお手伝いをするのが当たり前にあった。だから卒業生が大学に来る機会もけっこう多かったです。

**高木** 研究室にも遊びに来ましたからね。

**中井** 縦の繋がりをもっとつくらないといけないですね。

**金丸** 卒業設計も私の頃はかなり自由でした。図面を描かずに卒業する。絵を描くやつがいて、写真を撮るやつがいて、私も変なことをしていましたけど、そういう卒業設計をどこかで展示すべきだという話になって、市民ギャラリーにお酒を1本持って行って、「タダで貸してほしい」と交渉した。お酒は受け取ってもらえませんでしたけど(笑)。



高木 関内でしたっけ？

金丸 はい。「建築に貸すスペースはない」と言われて大激論をした結果、3日間だけ入れ替えの期間に貸してもらえたことになったんです。いざ準備となって僕たちはお金がないものですから、展示会の趣意書を書いて先生方にお金を無心したりして(笑)。「パンドラの箱」展と題して卒業生の有志で開催しました。それがきっかけで、何年か卒業制作展をしていたんですけどね。

内田 そういう意味では、当時の先生方は、学生が主体で動くことに関してはバックアップしてくれましたよね。製図室で寝泊まりしているのも、普通だったら怒られるけれども。

高木 それは自分たちも学生時代にやってきたから。だから自分たちと同じことを今の学生もやっているなと思っていたんですよ。

中井 その神奈川大学らしい自主性や自由な場を、今後どう続けていくのか。高木先生は今、大学を離れたお立場で、今後の建築教育がどうあるべきだと思いますか？ ぜひご意見を参考にさせていただきたいです。

高木 難しい(笑)。

#### ▼図版提供・出典

[図1] [図2] [図7] 神奈川大学デジタルアーカイブ

[歴代教員肖像] 篠原一男先生=『篠原一男 住宅図面』(彰国社、2008年)、森史夫先生=『住宅建築』1999年10月号、高橋志保彦先生・室伏次郎先生=各先生提供

[その他] 神奈川大学所蔵



【図7】1960年代の建築学科の学生たち。

## 江戸期の百姓家の探索から始め、行きついた先は 津田良樹

### 私の学問的生き立ち

私の神奈川大学入学は1968年4月のことである。私の学生時の経歴と神奈川大学を中心に社会状況を整理すると略年表のようになりそう。神奈川大学において学生の民主化運動が起こったのが、私が入学した年の1月であり(「原子力空母エンタープライズ寄港阻止支援カンパ」が出発点である)、それがほぼ沈静化したのが約10年ぶりに大学当局により学費改定が断行された1979年のことである。その間、世に言う学園紛争(学生側からは紛争ではなく闘争であった)が吹き荒れていた。大学当局は学費の値上げを行ないたかったのだが、学生側の力が強く、値上げしようにもできない時期が続いた。そのため、一時は国立大学よりも授業料が安く、日本一学費が安い大学でもあった。当然のことながら、そのような状況の中で私に刷り込まれた反体制・反権力の精神構造は深く沈潜し、以降の私の考え方の通奏低音として今も響いている。

#### 略年表

1968(昭和43)年1月 原子力空母エンタープライズ寄港阻止支援カンパ  
1968年4月 津田神奈川大学入学  
1969年1月 東大安田講堂攻防戦  
1969年3月 堀口捨己退職  
1969年9月 丹羽邦男(経済学部教授、恩師の一人)学長代行  
1970年3-9月 大阪万博  
1972年3月 津田学部卒業、竹島卓一退職  
1972年1月 長倉保(経済学部教授、恩師の一人)理事長  
1973年4月 津田1年間の就職後、大学院修士課程入学  
1973年9月 内ゲバにより学内において学生死亡  
1975年3月 津田修士課程修了  
1979年4月 神奈川大学学費改定

ともあれ、68年に入学し、70年安保を経験し、72年の3月に学部を卒業している。さらに、1年弱の就職期間を経て、73年4月に大学院修士課程に入り、75年に修了している。その間、学内で内ゲバによる学生の死亡事件が起こっている。

そのような時代状況の中、カッコよく新しいものを創造するでもなく、むしろ見なおすべき時だと感じていた私が建築史に、そして権力者の建築の歴史ではなく、庶民住宅の歴史に向かったのは極自然なことであった。

### 初期建築学科計画系の教員

神奈川大学建築学科4期生として入学した私の前にいたのは堀口捨己(1895-1984)・竹島卓一(1901-92)等であった。とはいえ、堀口捨己を目の当たりにしたのは、学生大会で学生と対峙する向こう側の席に座る姿であった。東京帝国大学の卒業時に従来の建築様式を否定し建築の改革を図るべく「分離派建築会」を立ち上げた、ある種反逆者であった堀口が学生たちから追及される立場にいた。そんなこともあってか、堀口はまもなく退職して大学を去った。私とは1年間のみ重複であった。そのようなことで、堀口の講義を聴く機会は残念ながら私にはなかった。

一方、竹島卓一は私の卒研時の指導教員である。卒業と同時に大学を去った竹島の私は最後の弟子のひとりである。堀口がいなくなった後、建築史を担当したのが竹島であり、建築史をやりたいと考えた私の選択肢は竹島研究室しかなかった。竹島は後に日本学士院恩賜賞を『营造法式の研究』(全3巻、中央公論美術出版、1970-72)で受けた中国建築史の第一人者であり、法隆寺昭和大修理中の1949年の金堂内部の火災後、修理工事事務所長を務めた法隆寺の建築に造詣の深い先生でも

あった。竹島の日本建築史の講義は法隆寺に始まって法隆寺に終わるものであった。すなわち、講義の主要部分が法隆寺の諸問題についてであった。後に『建築技法から見た法隆寺金堂の諸問題』（中央公論美術出版、1975）にまとめられた内容が主なものであったのであろうが、当時の私はそこまで理解する能力に欠けていた。

竹島については、最後の卒業生としてぜひ触れておかねばならぬことがある。世に言う「竹島・西岡論争」についてである。1944年落雷により焼失した法輪寺の復元再建が成った1975年に毎日新聞紙上で応酬された論争がそれである（4月9日夕刊、同15日夕刊）。単純に記せば、設計者竹島の論は、飛鳥建築は素晴らしいものではあるが、構造上の欠点も併せ持っており、飛鳥建築の意匠は当然尊重するものの、後世の技術（鉄材による補強も含め）をも駆使して施工すべきとする。これに対し、大工棟梁の西岡常一（1908-95）の論は、特に竹島の目立たぬ箇所鉄材による補強をするという点を取り上げ、「サビが木を腐らせる」との持論を展開し、復元には「新しいさかしら知識」は採用せず、純粋飛鳥の技術で復元すべきだとするものである。飛鳥当初の塔は焼失し、まったくの昭和の新築であることを考えれば、どちらがよいか判定に苦しむところだ。結論的には、両者とも塔をいかに長く保つかという思いから出ており、最低限の鉄材の使用ということで折り合せて工事は進められたことになっている。これで終われば、私が付け加えることはない。ところが、その後、西岡常一・小原二郎『法隆寺を支えた木』（日本放送出版協会、1978）で脚光を浴び、時の寵児となった西岡が『木に学べ—法隆寺・薬師寺の美』（小学館、1988）のなかで、「竹島先生は月に一回しか見に来ませんよ。こっちは仕事せならんから、[鉄材を]入れなならん所でも入れずにやるわけや。[略]できてしまえば、見えないんです。今、病気で伏せておられますけど、結局知らずじまいだったでしょうな」（p.193）と語るに及んでは、あまりにも信義にもとることではないかと言わざるをえない。補強材を入れると合意していたにもかかわらず、見つからないことをいいことに無視したというのである。いまま西岡神話が継

続していることを考えれば、この点については、一言異議申し立てをしておきたい気持ちが収まらないのである。

### 私の調査・研究の足跡

73年4月に修士課程に入学したわけであるが、退職した竹島の後任として森史夫（1938-）がいたが大学院は担当しておらず、大学院の建築史担当者はいない状態であった。そのため、私は、森の部屋にいるものの、形式的には白濱謙一（1926-2010）の指導という形であった。そのため森、白濱、さらには東京工業大学の平井聖（1929-）の指導を受けることになった。また、経済学部の経済史を専門としていた丹羽邦男（1928-94）、長倉保（1923-96）の部屋にも出入りしていた。研究テーマは卒業研究以来の民家史研究である。

そのような環境の中で、栃木県史に関わっていた長倉から江戸期の百姓家の平面図集のごとき古文書を紹介された。あとでわかったことだが、その古文書は江戸時代に将軍が日光東照宮へ参詣する日光社参に関わる史料で、大勢のお供を伴うために、供侍を下宿させるために街道周辺の村々の民家の様子を調べた史料であった。それらの古文書を収集・検討することによって修士論文を書き、後に学位論文に繋がったのである【図1】【図2】【図3】。日光街道・日光御成街道沿いの旧家を訪ね歩いて史料収集は進められた。75年3月に提出した修士論文が「近世民家の文献的研究—日光社参関係文書を中心に」である。当時の修士論文「審査要旨」によると、審査員は「東工大教授平井聖・助教授白濱謙一・助教授志水英樹」であり、平井が記したと思われる審査要旨には「秀れた着眼点と足による史料の収集及び発見をもとに今後の民家史研究に一つの新しい方向をあたえるものとして高く評価する」とある。以降このテーマをライフワークとして引きずってゆくこととなる。いまから振り返ると、この時一気に学位論文まで書き上げておくべきだったのではないかと思われる（失敗）。その後、77年、西和夫（1938-2015）の建築史研究室の助手となり、教育・研究を継続することとなった【図4】【図5】。以降の調査研究を大括りに分けて記せば以下ようになる。



【図1】旧花井家住宅



### ● 日光社参史料からみた民家と集落に関するおもな論文等

「日光社参史料からみた江戸時代の民家の主屋規模と平面形式」『日本建築学会計画系論文報告集』413号、1990年7月（平井聖と共同）  
「日光社参史料からみた分棟型民家の消長」同416号、1990年10月  
「日光社参史料からみた江戸時代の民家の主屋規模・平面と階層構成・家族人数の関係」同418号、1990年12月  
「日光社参史料からみた江戸時代の関東地方北部における民家の部屋名・造作・施設」同426号、1991年8月  
『街道の民家史研究—日光社参史料からみた住居と集落』芙蓉書房出版、1995年  
「農家と集落」『新建築学体系2 日本建築史』彰国社、1999年  
「落穂拾いから全体像が見えてくるのか?—文献史料からみた民家の実態」『すまいろん』53号、2000年1月



【図3】『街道の民家史研究』  
修論時からご指導賜っている平井聖先生のお取り計らいのもと、熊本大学の北野隆先生（1940-）のお世話で、学術博士の学位を1994年に授与された。その学位論文を中心にまとめたのがこの本である。本の出版には大学院において古文書解読の手ほどきを受けた国立史料館の浅井潤子先生のお骨折りをいただいた。

### 【図2】日光社参史料「藤助」宅

修論段階で入手できた日光社参史料4冊のうちの1冊が『明和七年庚四月、江ヶ崎村百姓小前絵図』であり、この帳簿に収録された絵図が「藤助」である。この「藤助」宅が当時埼玉県蓮田市に現存していた元文3（1738）年建築の花井家住宅である。花井家住宅の平面と絵図がよく一致することが確認でき、日光社参史料の記事内容の信ぴょう性を高めることができた。日光社参史料は各村の全百姓家を「藤助」のように平面図で示した平面図集である。

日光街道・日光御成街道沿い集落の旧家を訪ね歩くことから始まり、収集した日光社参関係文書をもとに学会梗概集を手始めに報告した。日光社参史料をもとにしたおもな論文が上記である。『日本建築学会計画系論文報告集』掲載論文を中心にまとめ、学位論文とした。学位論文を出版したものが『街道の民家史研究—日光社参史料からみた住居と集落』（芙蓉書房出版、1995）である。この研究で収集した日光社参史料は極めて貴重な史料であるにもかかわらず、論文には使ったものの、史料集として一般に公開することができなかった点は無責任の誹りを免れず、いまま心残りである。

### ● 文献史料を中心とした民家研究

「明治・大正期における農村の住環境について—神奈川縣納会による村是調査書等を中心に」『日本地域社会の歴史と民俗』神奈

川大学日本経済史研究会編、雄山閣、2003年  
「明治八年の『家券下図簿』からみた西国街道大山崎の民家と町並みについて」『生活文化史』48号、2005年9月  
「明治34-35年の神奈川県下の農村における住環境と家財道具——神奈川県農会による村是調査を中心に」『日本建築学会計画系論文集』621号、2007年11月  
「家屋台帳からみた対馬市上県町志多留の民家について」『年報 非文字資料研究』神奈川大学非文字資料研究センター、6号、2010年3月  
「対馬鰐浦にみる集落と家屋の持続と変容」「対馬市峰町木坂の集落と民家について」同7号、2011年3月

民家に関する近世期の古文書などの文献史料はもとより、明治期以降の「家屋台帳」や「村是調査資料」も取り上げた文献史料を中心とした民家研究である。

### ● 民家・集落調査

『吉田藤太郎住宅調査報告書』埼玉県小川町教育委員会、1984年  
「上越市中ノ俣および愛媛県二神島の調査を中心とする山村および漁村における民家・集落の比較研究1」『住宅建築研究所報』14号、1988年3月（西和夫と共同）【図6】  
「上越市中ノ俣および愛媛県二神島の調査を中心とする山村および漁村における民家・集落の比較研究2」『住宅総合研究財団研究年報』15号、1989年3月（西和夫と共同）  
『旧蓮見家住宅移築復原工事報告書』浦和市教育委員会、1995年  
『平田篤胤仮寓現状調査報告』埼玉県教育委員会、1997年

民家や集落の現地・実測調査も行なった。私に関わった民家調査で調査後に国指定重要文化財内指定された唯一の例が吉田藤太郎家住宅である。以下の民家・集落調査のほか、新潟県桑取谷の民家・集落や佐渡の佐藤家住宅の調査なども行なったが、調査で地元で迷惑をかけたまま、そのお返しとも言うべき報告が未発表のままになっている調査も多い（失敗）。

### ● 奥能登調査関係

「奥能登時国家の古屋敷について——古屋敷の位置・規模およびそこに建っていた主屋の位置・規模等の検討」『歴史と民俗』神奈

川大学日本常民文化研究所編、平凡社、10号、1993年8月  
「上時国家文書からみた宝暦期の奥能登上時国村の民家について」『奥能登と時国家 研究編1』神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査研究会編、平凡社、1994年  
「能登半島における民家と船小屋」『奥能登と時国家 研究編2』同、2001年【図7】  
『大本山総持寺祖院建物調査報告書』大本山総持寺祖院、2007年  
「奥能登島崎家住宅について」『すずろ物語』珠洲郷土史研究会、67号、2012年7月

網野善彦（1928-2004）を中心とした神奈川大学日本常民文化研究所の奥能登の共同調査にかかわる中で行なわれた調査研究である。その後も泉雅博（1952-）とともに奥能登をフィールドとした調査研究は続けている。これらのうち、総持寺や南総家（未発表）の調査は国指定登録文化財を目指したもの。珠洲市の「蛸島の民家と集落」や「喜兵衛どんの建築」については継続中であり、まだ宿題が残っている。

### ● 大和市調査関係

『福田の旧蓮慶寺本堂』大和市教育委員会、1994年  
『下鶴間の旧小倉家住宅主屋 解体修理編』大和市教育委員会、1998年  
『下鶴間の旧小倉家土蔵 解体修理編』大和市教育委員会、2000年  
『大和市の社寺建築』大和市教育委員会、2003年  
旧小倉家住宅復原工事監修（大和市）、2005年【図8】  
「大和市中和田大津家長屋門の建築について」『大和市史研究』40号、2017年3月

大和市の古建築調査は、30年間以上にわたって続けている。中でも旧小倉家を発見し、復原再生できたのは大きな仕事であった（現・下鶴間ふるさと館）。

### ● 中国の村落の調査研究

「漁村集落の民家と大工道具」「漁村集落の民家」『中国江南沿海村落の民俗誌的研究』（科研報告書）福田アジオ編、2006年  
「中国江南沿海村落の民家について——浙江省寧波象山県東中心に」『日本建築学会計画系論文集』625号、2008年3月



【図4】西研究室にて

1987年3月の卒業式当日の写真のようである。中央でかがんでいるのが私であり、その右上が西和夫先生である。1994年に助手・技術員4人が集まってデザインコース研究室になるまでの間、西研究室で過ごした。その間、埼玉県近代社寺調査や二条城二の丸御殿調査などに参加した。二条城二の丸御殿の屋根裏に潜り込んでの調査は印象深い。



ふたがみじま  
【図6】二神島の漁村集落の家並み

1980年代の後半に西研究室の大学院生などとともに二神島・中ノ俣などの集落調査を行なった。二神島は瀬戸内海のアムル県に属する小さな島である。二神島の元庄屋である二神家文書は神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵していることもあり、常民文化研究所の調査ともリンクして進められた。その傍ら、対比的に山村である新潟県の中ノ俣の集落調査も行なった。



【図5】高桐院にて金丸さんと

建築史実習として奈良・京都の見学旅行を行っていた。その中で京都大徳寺高桐院の露地におけるひとコマ。金丸壽男（1951-）・福井通（1945-）・富井正憲（1948-）・津田の4人で一時デザインコース研究室を形成し、卒業生の何人かを共同指導していた時期もある。また、福井氏が中心メンバーとして編集した日本建築学会編の『空間体験』（1998）、『空間演出』（2000）、『空間要素』（2003、いずれも井上書院）ではそれぞれが分担執筆した。富井氏は現在、韓国漢陽大学校客員教授を務めている。



【図7】「かいまわし」の舟小屋群

網野善彦を中心に進められた常民文化研究所の奥能登調査の一環として、個人の研究で奥能登を中心とした舟小屋調査を行なった。「かいまわし」は能登半島の突端の石川県珠洲市寺家にあり、20棟ほどの伝統的舟小屋が海岸に沿って立ち並んでいる景観は美しい。



【図 8】小倉家住宅復原工事

和歌山市の矢倉沢往還旧下鶴間宿に所在する宿場建築である旧小倉家住宅の復原修理工事途中の写真である。修理前は内部を焼鳥屋など 3 つの店舗に分割改修され、一目では江戸時代まで遡る民家遺構だとは判断できないほどの状態にあった。解体調査をもとに小倉家主屋および土蔵（和歌山下鶴間ふるさと館）を復原修復した。



【図 9】三門源の家並み

三門源は、中国浙江省龍游県の山間部川沿いに展開する集落である。2007-2010 年度の福田アジオを代表とする科研「中国江南山間地域の民俗文化とその変容」の中で三門源の集落と民家について調査を行なった。日本の民家と異なり分厚い壁で囲まれた中国の民家（民居）は重厚な家並みを形成している。

「古建築の細部意匠からみた建築年代」「集落と民家」『中国江南山間地域の民俗文化とその変容—浙江省江山市廿八都鎮と龍游県三門源』（科研報告書）福田アジオ編、2011 年

2005 年～11 年にかけて参加した福田アジオ（1941-）を代表とする中国江南村落の調査は、未知であった中国をフィールドに民俗学・歴史学などの分野と共同で行なったもので、私にとっては刺激的な体験であったとともに、民家研究の幅を広げることになった【図 9】。

### ● 海外神社に関する調査研究

「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討—全羅南道、和順郡を中心に」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』3 号、2006 年 3 月（中島三千男・金花子・川村武史と共同）  
 「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」同 4 号、2007 年 3 月（中島三千男・堀内寛晃・尚峰と共同）  
 「『満州国』建国忠霊廟と建国神廟の建築について—両廟の造営決定から竣工にいたる経過とその様相」『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集』神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2008 年  
 「台湾神社から台湾神宮へ—台湾神社昭和造替の経過とその結果の検討」『年報 非文字資料研究』8 号、2012 年 3 月  
 『海外神社とは？ 史料と写真が語るもの—公開展示会図録』神奈川大学常民文化研究所非文字資料研究センター、2015 年（渡邊奈津子と共編著）  
 「海外神社（跡地）に関するデータベース」神奈川大学非文字資料研究センター、2007 年 Web 公開（津田編、2008 年増補改訂、2009/2011/2016 年改訂）

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」のプロジェクトに加わり、その後継組織である非文字資料研究センターにも参加した。海外神社研究はその中の共同研究である。江戸時代の百姓家を専門に調べてきた私が、戦前期に日本帝国が侵略して行った外地に建てられた海外神社の研究に関わることになった。戦前の日本帝国の侵略を正当化するつもりは毛頭ないが、調べ紹介するこ

とがある種の追認になりかねないとの批判もあるが、実態を把握せずに評価はありえず、調査を続けている。しかし、いまだ展望は開けていない。この研究の中で構築した「海外神社（跡地）に関するデータベース」は Web 上に公開したもので、国内外から反響があり Web の効能を実感した。

### ● 古建築調査報告書

『埼玉県の近世社寺』埼玉県教育委員会、1983 年  
 『称名寺塔頭光明院表門修理工事報告書』横浜市教育委員会、1988 年  
 『仙太郎旧居（旧雲越仙太郎住宅）の建築について』水上町教育委員会、1996 年  
 『旧東北砕石工場調査報告書』岩手県東山町、1998 年

当然のことながら、民家以外の古建築の調査研究もやってきた。旧東北砕石工場は宮澤賢治ゆかりの施設で、金丸壽男等と調査したもの。後に登録文化財となった。

その他、『建築のすべてがわかる本』（藤谷陽悦・久保田稔男と分担執筆、成美堂出版、2007）や『日本美術全集 16 桂離宮と東照宮』（講談社、1991）、『国宝』（学習研究社、1993）、『角川茶道大事典』（角川書店、1990）などにも雑文を書いてきた。

### おわりに

このように並べてみると様々のことに関わってきたように見えるが、その間随所で失敗を繰り返してきたことを反省せざるをえない。大学当局に決められた年限より若干早く 2017 年 3 月で退職することにした。受動的退職ではなく、せめて辞める時くらいは主体的にという思いや、早く過去を一度リセットしたいというような思いがなまぜとなつて決めたのである。

以上のように、いくつかの論文や報告を書いてはきたのだが、それに対する反響は必ずしも多くなかった。ところが、この 1、2 年に書いた「駿河国駿東郡柳沢の赤野観音堂の建築について」（『歴史と民俗』32 号、2016 年 2 月）【図 10】や「土



【図 10】赤野観音堂

赤野観音堂は、静岡県沼津市柳沢に所在する。巡礼札所のひとつとして江戸期から庶民信仰や遊楽の場として民衆とともに歩んできた。とはいえ、歴史上特筆されるような大寺ではない。このような地域に根差し、庶民に支えられ、連綿と続いてきた素朴な御堂こそ積極的に保存活用すべき時期に来ているのではないと思われる。

地に刻まれた歴史からみた横浜専門学校・神奈川大学—土地所有関係を中心に」（『神奈川大学史紀要』創刊号、2016 年 3 月）は多少違った反響があった。出すと同時に賛否を含め様々な反応があった。多くは地域の人々、また大学にかかわりのある人々からのものではあったが、素直な直截的なものであり、少なからぬ驚きであった。泥臭く江戸期の百姓家の探索から始め、侵略地の神社にまで広がった私の関心の行きついた先は、やはり史料を大事にした、地域に根差した、地に足のついた、地道な研究の再出発しかないと思われる。



津田良樹（つだ・よしき）

1947 年香川県生まれ。1972 年神奈川大学卒業。1975 年同大学院修士課程修了。1977 年神奈川大学助手（2009 年から助教）。2017 年 3 月退職。主著に『街道の民家史研究—日光社参史料からみた住居と集落』（芙蓉書房出版、1995）がある。

## 神大で学んだこと

### 鄭 一止

原稿依頼があつてから1ヶ月が経った。しかし、執筆が進まない。建築学科創設期のメンバーである高木先生や50年程のあいだ大学にいらつしゃった津田先生のお話とともに、娘や孫の世代に当たる私なんかの書くものが並べられ、読まれることを考えるだけで、恐縮してしまう。神大の先生方に支えられ、育てられたことを思い出すだけで、感謝の気持ちでいっぱいとなり、簡単にはまとめられないこともあるのだろう。

一方、私の性格も研究テーマも神大にぴったり馴染んでおり、個性を発揮できたとも思う。だとすれば、神大で研究や教育の活動をする中で私が感じていたことを紹介することで、間接的に神大の特色を表すことにつながるかもしれない。

#### まちや学生の目線に合わせること

2012年4月に神奈川大学建築学科の山家京子先生の研究室の助手となり、2015年からは助教として計5年間神大に在籍した。肩書きとしては山家先生とともに研究や教育を進める立場だったが、実際には先生の教え子のように、娘のように、メールの書き方から研究方法までもろろ教えていただく時間になった。

特に、先生のまちや学生への配慮は格別だった。例えば、「まちには、そのまちならではのシステムがあり、それにそぐわない支援はまちをダメにするだけだ」という話がある。熊本の復興まちづくりでも大切なことだ。まちのニーズや課題をしっかりと読み取った上でサポートしないと、むしろ課題を増やしてしまうという意味であろう。まちづくりを専



2016年、山家研究室のゼミ旅行にて。岐阜県の白川郷。

攻している私は、フィールドワークを第一としていた研究室出身だということもあり、フィールドワークで面白いツールを見つけるたびに、まちづくりに取り入れようとする傾向があつた。それに対し、先生はいつも冷静にまちのニーズや状況との整合性について注意を向けてくださった。一方、まちからのオファーに対しては授業など大学の日程さえ問題なければ、必ず対応していた。こちらからは押し付けられないけれど、向こうからのニーズやオファーにはしっかり応える。

相手への繊細な配慮は教育においても同様であった。「最大の叱り方は“ありえない”で十分」、「学生に伝わらないことがあつても、怒らず繰り返し伝えるべし」と、学生の目線に合わせた教え方をかなり重視されていた。これらは私の基本的な教育論につながっており、これからも肝に命じておきたい。

#### バイタリティに富んだアジア研究

ヴァナキュラー建築を研究されており、アジア各地で数多くの実践を行なってきた重村力先生をはじめ、アジアならではの多様性や重層性に関心をもつ方が多くいらっ

しゃつた。10年以上継続している日中韓台間の研究交流の中で培った研究者間の国際ネットワークを活かすこともでき、毎年アジアのまち調査を実施した。日韓台のまちづくり比較研究を行なってきた私も、2013年度より研究メンバーに加わっている。

他大学では珍しく、調査の際には建築デザインコースの教員全員がそろつて海外に出かけた。一日中まち歩きをした後は、必ず美味しい食事と地酒を楽しんだ。教員同士の仲が良かっただけではなく、ものごとは現場でしか分からないというフィールドワークへの信頼が高かつたからこそ実現できたと思う。

今年度3月にはその成果物として、『アジアのまち再生—社会遺産を力に』（山家京子・重村力・内田青蔵・曾我部昌史・中井邦夫・鄭一止編著、鹿島出版会）を発売することができた。全体的に写真の多くはアースカラーのまちの風景で、ガイドブックにも載っていない、現地を丹念に歩いたからこそ見せられる写真がほとんどである。綺麗に直さ



2014年、香港での調査旅行。九龍で香港島を背景に、左から中井邦夫先生、曾我部昌史先生、重村力先生、山家京子先生、田代久美先生(香港大学)、筆者。

ないといけない「問題街区」として扱われてきたアジアのまちを改めて読み直し、各まちの文化、社会、歴史を積極的に取り入れようとする「まち再生」について考察している。

私は2017年度から、熊本県立大学環境共生学部居住環境学科の都市計画学研究室に籍を移した。発足して2ヶ月も経っていない鄭研究室は、研究もプロジェクトもまだ具体化されていなく、手探りの状態である。ただ、神奈川大学建築学科で学んだバイタリティに富んだ研究姿勢と学生への向き合い方が、今後の活動のベースになることは間違いない。



2015年、インドネシアにてムラピ山噴火による復興集落の調査。火山灰がまだ多く残っており、全員マスク姿。左から筆者、中井先生、重村先生、曾我部先生。

#### 鄭 一止(ちよん・いるじ)

専門は都市計画・まちづくり。1980年韓国・大邱生まれ。2005年ソウル市立大学卒業。2007年東京大学大学院都市工学専攻修士課程修了、同博士課程入学。2012年、論文「エコミュージアム運動としての「場所の記憶」の構造化に関する研究」で博士号を取得。同年、神奈川大学助手に着任(2015年から助教)。2017年熊本県立大学准教授に着任。共編著書に『アジアのまち再生—社会遺産を力に』（鹿島出版会、2017）、共著書に『自分にあわせてまちを変えてみる力—韓国・台湾のまちづくり』（饗庭伸編著、明文社、2016）がある。

## JINDAI KENCHIKUの記憶

## 特集後記

## 建築学科の歴史を振り返ることの意味

内田青蔵

昨年は重村先生、今年はイルジさんと津田さんが大学を去られた。これからも学科運営に尽力された諸先生が定年などを迎え、いわゆる“若返り”の時期に建築学科も突入しつつある。大学や学科の特徴を作り上げてきたのは、学生の力もあるが、やはり、教員の力のほうが大きいし、影響力もある。設立 50 年を経た建築学科にも歴史を作り上げて来た多くの教員がいた。昨年大学を去られた津田さんは、建築学科では一番の古株で、私、内田の先輩でもあり、私はもちろんのこと、現職の教員たちの知らない学科の歴史を体感して来たひとである。そうした記憶は、意識的に残さないと、人とともにすぐ消え去ってしまうし、それは学科にとっても大きな損失となる。

こうした時期を迎えたことを機に、RAKU の編集会議で、連載で建築学科の教員に光を当てた“建築学科の歴史”を掘り起こそうという意識が高まった。そこで、イルジさんと津田さんにはそれぞれの自らの歴史を書いていただき、また、退職された高木先生と金丸さんをお招きし、改めて、建築学科草創期について、お二人の記憶をたどりながら、諸先生の人柄から学科創設当時の状況についてお聞きすることにした。

ヒアリングの中で、建築学科の創設の中心人物であった谷口忠先生の「真・善・美」という主張に触れ、“建築学科の精神性”に触れたような感覚を持った。本誌 RAKU は、学生はもとより、同窓会である「かな会」を通して卒業生にも配布されている。本誌を通して、改めて、自らの学んだ建築学科の歴史を知ってほしい。われわれの存在性を示す源泉のひとつが、そこにはあるからだ。

## 神大建築の伝統

中井邦夫

たとえばどこそこの大学の出身という、だから手が動くんだとか理屈っぽいとか、口がうまいと言ったり言われたりすることがあるが、学生にとっての大学での学びは、いわばパソコンを初期化する OS のように、良くも悪くも学生の考え方を決定づけるし、生き方の拠り所にもなる。この OS が受け継がれていくと、いわゆる伝統とか DNA になるのだろう。今回の私の関心は、神大建築の OS とはどのようなものなのか、そこには歴代教員のどのような思想が埋め込まれているのかという点であった。

高木先生と金丸さんから貴重なお話を伺って不思議だったのは、歴代教員はみな出自も経歴もバラバラなのに、何か共通するものがあるように感じられることだった。設計分野でいえば白濱謙一先生、室伏次郎先生、去年ご退職された重村力先生、さらには教員ではないがキャンパスを設計した山口文象+RIA まで含めて、改めて RAKU の各先生の特集号も見直してみたが、「類は友を呼ぶ」ということなのか、それぞれが意識しているはずもないのにまるで系譜のように、共通の思想（体質？）があるように思える。それが何かはまだうまく言えないが、たとえば建築のモノ自体や空間に対する倫理的な姿勢、人間に対する信頼と敬意、アンチ権力、文化と生活への共感といったようなことが頭に浮かんだ。それらは、高木先生が挙げられた「自由と自主性」を許す寛容さの基盤にあったものだと思うし、学生運動が盛んだった本学の歴史すらも重なってくるのが不思議であった。初代学科長の谷口忠先生の理念も含めて、私自身がそうした歴代教員たちに共感できることは幸運だったと思うし、建築がどんどん見えにくくなっているこの時代にこそ、なによりも学生たちが誇るべき神大建築の伝統だと認識を新たにした。

## 修士論文

金子 奨太  
児玉 貴典  
足立 将博



●ディプロマ賞



金子 奨太  
Shota KANEKO

曾我部研究室  
SOGABE lab.

## 風穴の特性を応用した 空間の形成 *Creation of Space to Apply the Windhole*

群馬県桐生市水沼における農業体験拠点の提案  
*A Proposal for Agricultural Tourism Base in  
Mizunuma, Kiryu City, Gunma*

**山家** 風穴とは、基本的に貯蔵を目的に、今まで使ってきたということなのですが、これまで建築に応用したという事例はあるのでしょうか。また、曳家をやるかのように、そのまま持ってきているものが多いのか、意匠をかなり緩和しながら自分なりにアレンジしているのか、その辺はどのように考えていますか。

**金子** 風穴の仕組みを建築的に応用している事例は少ないです。冷蔵保存の機能をそのまま引き継いで、ワインの貯蔵など、引き続き活用している事例はいくつかあります。提案についてですが、民家のかたちを引き継いでいるのではなく、自分なりに解

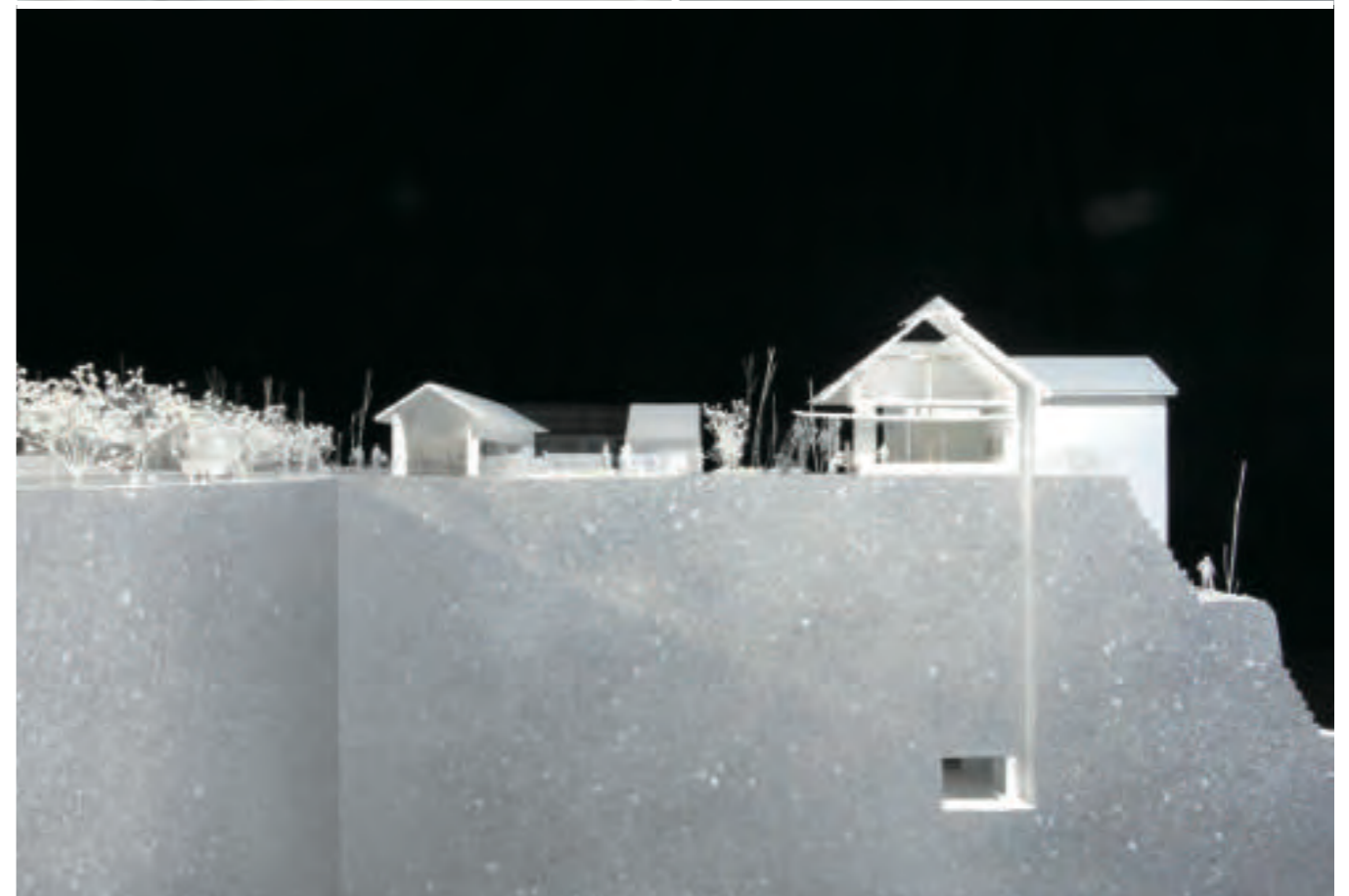
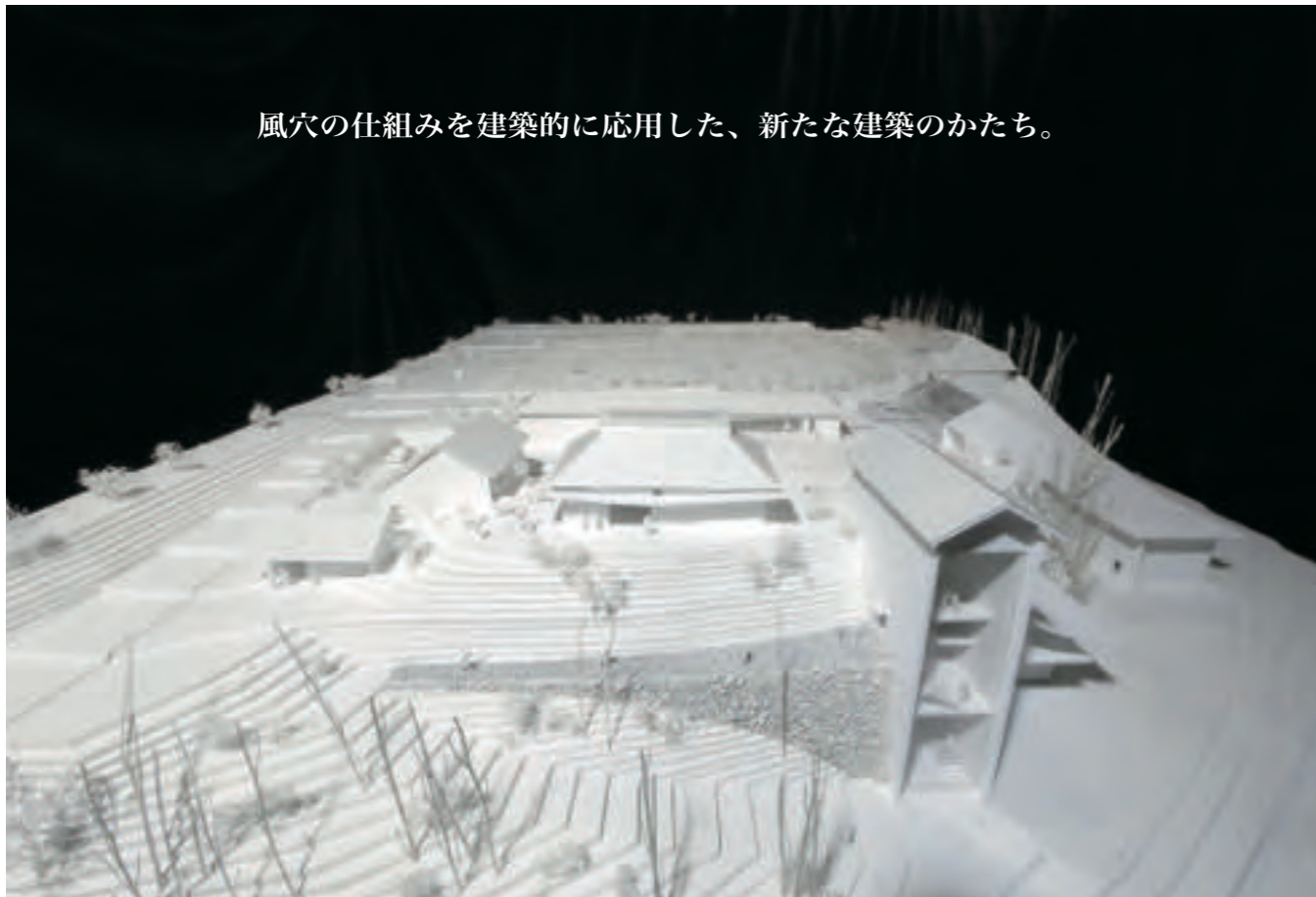
釈して、新たなかたちとして提案しています。

**中井** 力作だと思いますが、風穴といった環境定義みたいなものが主軸ではないですか。データのものは残っていないのですか。これが、本当にどの程度効果があるか知りたいです。

**金子** 他に、新潟県の稲核という場所でも風穴の仕組みはありまして、気温状況がこちらの水沼と合っています。風穴内の年間の気温を調べると、野菜の保存や種子の保存に適している気温ということがわかっています。



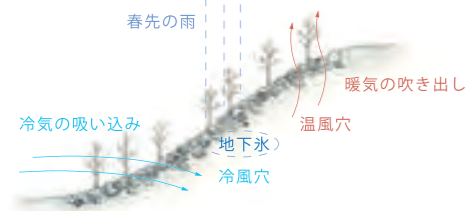
風穴の仕組みを建築的に応用した、新たな建築のかたち。



### 風穴のしくみ

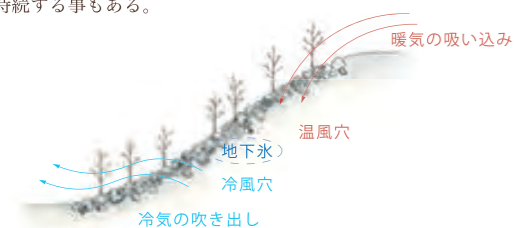
[冬季]

岩塊斜面内部が外気温よりも暖かいため、斜面上部から温風が吹き出る。この時、岩塊斜面内部はピストンのような状態となり、斜面下部から卓越風などによる冷風を吸い込む。

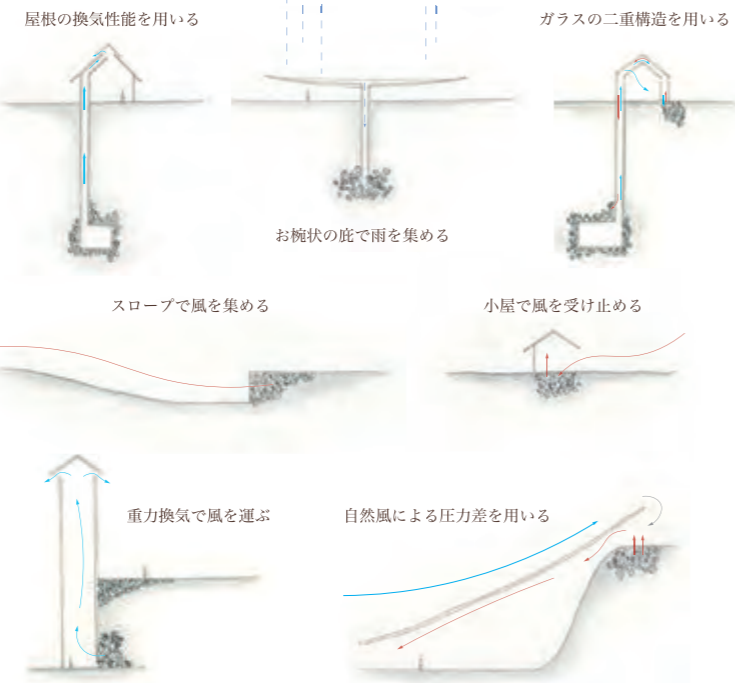


[夏季]

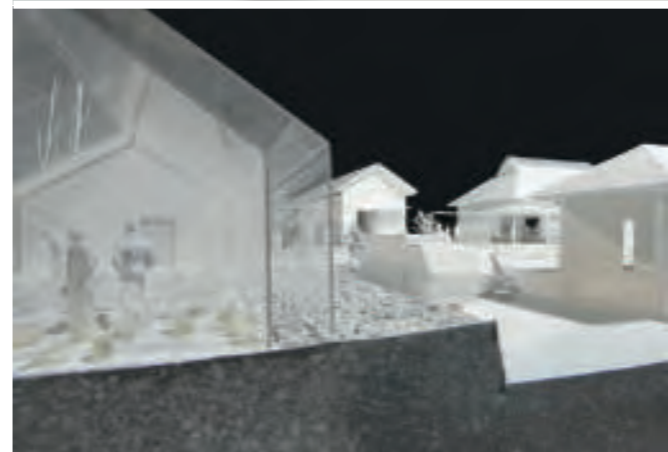
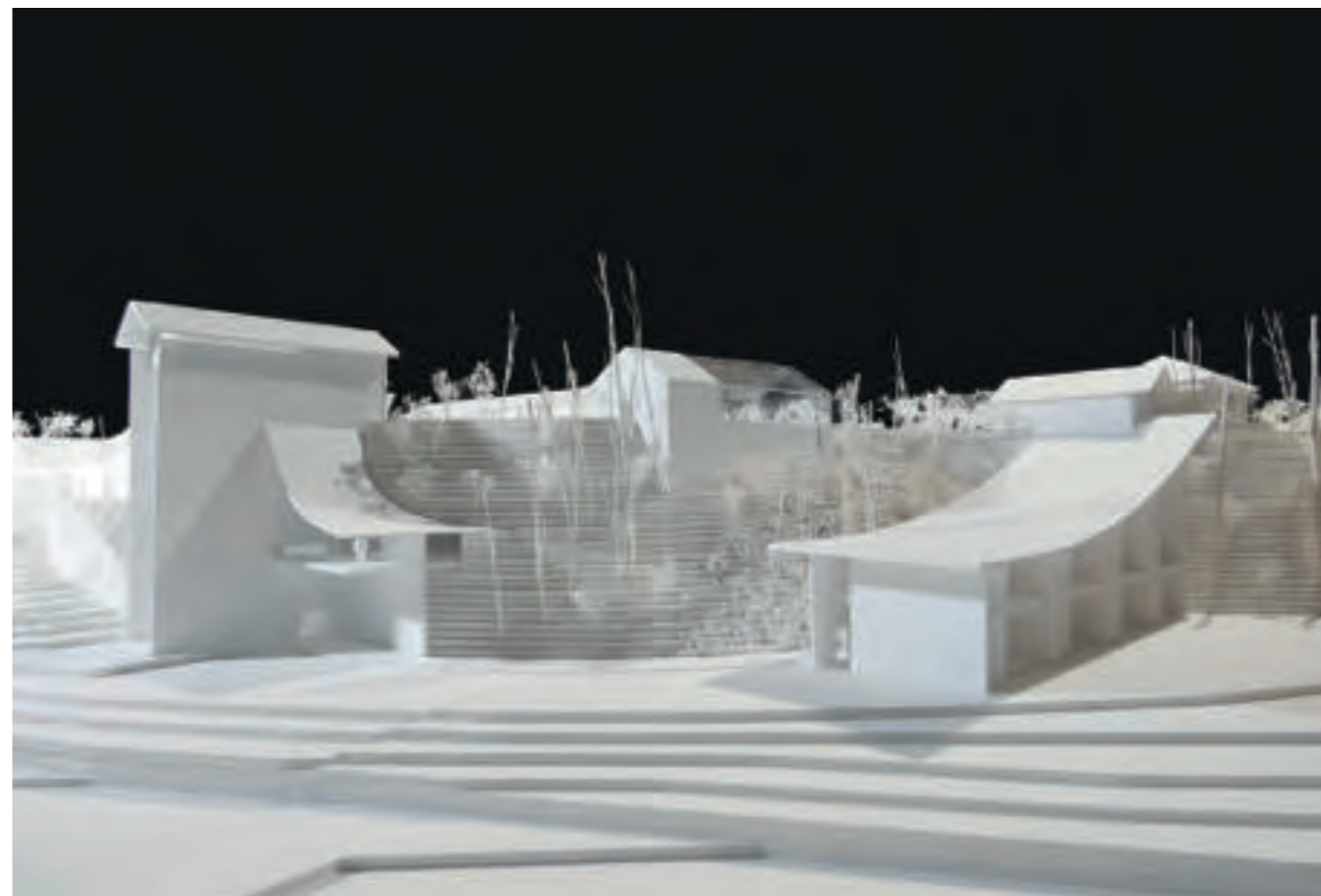
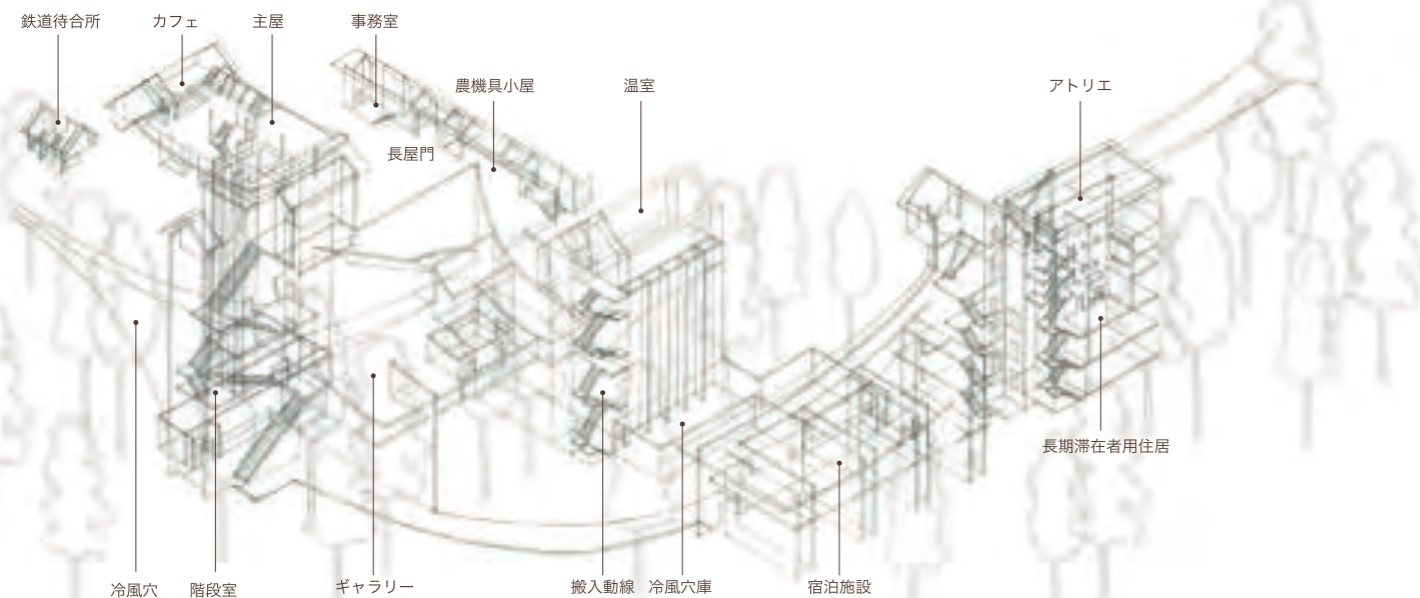
春から夏頃まで岩石の低温が維持され、外気が風穴内部より暖かくなると、風穴から重い冷風が吹き出す。また、春先の雪止め水や雨水が風穴内で氷結する事により、初夏以降まで冷気が持続する事もある。



### アイディアスケッチ



### プログラム





●ディプロマ賞



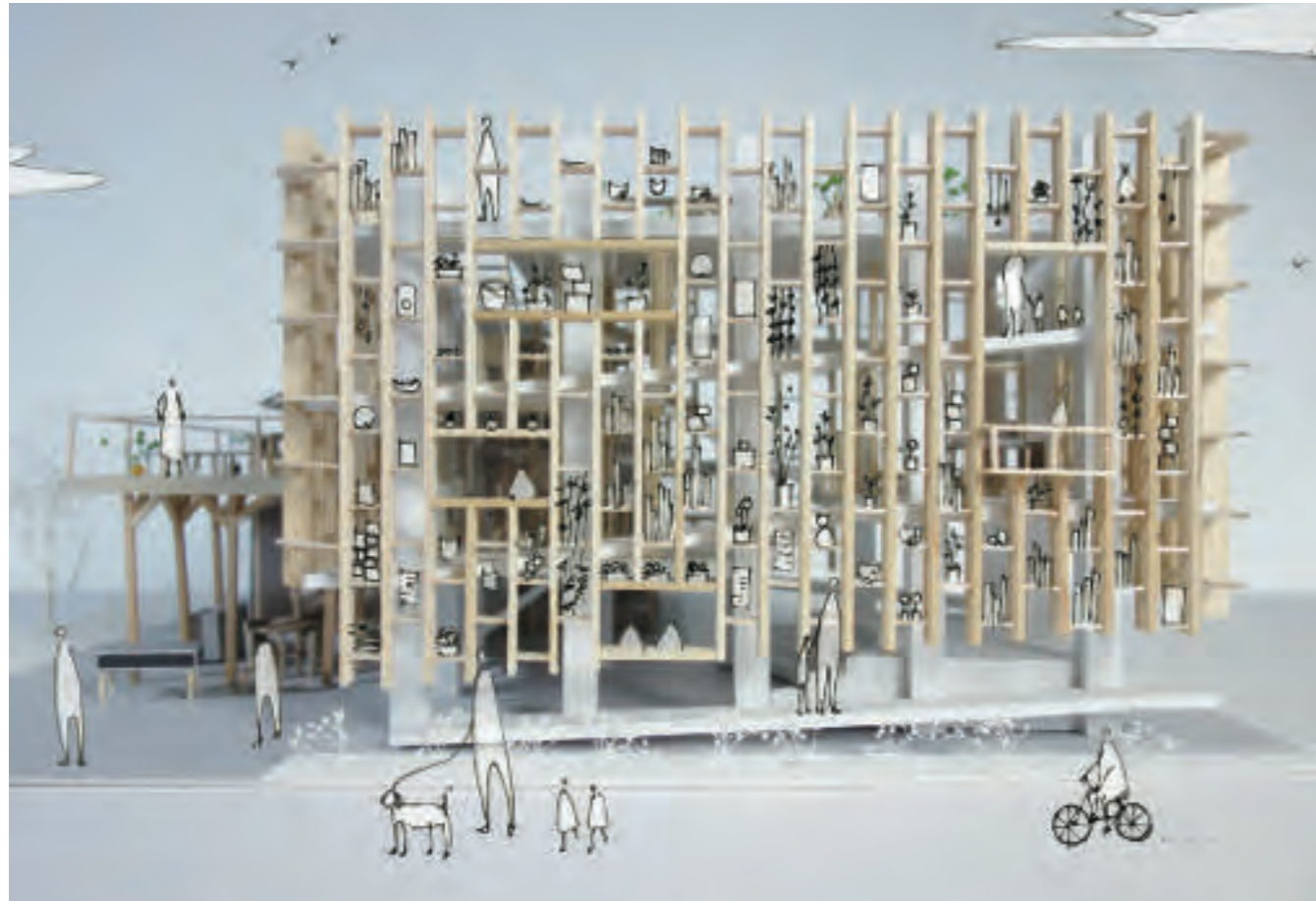
児玉 貴典  
Takanori KODAMA

曾我部研究室  
SOGABE lab.

防災から考えるこれからの  
地方のあり方

*New era's modalities of the countryside  
that thinking from disaster prevention*

徳島県美波町における地域特性を活かした防災計画の提案  
A Proposal for disaster prevention plan utilizing  
regional characteristics in Minami Town, Tokushima



**石田** 南海トラフ地震の被害状況は相当大きいと思うのですが、最大の津波の高さは何メートルになりますか。

**児玉** 最大で9.8mです。日和佐浦地区と呼ばれている場所で、最大5m程の津波が想定されています。

**石田** この地区は特に防潮堤とかの計画ってというのは現時点で発表されているのですか。

**児玉** 防潮堤をここに造る計画はありますが、この海岸は、国で保護されているウミガメがとても有名な場所です。そこに防潮堤を造るのはどうかと、町の役場の方たちが疑問意識を持っていて、どうすべきかと考えています。

**中井** 全部で何人が避難できるのですか。

**児玉** シェアオフィスが45名、高齢者拠点61名、観光拠点40名、児童館に79名とファブラボには41名が収容できます。

**内田** デザインのモチーフは、どのようなものですか。

**児玉** ここは避難の場所になるので災害時には、「あそこにあるぞ」というシンボリックさがあつた方が良いかなと思います。また、伝統的な様子とあわせと呼ばれる路地が有名なので、路地と建物の関係など不思議な佇まいに見える、といったことをモチーフにしながら設計しました。

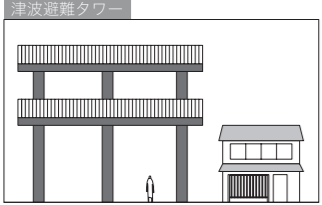

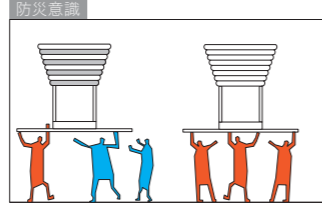

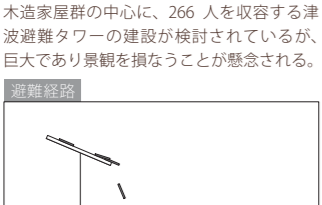
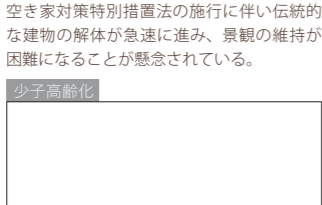
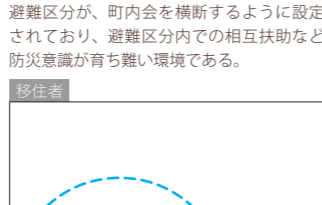
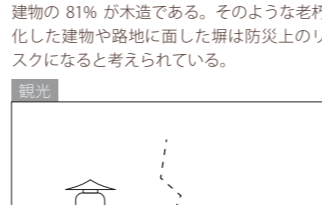
防災への対応は、  
町を豊かにする力がある

本研究では、徳島県美波町日和佐地区を対象として、地域住民へのヒアリング調査や地域のフィールドワークを重ね、美波町の現状や対応すべき課題を幅広く丁寧に読み解き、歴史や文化など地域特性を浮き彫りにすることで、歴史的景観の維持を前提としながら避難計画、地域防災対策を立案し、多様な地域生活のための拠点を兼ね備えた津波避難タワーの提案を行う。



## 日和佐地区における対応すべき課題

フィールドワークなどから浮かび上がってきた課題をリスト化し、カテゴリー分けすることで、美波町の地域特性を反映した防災計画の手がかりとする。

 <p><b>津波避難タワー</b></p> <p>木造家屋群の中心に、266人を収容する津波避難タワーの建設が検討されているが、巨大であり景観を損なうことが懸念される。</p>	 <p><b>空き家</b></p> <p>空き家対策特別措置法の施行に伴い伝統的な建物の解体が急速に進み、景観の維持が困難になることが懸念されている。</p>	 <p><b>防災意識</b></p> <p>避難区分が、町内会を横断するように設定されており、避難区分内での相互扶助など防災意識が育ちにくい環境である。</p>	 <p><b>耐震化</b></p> <p>建物の81%が木造である。そのような老朽化した建物や路地に面した塀は防災上のリスクになると考えられている。</p>
 <p><b>避難経路</b></p> <p>あわえには、構造に不安を持つブロック塀や石積み塀が、地震の際、倒壊により避難経路が閉塞されることが危惧されている。</p>	 <p><b>少子高齢化</b></p> <p>ここ10年間で人口が約500人減少し、高齢率は32%から46%と増加の一途をたどっている。</p>	 <p><b>移住者</b></p> <p>美波町では、移住者の誘致を行っており、移住者が増加している。移住者が地域のコミュニティに参加できる機会が求められる。</p>	 <p><b>観光</b></p> <p>観光客の滞在場所が少ないため、国道に面した業王寺のみへの観光が多く町内での回遊性が薄い。</p>

## マスタープラン

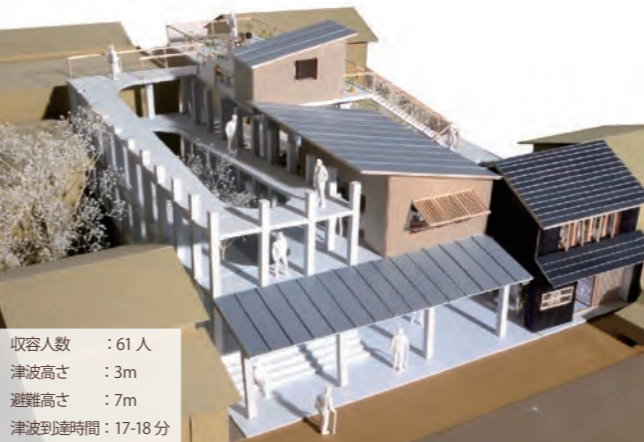


## A. シェアオフィス



- 4F: 備蓄倉庫、津波避難スペース
- 3F: シェアオフィス
- 2F: オープテラス、会議室、コモンスペース、シェアオフィス
- 1F: 井戸キッチン・図書スペース、舞台広場・食堂、防災倉庫、防火水槽

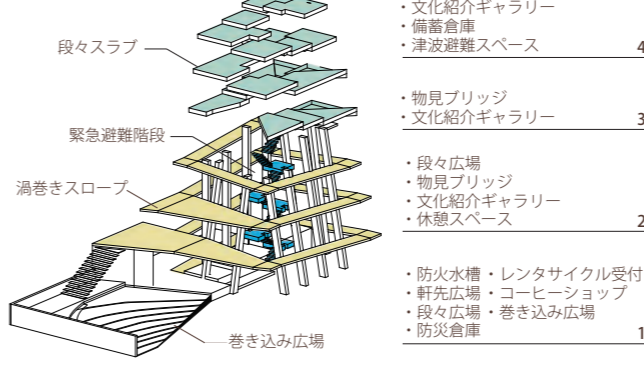
収容人数: 45人  
津波高さ: 3m  
避難高さ: 7m  
津波到達時間: 13-14分



- 3F: 備蓄倉庫、津波避難階
- 2F: 食堂、みんなのキッチン、小上がりスペース、オープンスペース
- 1F: 食堂、ピロティ通り、光の中庭、大階段舞台

収容人数: 61人  
津波高さ: 3m  
避難高さ: 7m  
津波到達時間: 17-18分

## C. 観光拠点



- 4F: 文化紹介ギャラリー、備蓄倉庫、津波避難スペース
- 3F: 物見ブリッジ、文化紹介ギャラリー
- 2F: 段々広場、物見ブリッジ、文化紹介ギャラリー、休憩スペース
- 1F: 防火水槽・レンタサイクル受付、軒先広場・コーヒーショップ、段々広場・巻き込み広場、防災倉庫

収容人数: 40人  
津波高さ: 3m  
避難高さ: 7m  
津波到達時間: 13-14分

●優秀賞



足立 将博  
Masahiro ADACHI  
山家研究室  
YAMAGA lab.

コミュニティの継続を意図した  
住環境の提案

*A proposal of the living environment  
intending for the continuation of the  
community*

**石田** 前提条件で、この地域を選定した理由というのが一つありましたが、コミュニティということで考えたときに、例えば過疎化している地域であるとか、あるいはその高齢とか平均年齢が非常に高いなどの数字的な、人々がそういう状況だから、ここを選定したというような話がなかったと思います。もう少し説明があれば聞きたいのです。

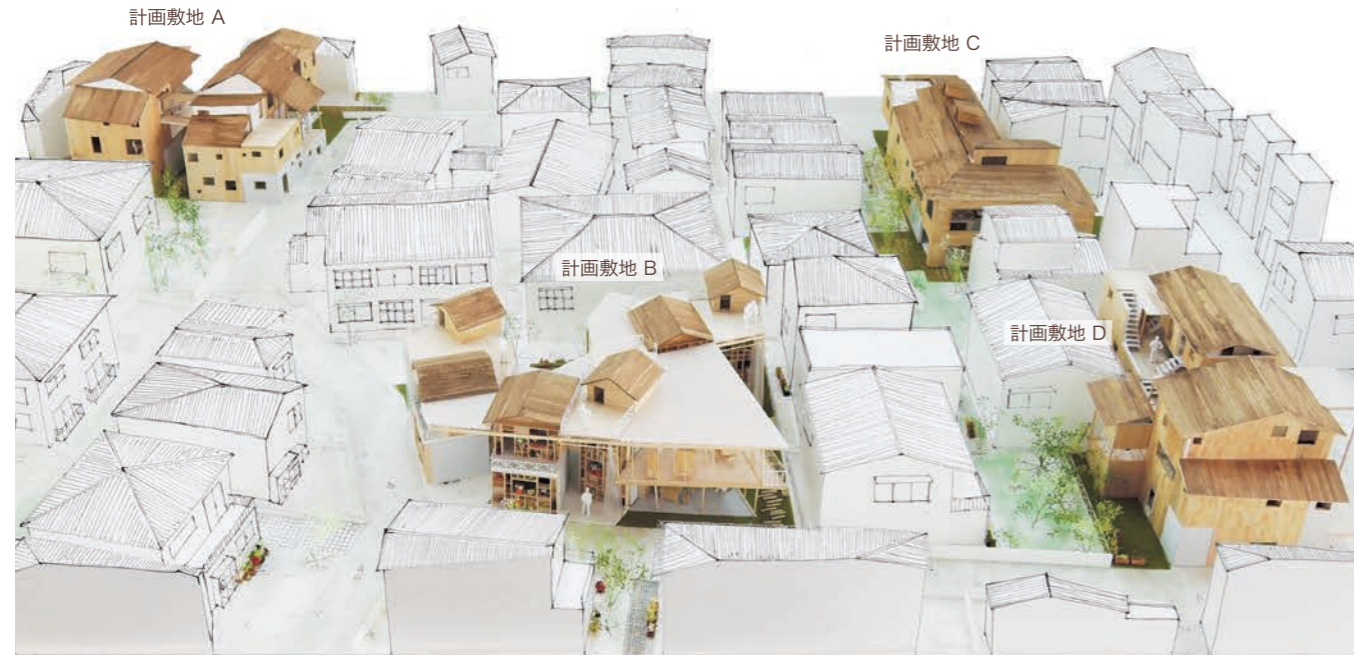
**足立** 急激ではないのですが、減少しています。ヒアリングでは、この商店街沿いに店舗が現在7しかなく、後継者の問題などがあります。八百屋さんは後継問題とお客さんが来ない、馴染みのある人が来ないということで、店を閉じているという状況が

あったので、この敷地を選定しました。

**中井** 取り付けたものを見てみると、ヴォリュームの配置と、マスとヴォイドの構成で、うまく取り入れて力作だと思いますが、塀とかの擬似的な要素の話がどこか行ってしまったと思います。

**足立** 郊外は地域と高い水準というか全体での話としてだしてしまいましたが、現代での設計ではその場所ごとによる設計を意識して、商店街沿いではあまり塀はみられていないので、塀の再構築というよりは既存の抜けとかを意識した設計をして、塀が一番残っているところです。

集合住宅により、人やまちの接点を生み出し、コミュニティの継続する住環境を提案する



計画敷地A:アプローチから見る。



計画敷地B:工房を見る。



計画敷地C:全体を見る。

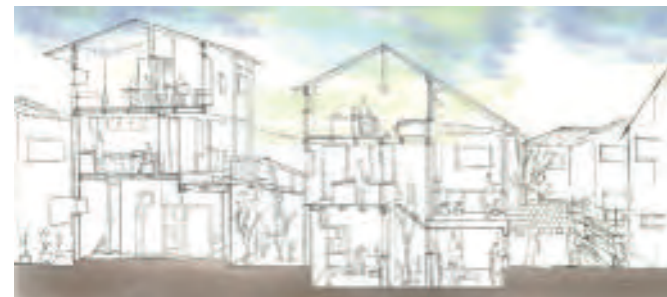


計画敷地D:踊り場を見る。

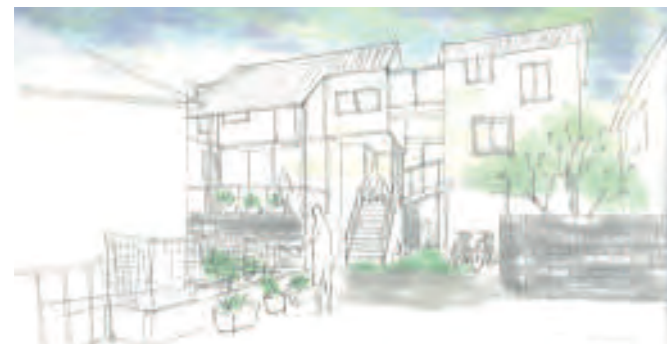
計画敷地 A: Passage House (折れ曲がり道に建つみちの家)



一階平面図



A-A'断面パース



南アプローチを見る。塀や道を引きこみ、敷地内へと連続性を作る。

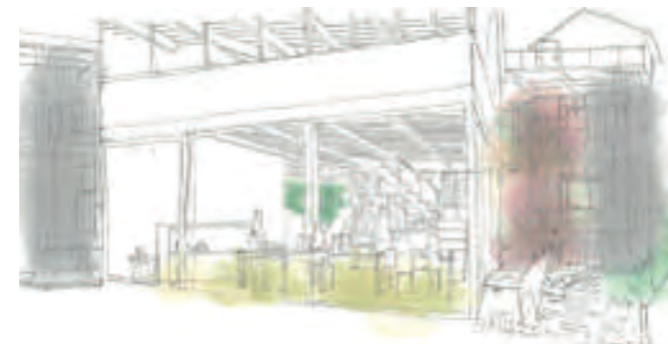
計画敷地 B: Ledge House (アイストップに建つ棚の家)



一階平面図



A-A'断面パース



工房と2戸1の玄関を見る。活動をまちに開く。

計画敷地 C: Chimney House (2本の軸に建つ煙突の家)



一階平面図



A-A'断面パース

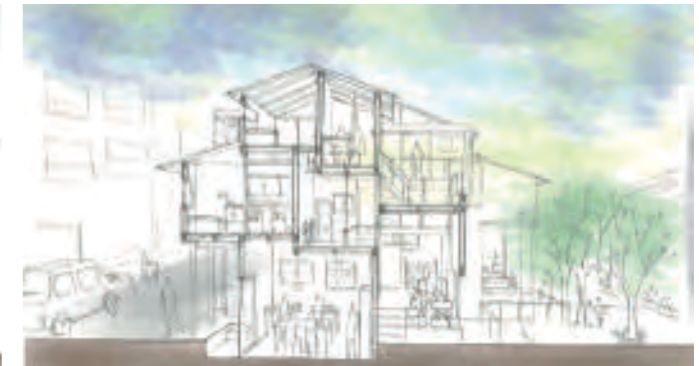


コミュニティカフェを見る。駐車場には日替わりワゴン車が訪れ、日々の食材などを売りに来る。

計画敷地 D: Landing House (賑わいと緑に沿う踊り場の家)



一階平面図



A-A'断面パース

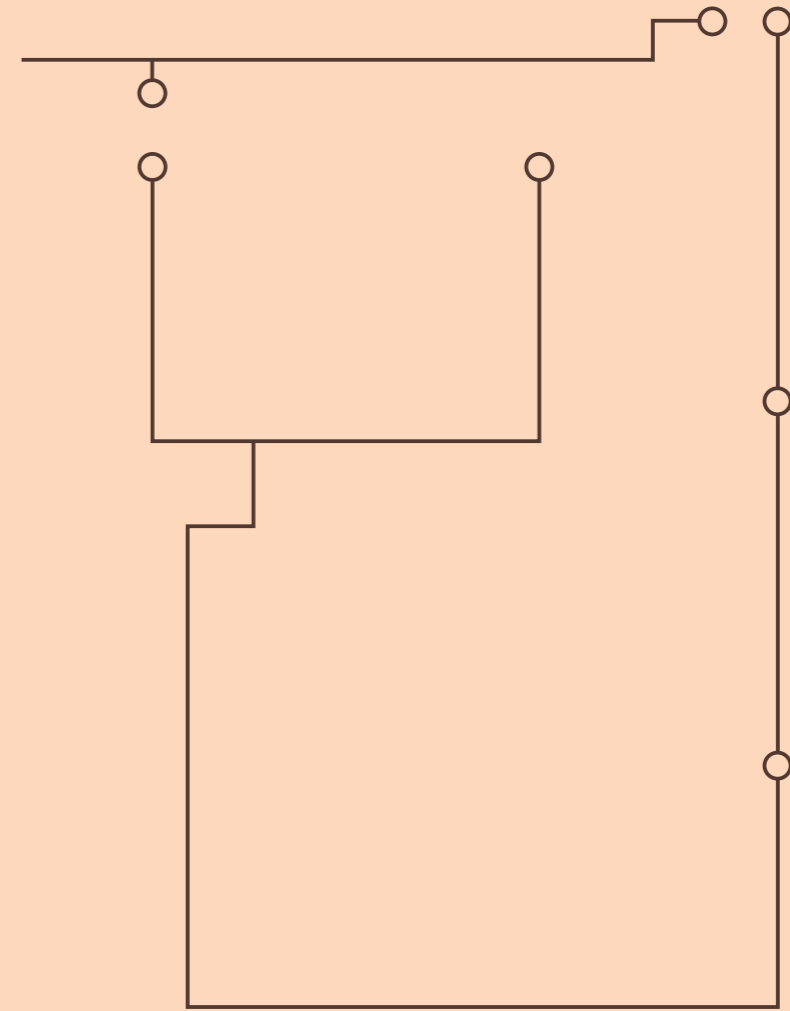


共有踊り場を見る。生活は少しずつ外へと広がっていく。



卒業研究

- 千々松海図
- 森島駿平
- 木村捷希
- 下山智加
- 野村奏実
- 松川英莉奈



● ディプロマ賞



千々松 海図

Kaito CHIJIMATSU

曾我部・吉岡研究室  
SOGABE・YOSHIOKA lab.

## 下町の輪郭

### Outline of downtown

準工場地域における町工場と住宅の断絶をどう調停するか

How to mediate discontinuities between town factories and houses in semi-industrial area

**伊郷** 生産する工場の行為を盛り込み、通り抜けできる空間をつくっていることが面白いですが。ただ、これができることでどのように工場が変わったのか、計画の中で見えてくるともっと面白いと思います。

**千々松** 隣接する町工場と住宅との繋がりがなかったのに対して、空地を作りワークショップやイベントを催すことで、地域全体が変わるのではないかと考えています。

**川辺** ストラクチャーの門型フレームが防火対策上どのような仕組みになるのかを考えた上で、この建築が初めてこの街に接続できる。

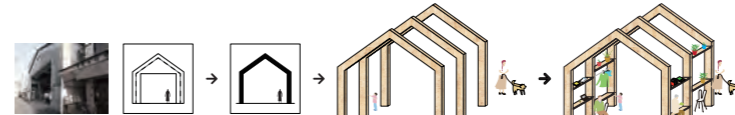
**伊郷** 私は木造を諦めるべきではないと思います。街全体が防火の措置をしているのであればそれが可能になる時代はやってくると思います。

**伊藤** これは木造以外ないですね。基準法でも様々な実験の中で可能性は広がっているのが良いと思います。

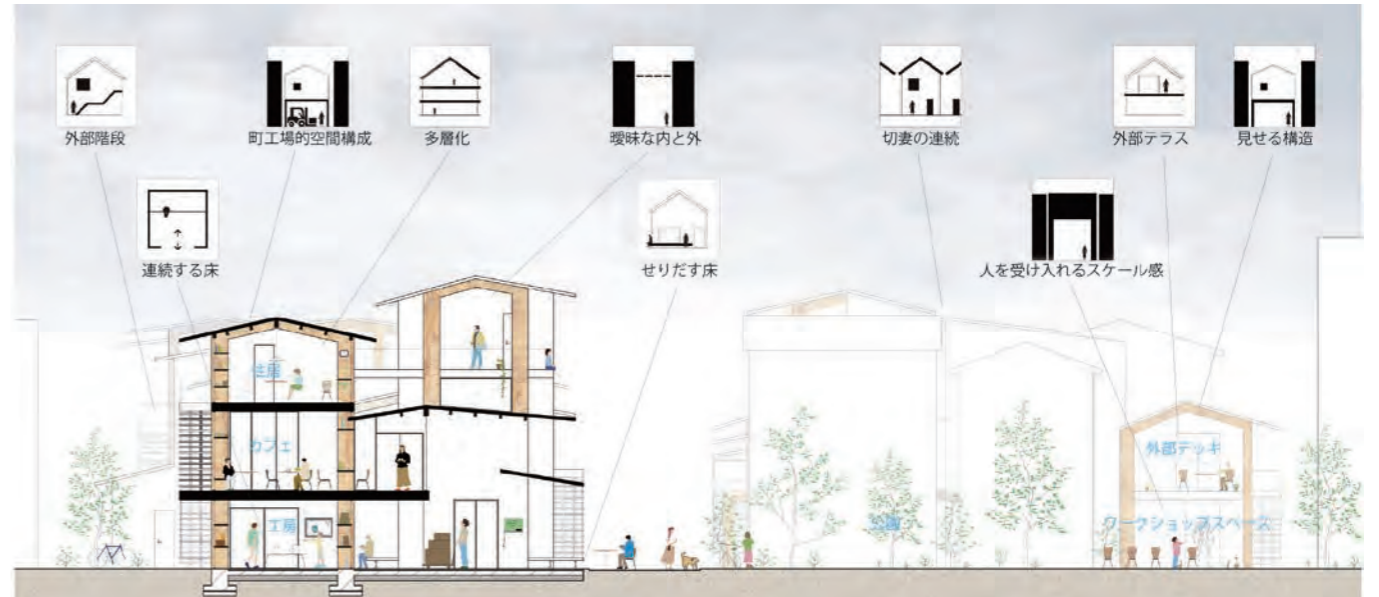
**伊藤** 機能として工場や住居、展示のためにお店などがどのような関係を持っているのですか。

**千々松** 周辺の町工場と連続するように4つの工房を設け、木材加工屋など町工場に応じた生産物が棚を介して展示されています。

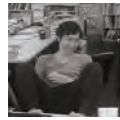
## 東京の下町にある古い町工場が この先の暮らしの受け皿となる



マチにある切妻屋根形町工場のファサードをアイコン化する。  
 立面にあらわれる家形  
 要素を建築に落とし込む  
 架構に機能を追加。



●優秀賞

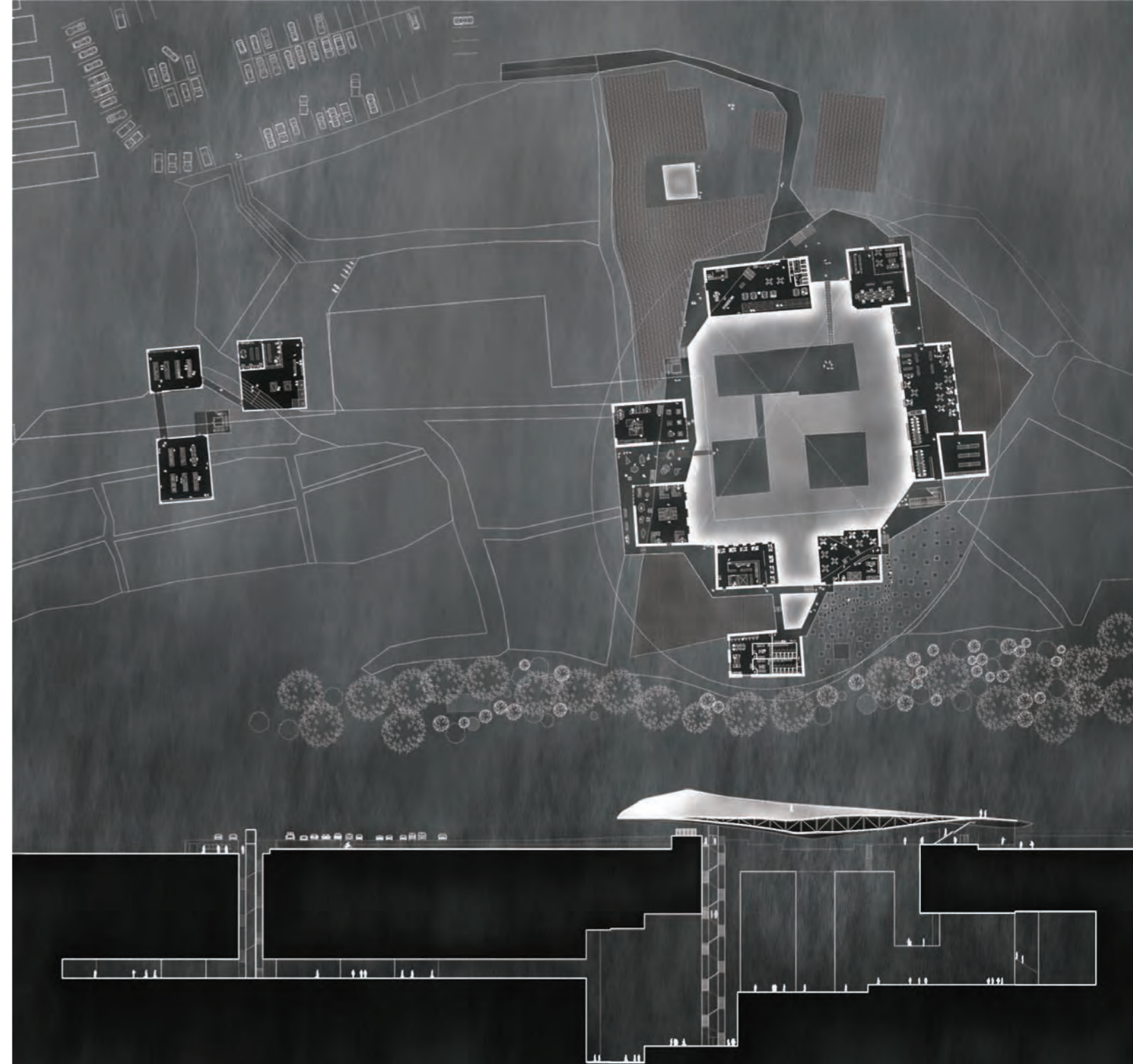


**森島 駿平**  
Shumpei MORISHIMA  
曾我部・吉岡研究室  
SOGABE・YOSHIOKA lab.

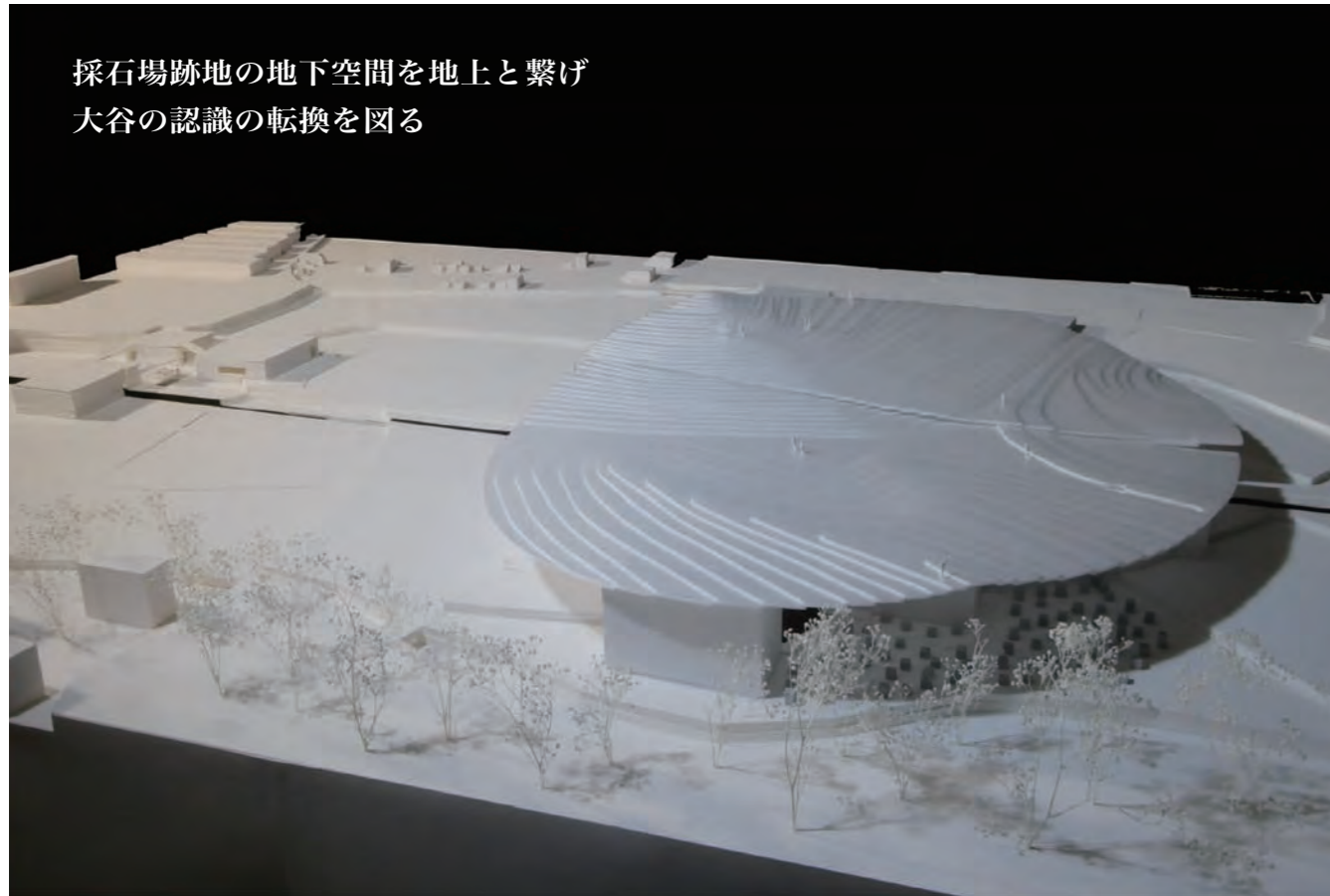
## 大谷の石の継承 Inherent from stone of Oya

大谷石採石場跡地と複合した  
文化体験施設の提案  
Effective utilization of Oya quarry where used to be

- 伊郷** 屋根などのスパンはどのくらいですか。
- 森島** 屋根の長手が100mで、吹き抜けは50mになります。採石場の端から端までが230mになります。
- 伊郷** 屋根のコンタはどこからきたのですか。
- 森島** 私がデザインしたものです。周辺のランドスケープや、各場所からの見え方を意識してデザインしました。
- 川辺** ロンシャンを思い出しました。宗教建築ではないけれど、元々持っている場所の力を建築化するとき、ダイナミックな造形と拠り所をつくり出すという意味では、印象として良いと思います。
- 伊藤** 大谷石を粉にして左官で壁面を仕上げるのが解せないです。
- 森島** 様々な遺跡を扱った海外の事例を見ていて、新旧が混ざらないことを意識しているものが多く、ここで大谷石を使ってしまうと新旧が混ざってしまい、認識が難しくなってしまうため、大谷の材料を使い違ったものになりました。
- 重村** 吹き抜けの際への集中荷重が気になります。もう少しデリケートに考えなくてはいけないのではないのでしょうか。



採石場跡地の地下空間を地上と繋げ  
大谷の認識の転換を図る



● 優秀賞



木村 捷希  
Kazuki KIMURA

石田研究室  
ISHIDA lab.

別れを受け入れる、旅するように  
Accept parting ; Go on a trip

最期を迎える空間構成  
Space constitution to greet last moments

**伊郷** 非常にイマジナリーで面白いと思いました。この島はどこを想定しているのですか。

**木村** ここで想定したのは、山口県の萩市尾島という今は無人の島です。

**伊郷** なぜその島を選んだのですか。

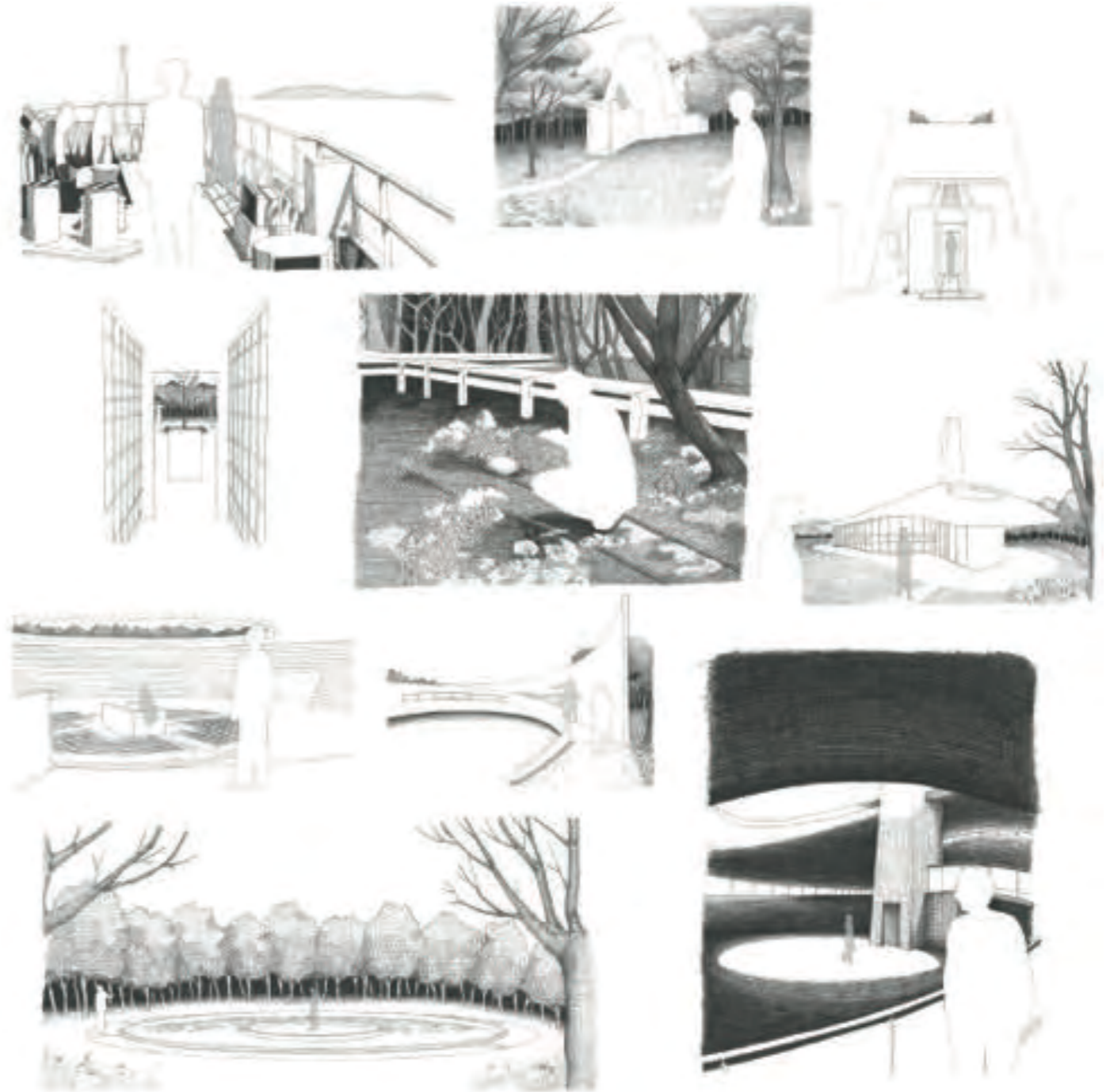
**木村** 最初から島でやろうと考えていて、巡る行為のプランから入りました。そのあとでこの案ができる島を探して、今一番実現できる場所なのではないかと思い、ここを選定しました。

**川辺** およそ何組くらいが、1日にここを回るのですか。

**木村** 一応2,3組を想定しているのですが、この島に一度に行ける組は1組を想定しています。

**伊郷** 自然を含めすべてを建築化していくというテーマで、もう少しやるとすごく面白いと思いましたし、散歩するという行為自体もすごく面白いテーマだったので、自然に生まれて自然に帰っていくというテーマをもう少し突き詰めたら、すごく面白いかなと思いました。

悲しみを緩和し、故人が記憶の中で  
生き続けられるような空間体験





●優秀賞

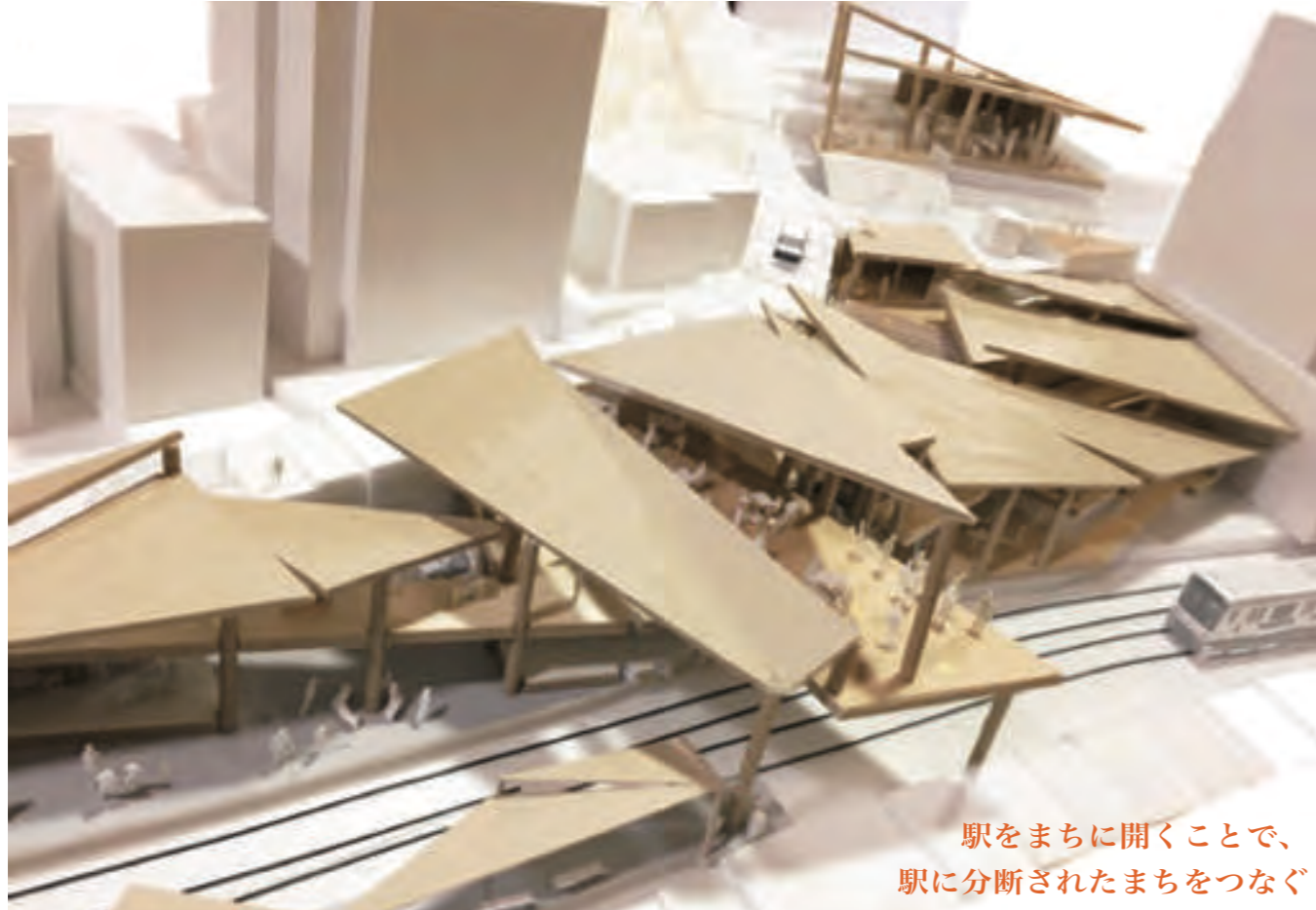


下山 智加  
Chika SHIMOYAMA

中井研究室  
NAKAI lab.

## まちをつなぐ駅 Station that connects the town

駅を含む街区からみるまちと駅の関係性  
Relationship between the city and the station to consider  
from the block including the station



駅をまちに開くことで、  
駅に分断されたまちをつなぐ

**伊郷** プランニングと屋根の形態がずれているのは、意図的ですか。屋根自体は断片的に架けているのではないですか。この意図とルールについて説明してもらいたいです。

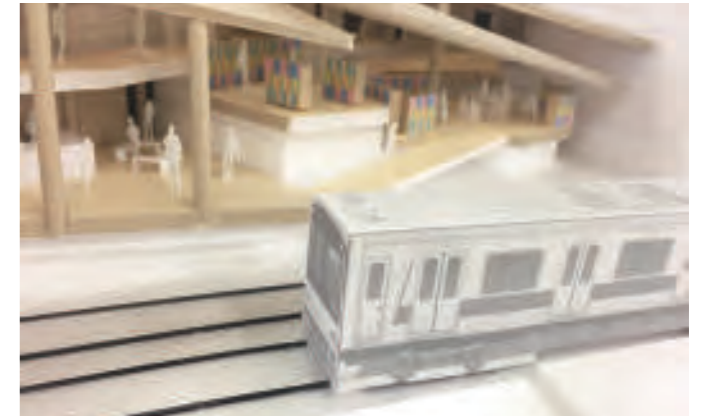
**下山** 駅がある街区を中心にまちがつながっていけば良いということから、屋根は多方面に広い視野が開けるよう色々な方向に傾いていて、小分けにすることで周りの建物とスケール感が合うのではないかとこのデザインになっています。

**伊郷** 駅舎は、フォルムがとても大事だと思います。フォルムにこだわらないというのが現代の特徴なのかもしれませんが、その意味で、この屋根の架け方は、すごく好意的だと思います。地形に沿った形というのは、私は割と好きです。図書館を駅にくっつけるというのは、もう事例がありますが、ホームと同じレベルで図書館があるのは、面白いと思っています。

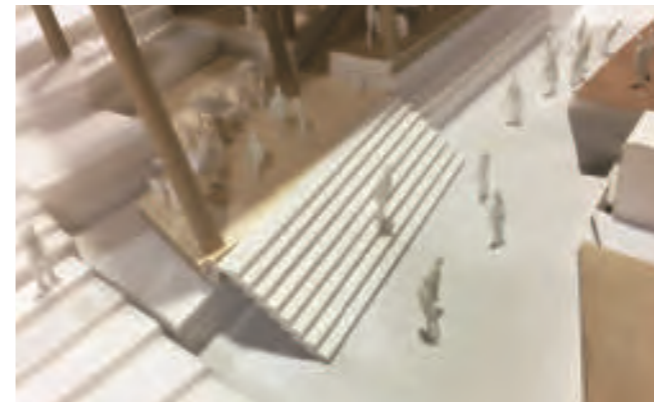
**下山** ホームから直接行ける図書館があると面白いと思いましたが、管理の面が難しかったです。図書館に行く動線と地上の出口に出る動線を分けることで対処しています。



↑高架下は待合いスペースになる



↑図書館の目の前を電車が通る



↑食堂前に人がたまる



↑ホームで電車を待つ人の様子



● 優秀賞



野村 奏実

Kanami NOMURA

山家・鄭研究室  
YAMAGA・CHEONG lab.

出会い、育つ  
Meet and Grow up

左近山団地における保育園と学童保育の提案  
A Proposal for a nursery school and after school day-care center in Sakonyama housing complex

**伊藤** 屋根は、水たまりの様につなげているけれど、ふわふわとした水滴が下に落ちたようなこの自由なかたちは、平面で見たときはあまりにも厳格な円が続いていて、もうちょっと中のプランは屋根のように円の輪郭を外した方が良いと思います。

**野村** 円を意識した設計をしていたら、少し強くなり過ぎてしまい、屋根は自分の手で自由に「あつ、これがいいな」というような感覚で描いていたのですが、壁柱や、ルーバーの角度を意識しすぎてしまいました。

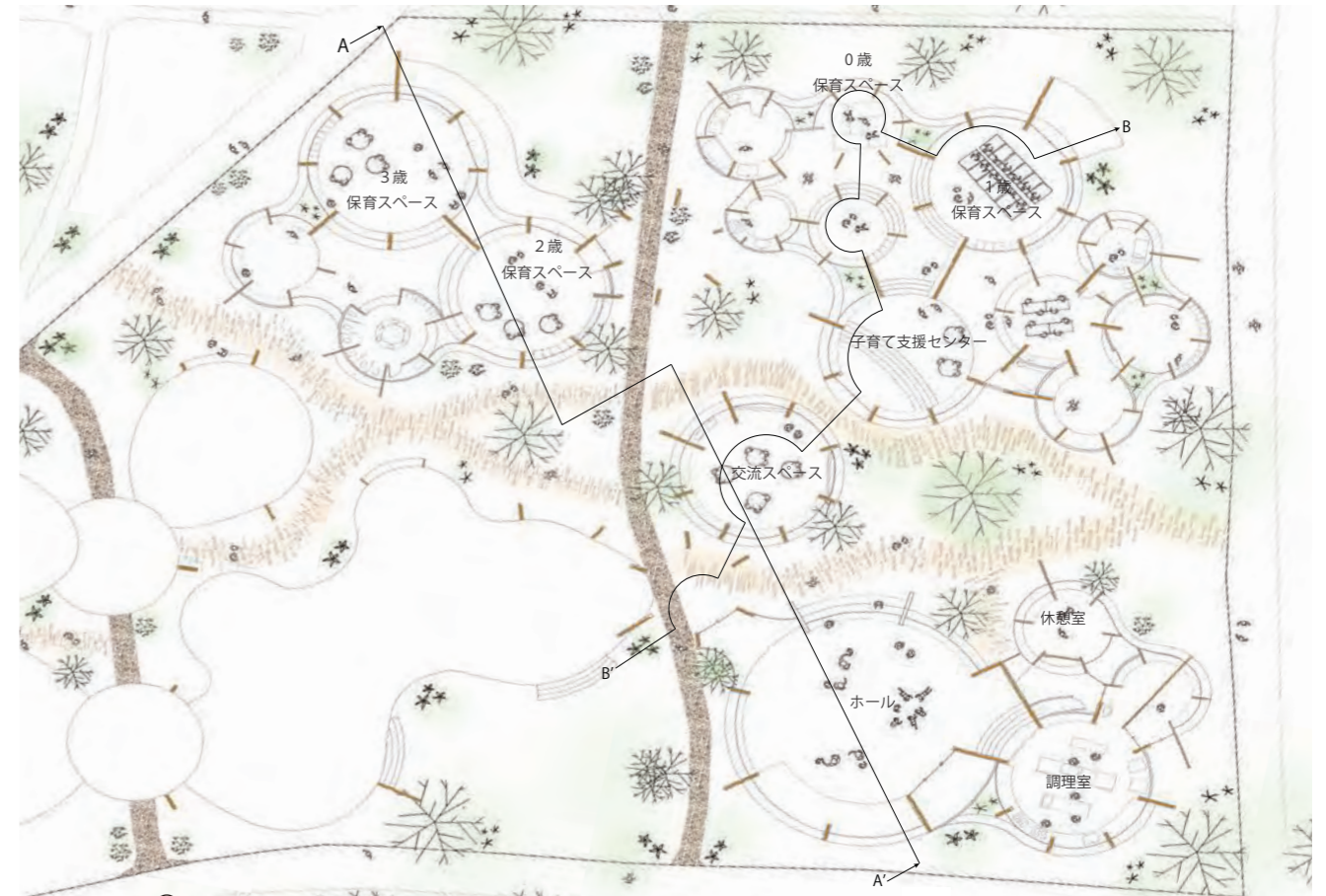
**伊藤** もちろん、壁柱は有効で良いのですが、内の壁

柱を全部同じルールでつくるのではなく、独立してあって、もう少しルーズにつながっていても良いのではないかと思います。ただ、これは非常に造形のセンスがいいと思います。

**川辺** 地面とスラブが切れて、建物全体が壁柱で自立されて、スラブは円が切れていながら内で建っている理解で良いのでしょうか。

**野村** 床に埋めるところもあれば、浮いてるところもつくり、少し危険ですが、その下に子どもたちが入って遊ぶ、秘密基地的な空間があると楽しいかなと思い、わざと浮かせています。

高齢化している地域全体の活性化へ向けた、  
子どもと若い世代への新たな居場所



+8000 平面図 N



A-A' 断面図



B-B' 断面図



## 伊郷 吉信

Yoshinobu IGOU



1953年　東京都に生まれる。建築家。自由建築研究所代表。伝統工法の建築設計とともに、建築保存活用のためのアドバイス、調査、設計を行なう。東京理科大学理工学部卒業後、バンデコン建築設計研究所、群設計同人を経て、1988年　自由建築研究所設立。平成3年伝統技法研究会設立。自由建築研究所　代表、協同組合　伝統技法研究会　副理事、文京区文化財調査員、練馬区文化財保護審議会委員。文化学園大学造形学部建築インテリア学科講師 民俗建築学会理事、NPOたてもの応援団理事、NPOあさま北軽スタイル理事、東京を描く市民の会理事。

##### 総評

　第一印象は密度の濃い作品が少ないと感じた。選定した敷地で土地利用や建築のあり方を提案する現実形の提案が多くあったが、いずれも土地の読みが不足し、それ故かそこに現れるデザインの密度がなかった。自分の五感を使ってサーベイし、特性をまとめる方法が欠如していた。東京の空隙をねらった作品は説得に欠け、都市を離れた提案も無責任で違和感を感じてしまう。情報データに頼る気質からだろうか。環境に体ごと飛び込んで行うフィールド調査から得るものは大きく、かつてはサーベイの方法論が熟く語られた時代もある。もうひとつは、非現実的であるがイメージの発信が優先的に行われ、思考の説得を試みる作品だ。個性がうまく環境デザインと結ばれると強い説得力となる。これを目指した作品も企みにたどり着いていない。

　さて、悲観するばかりでない。煮詰めればよくなる作品も多々あり、票を集めた作品の中には都市の過疎を埋めようとする試みがあり興味をもった。卒業設計とは何だろう。生徒にとっては4年間の集大成でその間の成長が問われる自己表現の場である。また、卒業設計は生徒の審査をすると同時に教師の資質が問われる場でもある。生徒の審査は教師自身が審査される場でもある。迫力ある生徒同士、教師同士の議論が聞こえない。慰め合いの場のようで迫力がない。

　卒業設計は、人間形成に多く係り、真剣に取り組んだものだけが、一回りも二回りも大きく成長することが出来る。卒業設計は社会に問いかけ、社会変革の第一歩となるのである。

## 伊藤 寛

Hiroshi ITO



1956年　長野県生まれ
1979年　神奈川大学工学部建築学科卒業
1979-1984年　長谷川敬アトリエ、小宮山昭・アトリエR勤務
1986-1988年　早稲田大学大学院修士課程
1986-1987年　ロータリー財団奨学金にてミラノ工科大学留学
1988年　伊藤寛アトリエ設立／現在、京都造形芸術大学大学院教授
1989年　アルド・ロッシを審査委員長に迎えた名古屋デザイン博覧会「建築YATAI国際コンペ金賞
2006年　「海と山と空の住宅」で神奈川県建築コンクール最優秀賞
2010選手市第一運動公園再整備プロポーザルコンペ最優秀賞

##### 総評

　本当に久しぶりに神奈川大学の卒業設計優秀作品発表会にゲストとして参加させて頂きました。ありがとうございました。皆さんどんなテーマを選んでいるだろうかという点がまず気になりましたが、集住を含む住居系、街や駅のにぎわい、子どものための施設、斎場、展示空間など、それらは僕が卒業設計を提出した70年代後半とさほど変わるものではありません。そうそう変えようが無いのかもしれませんが、それにしても、今日建築設計に求められるものは僕らが学生あるいは卒業後間もない30-40年前の希望と可能性に満ちていた中でノホホンと未来を描いていた状況とは大きく異なり、これまでやってきた100年の反省の渦の中、建築家の存在だって問われるようなまったく新しく厳しい社会の最前線を切り開いて行く世代の皆さんが選んだテーマとしては、思いのほか平和で、そこはちょっと意外でした。

　人が過ごす事が出来る内部空間を持った人工物を作り出すこと。建築学科で教える事はその1点ですが、それを創り伝える大変さをこの卒業設計で皆さん痛感したことと思います。説得力を持った表現としてまとめられている人もいましたし、アイデアはともていいが表現のレベルではもう一息だなあ、と言う人も居ました。しかしその事はあまり気にしなくても良いと思います。大学はたった4年間、それもゼロからのスタートなので、できる限度があります。特に建築は目に見えない空気が詰まったものを作り、それが具合良いか悪いかを問う結構難しい分野です。一朝一夕には思うようにはいかないのも無理はありません。

　重要な事は卒業した後の10年間の意識の持ち方と経験の積み方です。あなたがいい建築家になれるかなれないかはそこで決まります。10年後の皆さんにまたどこかでお会いしたいです。

## 川辺 直哉

Naoya KAWABE



1970年　神奈川県生まれ
1994年　東京理科大学工学部建築学科卒業
1996年　東京芸術大学大学院修士課程修了
1997 -2001年　石田敏明建築設計事務所
2002年　川辺直哉建築設計事務所設立

現在
東京理科大学、法政大学、芝浦工業大学、広島工業大学、東京電機大学、神奈川大学にて非常勤講師

##### 2016年度/神奈川大学卒業設計講評会総評

　はじめに神奈川大学卒業設計講評会にゲストとして参加しました。それぞれのテーマに対して、流行に流されず、コピペ可能なデザインに頼ることもなく、素直に設計に向き合う姿勢は評価されるべきで、神奈川大学における建築教育の成果が現れていると思います。ただ素直であるが故に、建築と社会（テーマ）との関係が曖昧になり、何のために建築が存在するのかという根本的な命題を遠ざけている印象を同時に受けました。

　建築の役割や存在意義が多様化し、デザインだけでなく設計者のスタンスが問われる状況の中で、建築と自身の掲げるテーマを結びつけるのは容易なことではありません。だからこそ、個人の強い思いや考えが大きな意味を持ち、建築を媒体にして社会を変える力になると信じています。

　建築の設計は、我々を取りまく社会や環境との境界域のデザインであると考えていて、卒業設計であっても、如何にして建築が社会的存在となり得るかを可能な限りイメージすることはとても大切です。発表した学生たちにはそれぞれの思いがあり、講評会は十分に楽しませてもらいました。卒業設計を通して得た経験は大きな糧になるはずですから、自信を持って様々な事にチャレンジして欲しいと思います。

## 石田 敏明

Toshiaki ISHIDA



現在
東京理科大学、法政大学、芝浦工業大学、広島工業大学、東京電機大学、神奈川大学にて非常勤講師

##### 概評

　卒業設計、卒業論文、修士設計、修士論文はいずれも学部4年間、修士2年間の集大成であり、また学生時代にしかできないことを思考し、具体的に表現する得難い機会である。一方、社会の中でのリアルな設計活動は建築のリアリティ（機能や耐用年数など）と責任がついてくるし、法規、経済性、時間など制約が多い。それでも世の中には圧倒的な印象や感動を与える建築が存在する。僕は卒業設計は所詮、フィクションだと考えている。それゆえ、あまりリアリティは求めていないが、できたら良いなどか見てみたいと思わせる、よく分からないが面白そうな建築や空間、環境の新しい提案を評価したいと考えている。つまり今までにない構想と表現（図面や模型）で現状を打破する可能性のある提案を見た。

　今年の卒業設計では現状をより良くしようという地域をテーマにした提案が多かったように思う。つまり、ある程度、着地（落としどころ）が予想できる。現在は情報社会であり、成熟した社会であるので致し方ないのかもしれない。でも、そうであるからこそ、個人の発想、能力に期待したいし、それこそが若者の特権であるように思う。そのためには、やはり考え抜いて、未熟だけれども、強さのある建築が求められているのではないだろうか。模型は大きく、エネルギーがかかっているのは良くわかるが、そろそろ次の表現、新しい表記方法が出てきて良いのではないだろうか。是非、切り拓いて欲しい。

## 内田 青蔵

Seizo UCHIDA



現在
東京理科大学、法政大学、芝浦工業大学、広島工業大学、東京電機大学、神奈川大学にて非常勤講師

##### 総評

　今年度の卒業設計は、はっきり言えば、低調な内容だったように思う。図面を見ても、迫力がないし、そもそも何を伝えるために書いているのか分からないものが多かった。模型も提出用ということで形式的に造ったといった印象しか感じられなかった。私の研究室の学生も、6名と例年にないほど卒業設計の希望者がいた。ゼミで卒論生と混じって、卒業設計を選択した学生にも、コンセプトや資料整理、あるいはエスキースなどを出すように指示したが、なかなか作業が進まず、指導にも限界を感じることもあった。その結果の出来は、やはり総じて低かった。こうしたことも低調さの一因にあるように思い、指導者として大いに反省している。それにしても、卒論もそうだが、大半の作品に“4年間大学で学んだ成果の総決算”といった逸る気持ちが込められていないように感じられるのは何故であろうか。卒論、卒業設計という単に単位を得るためのギリギリを狙っているかのような論文や作品が多いのは、誠に残念でならない。1年をかけての課題であることの意味を、もっと理解してほしかった。指導が悪かったのかもしれないが、一方“学び”を苦痛なものとせず、“楽しいもの”へと自らの気持ちを常に前向きに向けようとする努力が学生諸君には欠けていた気がする。社会に出ると、大学以上に厳しい世界と出会うことになる。そこで、後ろを向かず、体当たりする気概がほしい。自らの反省を込めて、あえて、苦言を呈しておきたい。

## 山家 京子

Kyoko YAMAGA



現在
東京理科大学、法政大学、芝浦工業大学、広島工業大学、東京電機大学、神奈川大学にて非常勤講師

##### 総評

　今年度は修士論文（論文）がなく、卒業論文も計画系は1本のみであった。他大学では、卒業設計が減る一方で論文数は増えているとの声を聞きし、そもそも、修士は論文のみ、あるいは卒業論文は全員必修で設計は選択としている大学もある。正直、寂しい現状であり、計画系指導教員として反省する点も多い。そんな中、ディプロマ賞の松川さんの卒業論文は清々しく秀逸だった。論文は主題、あるいは調査対象への関心の強さが重要である（設計も同様）。松川さんの論文は素材（対象）のよさが際立っているが、その素材も彼女の関心を引き寄せたものであり素晴らしい。

　修士設計では、中間発表会から「作ることの是非」が話題となっていた。すなわち、対象エリアにあって地域課題を解くためには「作らない」あるいは「既存建物を活用する」のが素直な解法と思える場合である。対象エリアをよくしたい情熱は伝わるのだが、作った建築がオーバーボリュームであったり、維持が困難であったり、リアリティに欠けるのだ。たしかに、現代は少子高齢化成熟社会を背景に「作らない時代」と言える。しかし、建築設計手法や空間構成を主題にすることはできるし、その建築が立地すべき敷地環境も見つかるはずである。また、地域課題からアプローチするにしても、ささやかなスケールであってよいかもれない。社会との接続を保ちながら「建築のできること」を考えてほしい。

## 曾我部 昌史

Masashi SOGABE



### 総評

今年度の卒業設計を思い返すと、圧倒的な存在感をもった作品があまりにも少なかったことが気に掛かる。総じて平均的なものばかり、という印象である。ここ数年の傾向が、より強くあらわれた。卒業設計は、個々人がもつ関心のベクトルが明確にあらわれるような、強い意志に基づいたものであって欲しい。場合によっては、検討のバランスを大きく欠いたようなものでもよいとさえ思う。周辺には目も向けず複雑な空間構成のみを追求したもの、地域調査ばかりが厚くて具体的な空間がみえにくいもの、異常なまでに規模が大きくて手の回っていない部分が残るものなど。。。何らかの側面を徹底的に探求しようという意志を持つことができれば、他に検討が不足している部分が残っていたっていい。そういったものは、講評会などではいろいろと厳しい指摘を受けるだろう。最終的に、高い評価を得ることができないかもしれない。それでもよいのではないか。自らの関心をばやかにしてまで、適度に理解され、それなりな評価が得られるようなものをつくるために時間を費やすことはない。設計を志す人たちにとって、卒業設計での経験や思考は将来にわたって大事な指標となるものである。検討が不足していた側面は後からいくらでも補強ができるけれど、何かの関心をもって探求を重ねるような圧倒的な意志をもつことは簡単ではない。卒業設計は、それが可能な少ないチャンスの一つなのである。そういった思いの先に生み出される作品が増えることを願う。

## 中井 邦夫

Kunio NAKAI



### 総評

本編で詳しく紹介されているもの以外で個人的に印象に残った作品について触れておく。①卒業設計…市川：着眼点と表現は良かったがもっと徹底的に竹の可能性を追求していたほしかった。伊藤：壁による領域や空間デザインはもっと展開できる可能性を感じた。村松：敷地周辺や地形との関係がより緊密であればなおよかったが、表現力は素晴らしい。小田桐：建築的にはやや通俗的な印象もあったが、既存の公園や橋と関係づけたデザインには好感が持てた。須山：表現が足りない印象だったが、空地や屋上を活用した仮設的かつ可変的な都市建築の可能性を感じた。谷：自動車への着目や空間構成は面白いと思ったが、自動車ならではのデザインをもっと徹底してほしいと感じた。②卒業論文…石原：神奈川大学初期の校舎の変遷、大池：白楽駅近くの市原邸に関する調査研究などが興味深かった。③修士論文…興味深いユニークなテーマのものが多く力作も多かった。全体的には、卒業設計のテーマ的、手法的な平板化がさらに進行している気がした。いま社会では、建築デザインそのものの存在意義が問われているともいえ、そのためか学生たちも(もしかしたらプロの建築家たちも?)なんとなく自信なさげで、自分たちの存在理由を説明するための根拠探しに躍起になっている。デザインの説得力が重要であることは言うまでもないが、コンセプトが説明のための説明のようになってしまう、そのために空間の構想力そのものへの信頼が薄れていくようだ、と本末転倒ではないかと感じた。

## 津田 良樹

Yoshiki TSUDA



### 総評

例年に漏れず今年度の卒研・修論ともにそれぞれ力作、学生らしい作品であった。ところで、2016年度の卒研・修論の講評とは多少ずれるかもしれないが、今年度末で退職することにした私が言い残して置きたいことがある。

神奈川大学建築学科も昨年度に50周年記念を迎えるまでの歴史を刻んできた。その間、卒業生はそれぞれの分野で着実に実績を残し、高い評価も受けている。派手ではないが、堅実な建築学科として認識されていることは極めて喜ばしいことだ。とはいえ、多少物足りないと感じている点がある。それは、建築家としてのスターが創設して50年にもなるのに出てないように思う点である。それぞれ、中央・地方の大学を問わず、一人くらいはスターらしき人物を出しているものだ。にもかかわらずその点では神奈川大学は少々寂しい感がある。これは創設以来近年まで、デザインコースを牽引してきた白濱先生を中心とした教育方針の影響もあるだろう。それは、高名にならなくともよい、地道に地域に奉仕する建築家(吉阪隆正の『三つの建築家像』のいう「愛に奉仕する建築家像」に当てはまるだろう)でありたいというようなことを中心に掲げていたと思われる。私自身もそのようにありたいと考えてきた。その看板を下ろす必要は全くないのだが、それが行き過ぎたのか、突出して目立つようなスターが出ないことに繋がったのかもしれない。スターが生まれるには突出した個人の実力だけがものをいうわけではない。周囲を含む総合力が必要なのだ。このあたりで有力個人を押し上げる、学科・大学・同窓会などの総力を挙げたバックアップのもとスターを生み出す(作り出す)時期ではないかと思われる。そしてそのことが学科の新たな推進力になるのではないかと思われる。

## 卒業論文

修理工事報告書からみた 囲炉裏・かまど・流し・押し入れ・上便器・湯殿	澤田 未郷
村是調査書からみた明治34-35年の農村における家屋について	大倉 啓右
六角橋キャンパスにおける横浜専門学校及び神奈川大学初期の校舎の変遷	石原 文
わが国戦前期における持家の普及に関する一考察 —日本電話建物株式会社の住宅懸賞を中心として—	清 直樹
都心部における公共空間活用に関する研究 —横浜みなとみらい地区の社会実験を事例として—	當麻 沙織
★同潤会が手掛けた勤め人分譲住宅について —分譲住宅事業の最初の事例である「窟藤分譲住宅」を中心に—	松川 英莉奈
明治以降のわが国のガラス窓の普及について ～ガラス窓と生活スタイルの変化～	渡辺 早貴
横浜市における戦前期の洋館付き住宅 「市原邸」に関する調査研究	大池 奏音
銭湯建築に見られる「宮造り」に関する研究	佐藤 洋平
奥能登・珠洲における須受八幡宮の能舞台と「善兵衛どん」の土蔵便所について	高橋 祐太郎

### 卒業設計〔設計A〕

都市の空白を跨ぐ —豊橋駅・跨線駅舎及び図書館の提案—	黒田 雄也
部屋であり、家具であること —人体寸法に基づいた空間構成の可能性と追求—	白鳥 さゆり
「農」の拠点 —三浦市における宿泊体験複合施設型道の駅の提案—	浅見 慶太
運動形成の拠点 —地域の運動習慣をひとつの拠点で繋ぐ—	石本 将之
雪の下から火花を見る —信濃川沿いの観光施設の提案—	伊丹 惟
○憩いの道火 —竹文化を起点として築く自然との関係—	市川 貴一
○壁と道が与える都市での暮らし —都市の住宅地における住宅と公共の場の調和—	伊藤 将吾
Alternative Line —農から始める新たな地域の活動拠点—	印東 尚朗
木陰の居場所 —木質構造による商業施設の提案—	加藤 佑弥
○地域と共に紡ぎ育む —都市部における応急仮設住宅のあり方の提案—	川田 怜奈
◎別れを受け入れる、旅するよう —最期を迎える空間構成—	木村 捷希
地域コミュニティを創出する図書館	小島 健太
住民を引き込み場が賑やかになる集合住宅	櫻井 万里奈

○周囲に溶け込む休息の場 —熱海におけるリゾート型宿泊施設の提案—	杉山 夏海
農が繋ぐ人の縁 —上越妙高駅における農業施設の提案—	関 翼
Houseのつながり —住宅と商業を結び提案—	程 琳瑯
Kanagawa U+ ～身の回りから変える社会～	武藤 匠
○生きもの語り ○生きものが囁りなす新しい暮らしの提案	村松 健太郎

## 卒業設計〔設計A〕

待ち時間に彩りを —地方都市におけるバスターミナルの新しい在り方の提案—	吉川 寛
継承する街の象徴 —旧千住郵便局 保存・再生計画の提案—	石鍋 竜也
○延長線上のアクティビティ —公園と川を繋ぐ複合施設の提案—	小田桐 礼香
○緑と共に育つ —新たな動線計画の計画と集合住宅の提案—	掛川 絵梨香
地形と自然からなる道 —世代を併せたキャンプ場施設の提案—	鹿嶋 鯉太郎
海にかえるものたち —南海トラフ巨大地震と向き合う—	加藤 正佳
Happy House —胡同と四合院を中心とする住宅街の提案—	胡 維
子供と地域と生き続ける復興小学校	古塩 知佳
継承する文化 —甲府中心市街地活性化計画—	五味 成耶
とくはなれてそばにいて —刑務所の提案—	酒井 陸平
スポーツコミュニティ —新たな運動公園のあり方—	佐々木 鮎
持ちつ持たれつ —池に隣接する公園内におけるコミュニティ施設の提案—	佐藤 麻亜菜

これらに向けた駅 —Redevelopment—	関 拓実
格子でつながるワイナリー —塩尻市における体験型ワイナリーの提案—	高砂 彩花
これからを彩る —高齢者と学生が園芸でつくる風景—	高田 大輔
回遊する風景 —観光客と地域住民の交流拠点施設の提案—	田口 優斗
○車活 —地域活性化の起爆剤となる道の駅—	谷 薫
隆起する土地に根付く —多摩川住宅都市再開発-第一主要施設提案—	田村 駿介

◎出会い、育つ —左近山団地における保育園と学童保育の提案—	野村 奏実
投射する駅 —駅を介した物流の提案—	羽鳥 佑希
福祉と街をつなぐ、壁 —旧中学校跡地利用による地域福祉の提案—	久河 和生
◎大谷の石の継承 —大谷石採石場跡地と複合した文化体験施設の提案—	森島 駿平
文化を伝える —小田原市における新たな宿泊施設の提案—	横山 龍
○表と裏の空間を繋ぎ留める —オフィス街の水辺空間における認識の転換—	櫻井 浩平

★下町の輪郭 —準工業地域における町工場と住宅の断絶をどう調停するか—	千々松 海斗
卒業設計〔設計B〕	
農業体験と観光を含むコーヒー生産施設の提案 —各室の特徴とつながりからみたワイナリーの公開手法を踏まえて—	枝川 和樹
◎まちをつなぐ駅 —駅を含む街区からみるまちと駅の関係性—	下山 智加
浮遊する風景 —葛坪の建物に設置されたインスタレーションにおける平日常時観をくりだす表現手法—	丹羽 貴行

## 卒業設計〔設計B〕

社寺の空地を活用した地域コミュニティの構築 寺院を含む街区の空間構成—新宿区を対象として—	蟹江 洗貴
--	-------

○呑川プロムナード 蒲田駅東口地区における建物の建て替え及開発過程	須山 高志
--------------------------------------	-------

伊香保温泉における湯治場を含む滞在型観光施設の提案 道のネットワークと建物用途に着目した温泉街の構成	東田 萌
---	------

設計A:建築物あるいは都市計画など、各自の独自の視点による設計。テーマを各自が自由に設定。

設計B:都市計画・開発計画などについての計画書、または建築や都市に関する特定のテーマについての調査分析報告、および設計図面の作成。

## 修士論文

★「風穴」の特性を応用した空間の形成 —群馬県桐生市水沼における農業観光拠点の提案—	金子 奨太
---	-------

◎防災から考えるこれからの地方のあり方 —徳島県美波町における地域特性を活かした防災計画の提案—	児玉 貴典
---	-------

ハンセン病療養所における将来構想 —国立駿河療養所を対象とした段階的建築更新の提案—	古永家 由記
---	--------

◎コミュニティの継続を意図した住環境の提案	足立 将博
-----------------------	-------

高密度微動H/Vスペクトル比による ハザードマップ作成のためのデータベース構築	井上 駿
--	------

高齢化地域における生活拠点整備と歴史散策路の観光地化計画 —神奈川県横浜市中区入らが通における古道の保存と新たなコミュニティの構築—	神田 貴之
---	-------

裏界線を活用した住環境の空間構成に関する研究	木下 優奈
------------------------	-------

高度経済成長期に発展した地域のこれからのあり方 —厚木市緑ヶ丘地区における地域の魅力を結び新しいコミュニティ空間の提案—	高木 弘之
---	-------

小径孔画像を用いたコンクリート中性化深さの 光学的計測法に関する研究	張 楊
---------------------------------------	-----

移住者による新たな参道の在り方の再編 —大三島大山祇神社参道活性化計画—	中野 聡太
---	-------

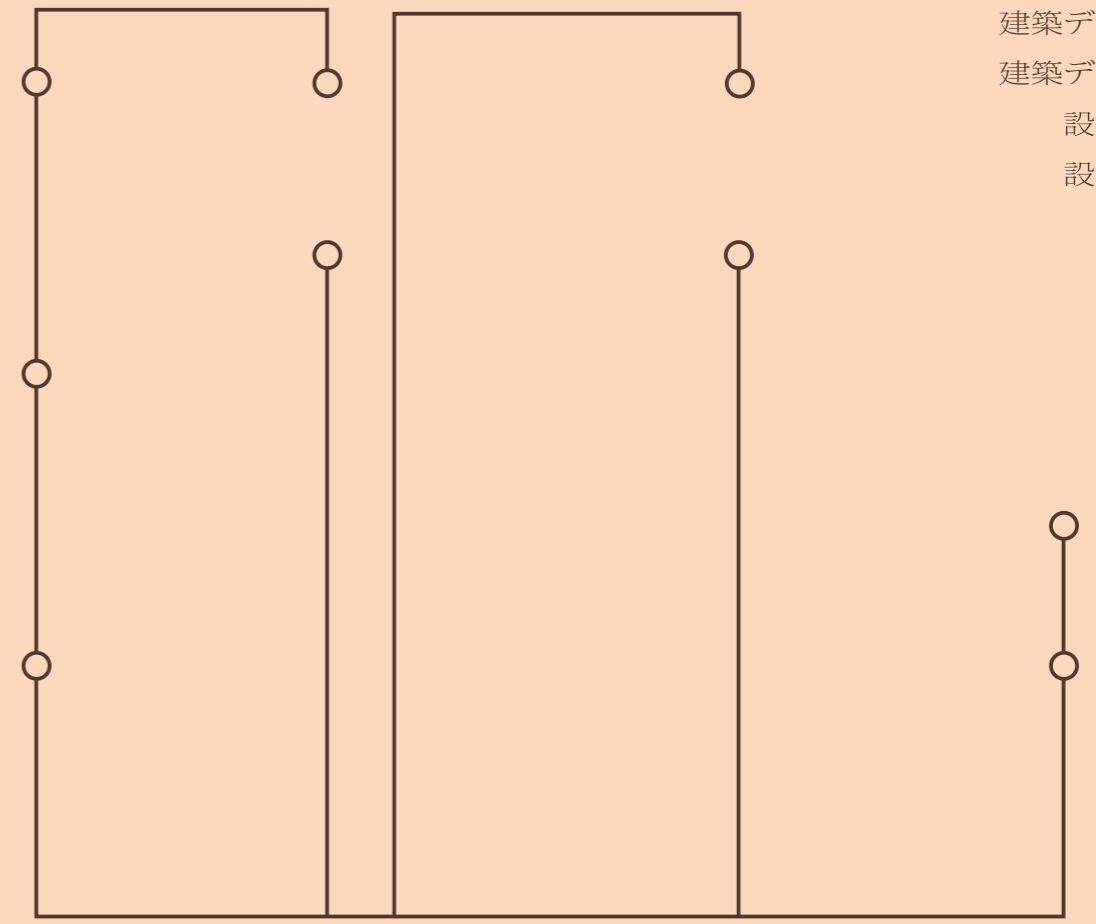
複合建築上層部操作による空間的関係性の再構築 —木更津駅前商店街を事例として—	曳田 百香
--	-------

アンボンドPC圧着梁のせん断性能に関する研究	柳沼 尚輝
------------------------	-------

★ディプロマ賞
◎優秀賞
○卒業設計優秀作品発表会発表者

学部設計課題 優秀作品

- 建築デザインⅢ
- 建築デザインⅡ
- 建築デザインⅠ
- 設計製図Ⅱ
- 設計製図Ⅰ



## 担当

曾我部 昌史(教授)、岡村 晶義(非常勤講師、アトリエ鯨)、佐々木 龍郎(非常勤講師、佐々木設計事務所)、渡瀬 正記(非常勤講師、設計室)

Masashi SOGABE (Professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer, Atelier KUJIRA), Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer, SASAKI ARCHITECTS & ASSOCIATES), Masanori WATASE (Guest Lecturer, an office)

吉岡 寛之(特別助教)、田中 啓介(M1、TA)、遊佐 舜(M1、TA)

Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Keisuke TANAKA (M1, Teaching Assistant), Shun YUSA (M1, Teaching Assistant)

## 総評

第一課題は、展示、待合所など多様な用途の受け皿となる「街のインフォメーションセンター」である。遊歩道のある水路に面し、地下鉄駅からの出口にも接続する。建物内の構成をまとめるだけでなく、周辺環境の取り込み方や、諸動線の扱い方も重要である。吉武くんの提案では、グリッドを傾けることで敷地内外の場を緩やかに関係づけ、ヘタ地的に生まれる空間がたくさん居場所となった。竹島くんの提案では、建物外周を人工地盤的に取り巻く空間が、立体的に全体を繋ぐ。レベルごと方位ごとに異なる機能的要請や場の特性に応答している。

第二課題は、新しい居住様式を実現する「50人が暮らし50人が泊まれる、この先の暮らしの場」を構想するというものである。実社会ではシェアハウスなどの事例が増加しているが、学生の提案では通常の集合住宅と変わらないものになりやすい。矢吹くんは、公共性の高いものから低いものの順に諸用途の場を積み上げ、その内側で共用空間と動線とを一体化させ全体を統合した。性格の異なる場が多様に関わる。中村さんの提案では、並行して立つ壁が、立体的に立ち上がる5つの用途を分節しながら、壁に設ける開口で、その関係を調整するという方法が成功した。

(曾我部)

## 非常勤講師 経歴

岡村 晶義  
Akiyoshi OKAMURA



1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校(現早稲田大学芸術学校)卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎  
Tatsuro SASAKI



1964年生まれ、1987年東京都立大学(現首都大学東京)工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程満期退学、1992年(株)デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

渡瀬 正記  
Masanori WATASE



1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年～1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立

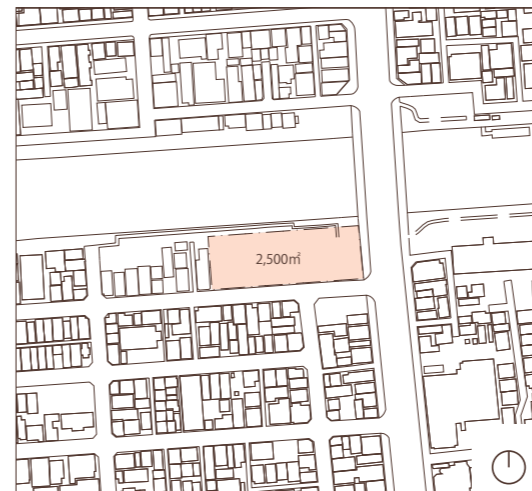
## 第一課題 街のインフォメーションセンター

観光案内所と地域のコミュニティ施設のコンプレックスである。観光案内所としては、この街に初めて来た人の受け皿として、観光地やイベント予定などの情報を提供する観光サービスの拠点であり、また、地域の歴史を紹介する展示スペースや、地域の特産品を販売するショップ、カフェなどを有する。地域のコミュニティ施設については、周辺地域の観察と分析から、各自が加える用途を検討し建築の計画として提案する。集会所などの他、高齢者介護や育児の支援の場や、炊事場や倉庫を備えた防災拠点として位置づけることも有効だろう。敷地の持つ性格をどのように活かし、周辺地域の持つ課題にどのように対応するのか。調査と分析を元に、積極的な提案につなげて欲しい。また、本計画では、地下鉄駅を有する既存の公園内を敷地として設定している。地下鉄駅コンコースとの繋がりや、建物周辺の外構計画についても、合わせて提案を行うこと。

【設計条件】敷地:東京都江東区清澄3丁目

用途地域:準工業地域、商業地域 敷地面積:2,500㎡

建ぺい率:80% 容積率:500%



## 第二課題 50人が暮らし50人が泊まれる、この先の暮らしの場

共に暮らすことで豊かな時間が生み出される、そういう住空間の設計である。住宅部分での共有のスタイルは、それぞれ独自に考える。シェアハウスやシェアアパートメントのように、共通の趣味やライフスタイルが独特の共有スペースを生むようなものなどが、その代表的な例である。それぞれの個室だけではなく、共有して活用される場が生み出す可能性を考えながら、各自で構想する。そして、合計100人が暮らす場を支え、地域と関連づける空間として、オフィスとサービスのスペースを計画する。オフィスでは、一次利用のために貸しだされるスペースを持ち、また、複数の会社が設備や空間を共有するような形式で提案する。サービスでは、隣接する公園の環境を生かした別棟を公園内に計画し、床面積は200㎡以内とする。敷地とその周辺が、この先の豊かな暮らしの場となるよう、積極的な提案となることを期待する。

【設計条件】敷地:神奈川県横浜市中区元町1丁目

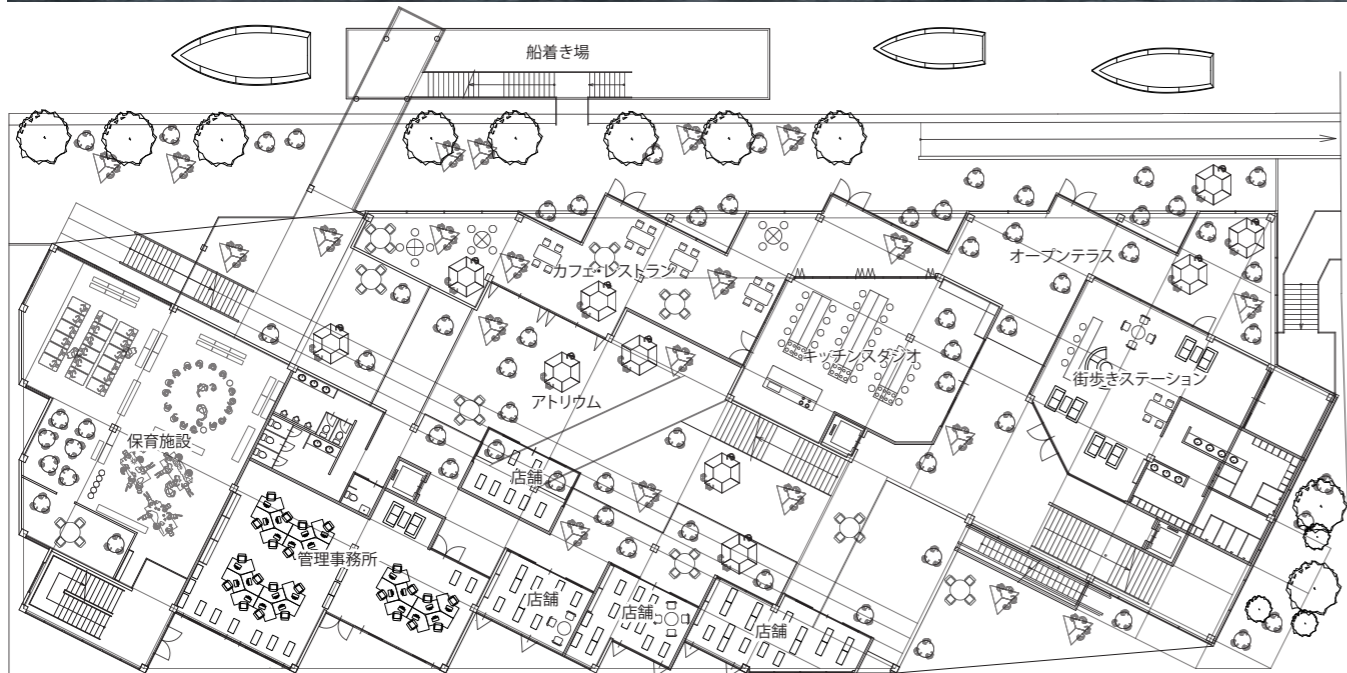
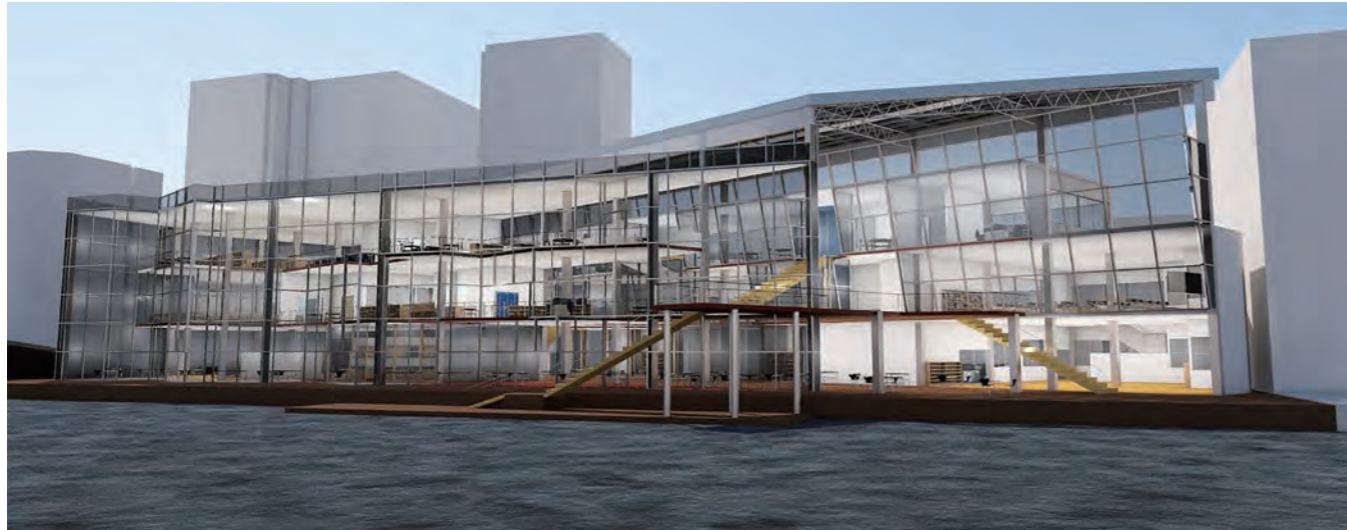
用途地域:商業地域(防火地域) 敷地面積:1,035㎡

建ぺい率:80% 容積率:500%



吉武 昂毅  
Kouki YOSHITAKE

下町NOW  
SHITAMACHI NOW



竹島 大地  
Daichi TAKESHIMA

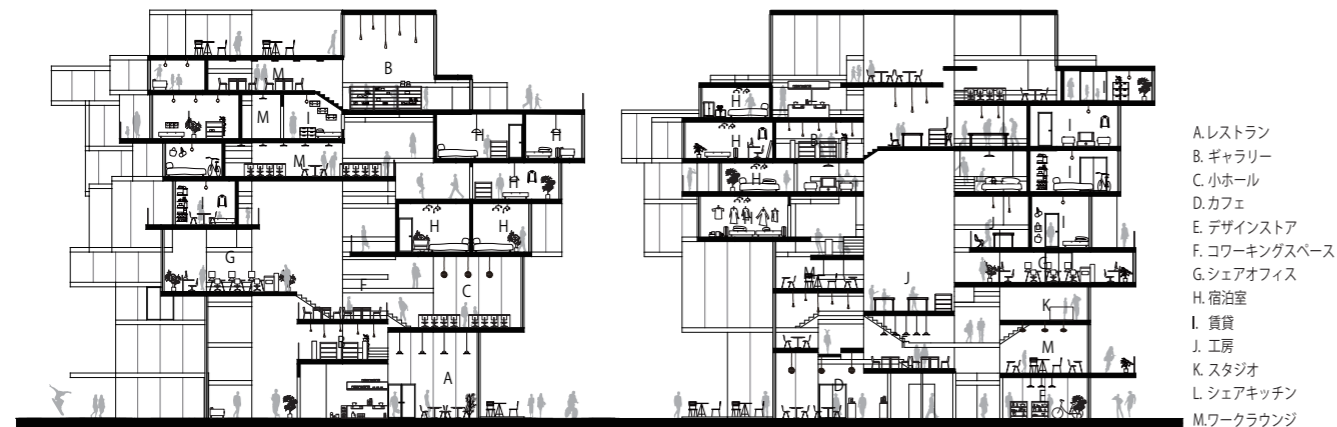
流れ～記憶の継承～  
Flow ~Inheritance of memory~





矢吹 拓也  
Takuya YABUKI

出座異名一。designerが新たに生み出す商店街  
Designer. Shopping districts newly created by designers



中村 圭那  
Keina NAKAMURA

壁を介して異空間を体験する住処  
A place to experience different space through the wall



スタジオからアトリエを見る



## 担当

石田 敏明 (教授)、曾我部 昌史 (教授)、木島 千嘉 (非常勤講師、木島千嘉建築設計事務所)、  
八島 正年 (非常勤講師、八島建築設計事務所)

Toshiaki ISHIDA (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Chika KIJIMA (Guest Lecturer, Kijima architect and associates),  
Masatoshi YASHIMA (Guest Lecturer, Yashima architect and associates)

木村 暢子 (教務実務職員)、稲村 一晃 (M1、TA)、庄子 利佳 (M1、TA)

Yoko KIMURA (Practical Instructor), Ikko INAMURA (M1, Teaching Assistant), Rika SHOJI (M1, Teaching Assistant)

## 総評

二つの課題は実在する具体的な敷地を指定し、それぞれ7~8週で構成されている。第一課題の「海辺のセミナーハウス」は道路と海に挟まれたリニヤーナ敷地であるが、複雑な高低差と一部半島を持つ。また道路を隔て、2-3階程度の民家があり、その背後には小高い緑地がある。計画施設からの眺望や民家への配慮、風、太陽の軌跡、短期長期の施設の使い方と過ごし方など周辺環境とプログラムを解読し、リニヤーナ敷地を活かした案が求められた。提案は高低差を利用した中庭型のコンパクトな一棟案と機能が分散配置された分棟案にほぼ大別できる。いずれの案も断面計画と平面計画の各機能の繋ぎ方とランドスケープデザイン(外構)の優れた提案が上位を占めている。第二課題の「教科教室型の学校」は大学キャンパスに近い松本中学の敷地を想定した。住宅地に囲まれたかなりの高低差のある敷地のため、周辺を含めた敷地調査した上で、計画に取り組んでいる。学生たちが経験した教育施設の計画であるため、使い方は熟知していると思っていたが「教科教室型」を経験している学生はそれほど多くはなかった。それゆえ、ホームベースと各教科教室の関係と移動空間の構成、セキュリティや管理部門との関係、地域への開放施設など複雑な関係を解くことが要求された。つまり教室、事務室、体育運動施設など複合用途の施

設を解くことであり、また学生のアクティビティや居場所を計画するとともに如何に統合するデザインが評価の対象であったが、それに答えた提案はあまり見られなかった。地域との関係を考え、高低差を建築に取り組み、部分と全体を統合するシステムの提案が今後の課題と言えよう。

(石田)

### 非常勤講師 経歴

木島 千嘉  
Chika KIJIMA

1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建建設入社、1999年O.F.D.A associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

八島 正年  
Masatoshi YASHIMA

1968年生まれ、1993年東京芸術大学美術学部建築科卒業、1995年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、1998年八島正年+高瀬夕子建築設計事務所共同設立、2002年八島建築設計事務所に改称

## 第一課題 海辺のセミナーハウス

横須賀市と葉山町の境界部に位置する長者ヶ崎(1.5ha)に神奈川大学のセミナーハウスを計画する課題である。セミナーハウスは、短期(2~3泊)または長期(数泊~2週間)の宿泊滞在を前提としたワークショップや発表会、展示批評会等の活動の場である。研修機能、宿泊機能、管理機能、研究所機能の設置を条件とした。これらの機能に加え、周辺居住者の海辺の自然景観を楽しむ散策やレクリエーションなども想定した上で、海辺の自然条件を活かした造形として愛される建築をデザインすることが求められた。

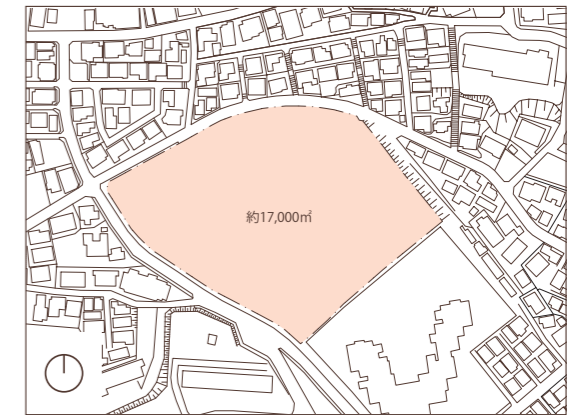
【設計条件】 敷地:長者ヶ崎 神奈川県三浦郡  
葉山町下山口周辺 面積:約12,000㎡



## 第二課題 中学校 (生徒たちの知的冒険)

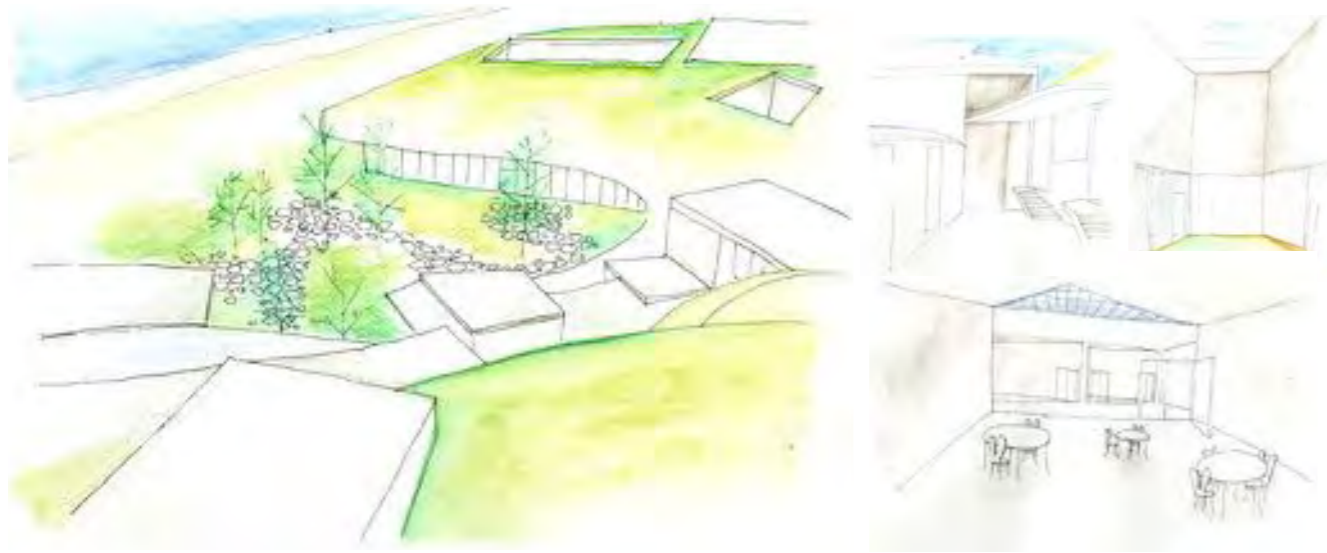
都市中心部の住宅地に隣接する中学校の計画である。中学校の形式はこれまでの特別教室型(特別教室+普通教室)から進展した教科教室型とした。敷地は横浜の特徴的地形である谷戸地形の中に位置し、周囲は戸建住宅、公団住宅、分譲マンションなどが取り囲んでいる。傾斜面の地形を積極的に取り込みつつ周辺の状況に対応した、場所性をよく読んだサイトプランニングを環境デザインを心がけることが求められた。なお、本課題と並行して開講された講義では、オープンスクールから教科教室型の考え方や学校空間計画の工夫について解説がなされ、科目間の相乗的学習が企図されている。

【設計条件】 敷地:松本中学校神奈川県横浜市神奈川区  
三ツ沢下町30-1 面積:約17,000㎡  
建ぺい率:60% 容積率:150%



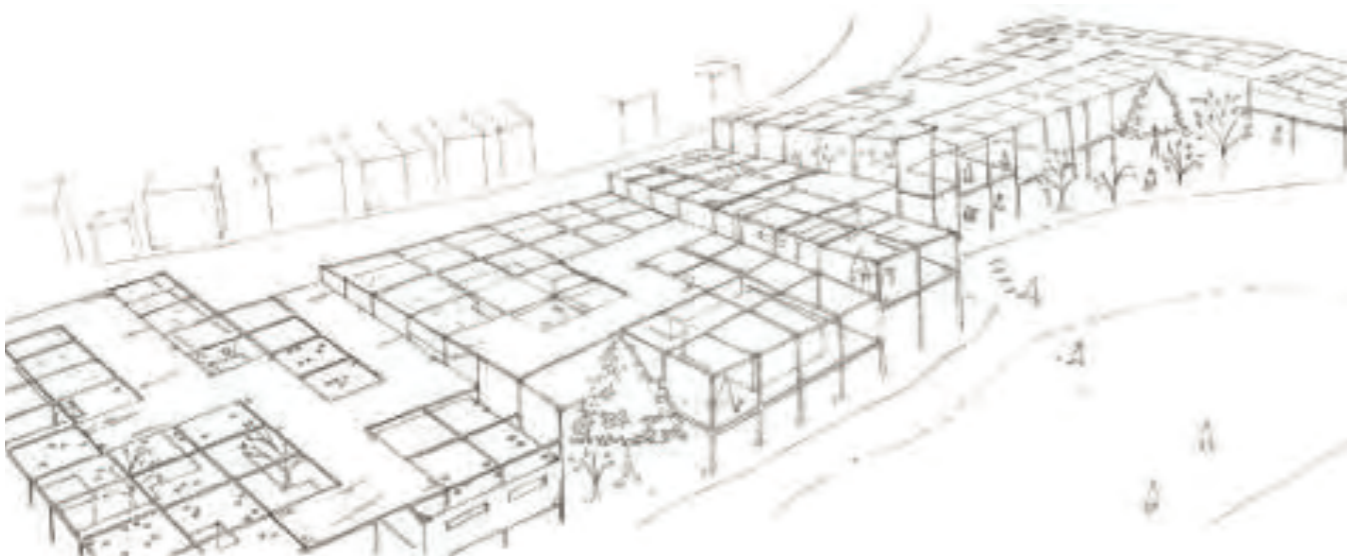
馬鳥 夏美  
Natsumi BATORI

きえて、うまれる  
Disappearing architecture, people do activities.



大橋 千夏  
chinatsu OHASHI

海に沿う  
Along the Ocean



竹島 大地  
Daichi TAKESHIMA

いばしょ  
Whereabouts



水上 翔太  
Shouta MIZUKAMI

町と街を結う多彩な道  
The colorful way where I do the street and the town



## 担当

山家 京子(教授)、石田 敏明(教授)、吉岡 寛之(特別助教)、田野 耕平(特別助手)、  
猪熊 純(非常勤講師、成瀬・猪熊建築設計事務所)、アリソン 理恵(非常勤講師、一級建築士事務所teco)

Kyoko YAMAGA (Professor), Toshiaki ISHIDA (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Professor), Kohei TANO (Research Associate),  
Jun INOKUMA (Guest Lecturer, NARUSE・INOKUMA ARCHITECTS), Rie ALLISON (Guest Lecturer, teco)

足立 将博 (M2、TA)、佐藤 滉子 (M1、TA)、黒田 雄也 (B4、SA)、武藤 匠 (B4、SA)

Masahiro ADACHI (M2, Teaching Assistant), Hiroko SATO (M1, Teaching Assistant), Yuya KURODA (B4, Student Assistant),  
Takumi MUTO (B4, Student Assistant)

## 総評

本科目は、小・中規模施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画的な基礎を学ぶとともに、自らが設定したテーマを建築化する方法の修得を目標としている。3つの課題を設定し、建築のプログラム及び空間構成において、周辺環境との関わりを意識したデザインを促している。

「第I課題：公園に面して建つ地域図書館」では、図書館の建築計画を丁寧に解きながら、かなりのヴォリュームを占める開架図書室をどう扱うかが鍵となる。「第II課題：Rurban House」は都市(urban)と農村(rural)が出会うエッジな敷地に、近隣とシェアできる空間の提案を求めた住宅課題である。「第III課題：大学キャンパスを彩るキオスク」は建築と家具の間のスケールで場をつくり出す短期課題である。

今年度はキオスク、住宅、図書館と3つの異なるスケールの課題となっており、キオスクに対するアプローチに戸惑う学生も多く見られた。いずれも単一のアイデアを展開する手法が大半で、図書館課題にあっても造形処理に関心が注がれ、動線やゾーニング、構造計画など論理的かつ計画的作業の弱さ、つまり「解く」意識が希薄なのが気になった。

(山家)

## 非常勤講師 経歴

猪熊 純  
Jun INOKUMA



1977年生まれ、2002年東京大学工学部建築学科卒業、2004年東京大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了、2004年～2006年千葉学建築計画事務所勤務、2007年成瀬・猪熊建築設計事務所設立、2008年～首都大学東京助手

アリソン 理恵  
Rie ALLISON

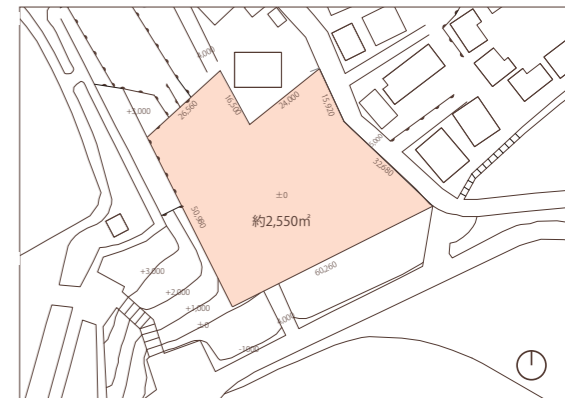


1982年生まれ、2005年東京工業大学工学部建築学科卒業、2009年NMBW(オーストラリア)にてインターンシップ、2011年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学、2011年～2014年一級建築士事務所ルートエー勤務、2014年～2015年アトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室勤務、2015年一級建築士事務所teco設立

## 第一課題 公園に面して建つ地域図書館

岸根公園の一角の住宅地と隣接する敷地に地域図書館を計画する。書籍の保管・管理と閲覧という図書館の基本機能を満たしつつ、図書館の今後の在り方やコミュニティ施設としての役割について考えることを求めている。さらに岸根公園との空間的繋がりをふまえた、外部アクティビティの構想と一体的なランドスケープデザインを要求している。

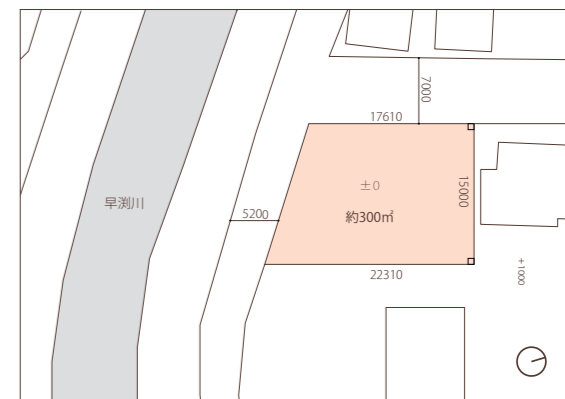
【設計条件】 敷地面積：約2,550㎡ 用途地域：第一種低層住居専用地域  
建ぺい率：60% 容積率：100%



## 第二課題 Rurban House 一地域に開かれたスペースをもつ住宅一

都市と農村のエッジに位置する敷地にシェアスペースをもつ住宅を設計する。敷地は港北ニュータウンの計画範囲の縁辺部にあり、北西側に戸建住宅が建ち並び、南西には果樹園や畑地などの農的環境が維持されている。家族構成は夫婦+子ども2人の4人家族である。 $+\alpha$ の空間として、近隣の住民との関わりを持つ活動を行うためのスペースを計画することを要求している。活動内容は各自が自由に計画する。

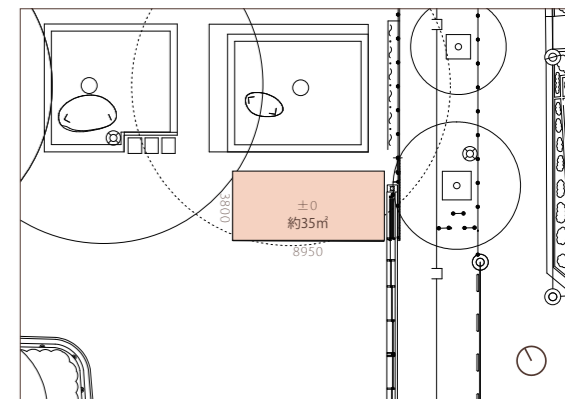
【設計条件】 敷地面積：約300㎡ 用途地域：市街地調整区域  
建ぺい率：60% 容積率：200%



## 第三課題 大学キャンパスを彩るキオスク

神奈川大学横浜キャンパス東門脇の東屋に設置する装置を設計し、既存の東屋と一体でキオスクとして機能するものを求めている。キオスクは、もともと庭園にあつて「日陰をつくるもの」を指す。ヨーロッパでは街角を彩る都市空間要素としても機能している。用途は、神奈川大学のノベルティグッズや、水場を必要としない飲み物・スナックの販売とするが、具体的には各自が計画する。キャンパスに彩りを添えるキオスクのデザインを要求している。

【設計条件】 敷地面積：約35㎡



前田 沙希  
Saki MAEDA

mutual



松尾 祐奈  
Yuna MATSUO

溶け込む「本」



鈴木 啓生  
Yoshio SUZUKI

大屋根の下で集う



佐塚 将太  
Shota SAZUKA

共存する暮らし



飯田 康二郎  
Kojiro IIDA

るふるふ



掛川 真乃子  
Manoko KAKEGAWA

めくり、めぐる



横山 優莉菜  
Yurina YOKOYAMA

のりしろのある家



向 咲重  
Sakie MUKAI

梁をくぐると



相澤 優衣  
Yui AIZAWA

本の楽しみかた



中山 実穂  
Miho NAKAYAMA

開く閉まる



長谷川 舞  
Mai HASEGAWA

彩りの入り口



市毛 淳也  
Junya ICHIGE

小さな囲いから



## 担当教員

中井 邦夫（教授）、津田 良樹（助教）、吉岡 寛之（特別助教）、鄭 一止（特別助教）、鈴木 信弘（非常勤講師、鈴木アトリエ）、ベラ・ジュン（非常勤講師、ISSHO建築設計事務所）

Kunio NAKAI (Professor), Yoshiki TSUDA (Assistant Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Ilji CHEONG (Assistant Professor), Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Jun VERA (Guest Lecturer, ISSHO Architects)

## 担当TA,SA

中野 聡太（M2、TA）、三浦 みづき（M2、TA）、西蔵 祥大（M1、TA）、原山 雅也（M1、TA）、枝川 和樹（B4、SA）、下山 智加（B4、SA）、須山 高志（B4、SA）、丹羽 貴行（B4、SA）

Sota NAKANO (M2, Teaching Assistant), Mizuki MIURA (M2, Teaching Assistant), Shota NISHIKURA (M1, Teaching Assistant), Masaya HARAYAMA (M1, Teaching Assistant), Kazuki EDAKAWA (B4, Student Assistant), Chika SHIMOYAMA (B4, Student Assistant), Takashi SUYAMA (B4, Student Assistant), Takayuki NIWA (B4, Student Assistant),


## 授業プログラム


建築学科全学生必修最後の設計製図科目として、鉄筋コンクリート造の建物の基礎的な設計方法および図面・模型による表現の習得を目指している。本年度はいくつかの演習課題および、設計を行った。設計課題では選抜作品による発表講評会を行った。

## 授業内容

- 1) トレース課題1:「萩塚の長屋」(設計:藤野 高志)(鉛筆書き、1/100、1/50)
- 2) 設計課題1:(下記参照)
- 3) トレース課題2:「神奈川大学10号館」(設計:RIA) 意匠図、詳細図(鉛筆書き、1/50、1/200)
- 4) 模型製作課題1:「神奈川大学10号館」(フレーム断面模型、1/100)
- 5) 設計課題2:(下記参照)

## 非常勤講師 経歴

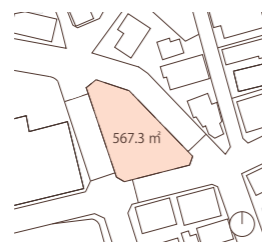
 **鈴木 信弘** Nobuhiro SUZUKI  
1963年生まれ、1986年神奈川大学卒、1988年神奈川大学大学院修士課程修了、1988年～1996年東京工業大学工学部建築学科助手、1994年鈴木アトリエ一級建築士事務所開設

 **ベラ・ジュン** Jun VERA  
1976年ベネズエラ生まれ、1986年来日、2001年神奈川大学工学部建築学科卒業、2002年株式会社ISSHO建築設計事務所共同設立(2005年改定)

## 第一課題「提案型集合住宅」

(課題説明文)

住宅地内の敷地に、老夫婦のオーナーが所有し様々な世代の居住者とともに住む集合住宅を計画する。敷地は、四周で道路に面する三角形の区画であり、公園のそばの立地で、商店街にも近い。敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯それぞれの生活を具体的にイメージすると同時に、そうした個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案/空間を求める。また、そのイメージや独自性を図面と模型で表現すること。



(設計条件)

- ・構造形式:鉄筋コンクリート・壁式構造
- ・法規制等の条件・・・住所:神奈川県西神奈川3-9-16 / 地域・地区:市街化区域/第1種住居地域 / 防火地域:準防火地域 / 敷地面積:567.3 m<sup>2</sup> / 建ぺい率:70%(今回は無視してよい) / 容積率:200%

## 第二課題「神大ミュージアム・パーク」

(課題説明文)

神奈川大学18号館および21号館の敷地に、神奈川大学が所蔵する収蔵品(文献史料、記録史料など)を企画、常設展示する展示室やインフォメーションセンターを含むミュージアムと、学生や周辺住民の憩いの場となる広場(パーク)を設計する。敷地は、大学と住宅地との境界部に位置する緩やかな傾斜をもった角地であり、大学キャンパス・マスタープランにおいて、16号館と共に大学の「ゲートゾーン」と位置づけられており、大学の対外的な顔となる空間となることが期待されている。多様な活動を含み込み、可能性を最大限引き出す提案を求める。



(設計条件)

- ・構造形式:鉄筋コンクリート・ラーメン構造
- ・法規制等の条件・・・住所:神奈川県六角橋3丁目 / 地域・地区:第二種中高層住居専用
- 地域 / 防火地域:準防火地域 / 敷地面積:1017.6m<sup>2</sup> / 建ぺい率:70%(法定は60%) / 容積率:150%(最大)

## 提案型集合住宅

## 神大ミュージアム・パーク

### 松尾 祐奈

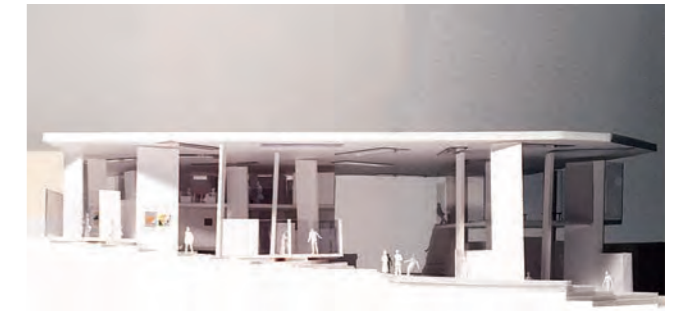
Yuna MATSUO



隙間

### 掛川 真乃子

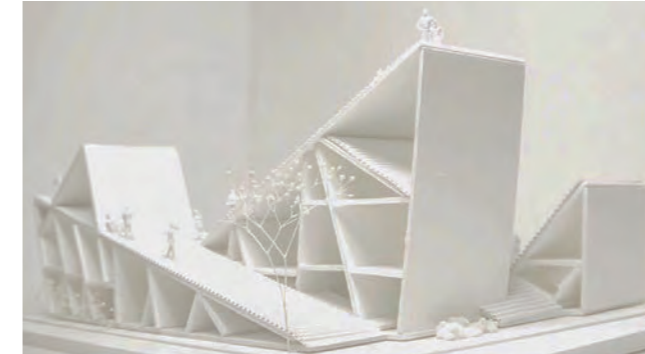
Manoko KAKEGAWA



カベノモリ

### 鈴木 啓生

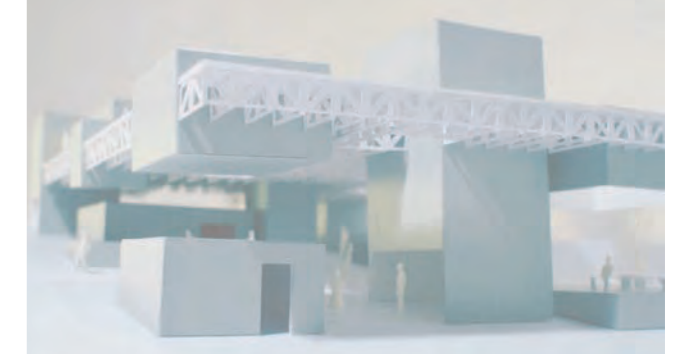
Yoshio SUZUKI



Oblique

### 前田 沙希

Saki MAEDA



Void

### 長谷川 舞

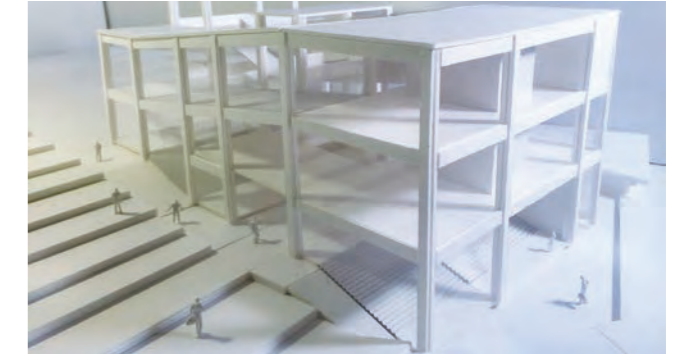
Mai HASEGAWA



整合しない路地

### 佐塚 将太

Shota SAZUKA



巡る

## 担当教員

中井 邦夫（教授）、津田 良樹（助教）、鄭 一止（特別助教）、田野 耕平（特別助手）、  
鈴木 信弘（非常勤講師、鈴木アトリエ）、ベラ・ジュン（非常勤講師、ISSHO建築設計事務所）

*Kunio NAKAI (Professor), Yoshiki TSUDA (Assistant Professor), Ilji CHEONG (Assistant Professor), Kohei Tano (Research Associate),  
Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Jun VERA (Guest Lecturer, ISSHO Architects)*

## 担当TA,SA

中野 聡太（M2、TA）、神田 貴之（M2、TA）、西蔵 祥大（M1、TA）、原山 雅也（M1、TA）、  
下山 智加（B4、SA）、須山 高志（B4、SA）、丹羽 貴行（B4、SA）、東田 萌（B4、SA）

*Sota NAKANO (M2, Teaching Assistant), Takayuki KANDA (M2, Teaching Assistant), Shota NISHIKURA (M1, Teaching Assistant),  
Masaya HARAYAMA (M1, Teaching Assistant), Chika SHIMOYAMA (B4, Student Assistant), Takashi SUYAMA (B4, Student Assistant),  
Takayuki NIWA (B4, Student Assistant), Moe HIGASHIDA (B4, Student Assistant)*

## 授業プログラム

設計製図Iでは、木造住宅を主な題材として、トレースや模型製作、課題設計などの具体的な作業を行うことで、建築設計およびその表現方法の基礎を学ぶことを目的としている。本年度は下に示すいくつかの演習課題及び、小屋と住宅の設計を行った。設計課題では選抜作品による発表講習会を行った。

## 授業内容

- 1) トレース課題1：「ヒアシンス・ハウス」（設計：立原 道造）  
意匠図（鉛筆描き、1/50、1/100）
- 2) 模型製作課題1：「ヒアシンス・ハウス」  
（白模型、1/30）
- 3) 設計課題1：（右記参照）
- 4) トレース課題2：「浜田山の家」（設計：吉村 順三）  
詳細図（鉛筆書き、1/50、1/20）
- 5) 模型製作課題2：「浜田山の家」（軸組模型、1/50）
- 6) 設計課題2：（右記参照）
- 7) 模型製作課題3：屋久島の家（設計：堀部 安嗣）  
（軸組模型、1/50）

## 第一課題「クラインガルテン」

（課題説明文）

ある家族が、横浜市神奈川区羽沢町の菅田・羽沢農業専用地区内の一画に、農業用地を借りて趣味の農業を営むことになった。積極的にスローフード・スローライフを進めるための、自然環境に配慮した「小屋」を設計して下さい。

（設計条件）

・小屋の面積は自由だがなるべく小規模(10畳以下)が望ましい(ピロティや土庇など吹きさらしの空間は面積に含めない)。

なお、最低限、次のことができること

- ・農作業の準備、農具の収納 ・簡単な炊事
- ・トイレ ・談話、くつろぐ(仮眠程度ができる場、原則宿泊はしない)
- ・内外を使って、15人程度(3~4家族)で行う収穫祭



## 第二課題「セカンドハウス」

（課題説明文）

河口湖に浮かぶ「うの島」に、セカンドハウスを設計してください。既成の考え方やスタイルにとらわれない、この島の環境を活かした、日常生活から離れたセカンドハウスならではの、自由な発想の空間による新鮮なライフスタイルの提案を期待します。

（設計条件）

- ・原則として木造とし、架構を具体的に表現すること。
- ・延床面積は、100㎡前後とし、外部空間は自由に設定してください。
- ・配置は島全体から好きな場所を選んでください。

## 鈴野 佑季

Yuki SUZUNO

眺める畑



## 川浦 光

Hikaru KAWAURA

未完の家



## 武市 拳斗

Kento TAKEICHI

広がる視界



## クラインガルテン

## 坂本 里久

Riku SAKAMOTO

四季を食べるラウベ



## セカンドハウス

## 三浦 悠介

Yusuke MIURA

景色の頂



## 金沢 拓弥

Takuya KANAZAWA

瞬間の形而上学

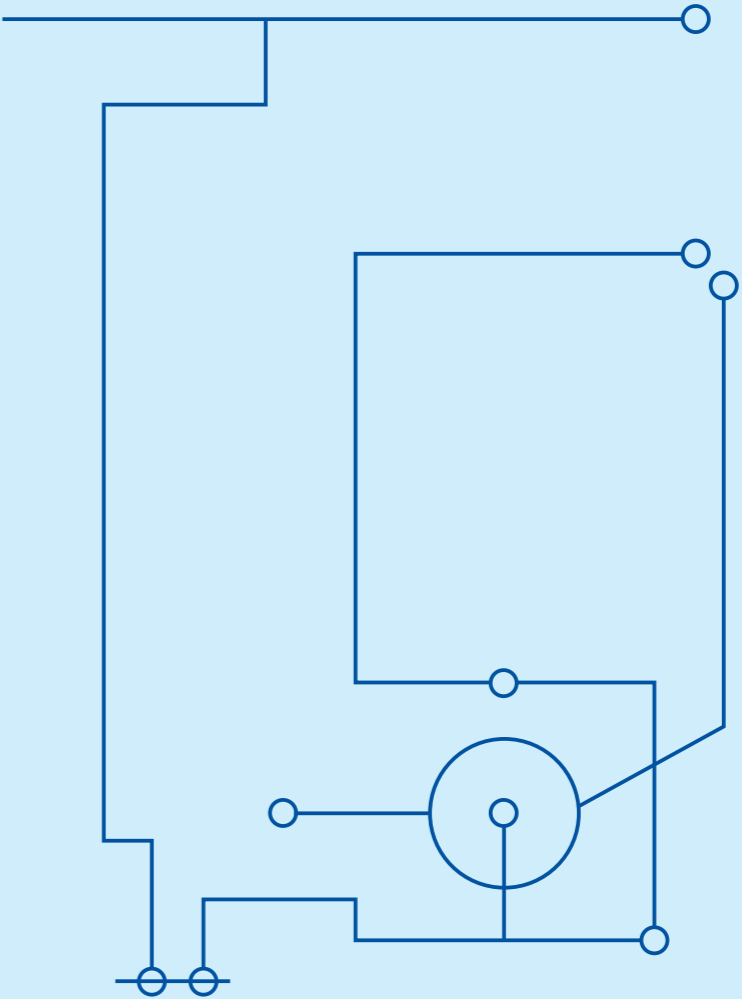






NEWS

課外活動ほか  
学外コンペ  
留学生レポート



## テクノサークル けんちくをつくる会

### 具体的な活動

普段、模型や図面のみでしか建築を表現したことのない学生達に対し、小規模ながら実際に使われる空間の製作を主たる目的とする。自分たちで建築を構想すること、建築を作ること、できた建築を体験することという一連の流れを、2年生という早い段階で体験することは、素材やスケールに対するリアルな感覚の獲得を促すと同時に、様々な生活の場面に対する観察力を育成することが期待できる。また、製作に至るさまざまな共同作業の中での行動力や調整力を育成し、さらには学年の枠を超えた交流の場の形成を期待する。

### どんなことをコンセプトに活動したか

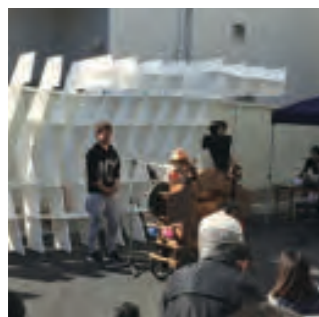
六角橋商店街で年に一度行われる「食べくら横丁」というイベントがある。今回はそのイベントの活動に対応できるように休憩所とステージを計画した。

六角橋の名前の由来となった“六角”を造形に活かし、柔軟に用途変換できるような機能的なデザインを施した。

材料は身近な素材、面材の強さを意識

した。面材であるプラダンを用いることによって、接着剤を利用せず全て差し込み形式によって組み立てを行った。

椅子、机は組み合わせによって、様々な人数への対応、歩行空間の演出ができる。ステージは六角橋を象徴するような空間を作り上げた。



### 2017年日本建築学会賞(論文)

内田 青蔵 教授

2017年日本建築学会賞において、内田青蔵教授の「我が国の住宅の近代化に関する一連の歴史研究」が、日本近代住宅史研究を生活と空間様式の視点から豊穣化し、その発展に資した体系的論考に加え、このテーマでの市民的書物を刊行し学術的関心の普及にも大きな貢献をなしたとされ、日本建築学会賞(論文)を受賞されました。



### 日本建築学会 若手優秀発表賞 原山 雅也

2016年8月24日～26日に開催された日本建築学会大会(九州)の学術講演会において、工学研究科建築学専攻修士1年の原山雅也さん(中井研究室)が、「曲輪の配列と堀の形状からみた城址公園の空間構成」をテーマに講演発表を行い、建築歴史・意匠の部門で若手優秀発表賞を受賞しました。



### 2016年度支部共通事業日本建築学会設計競技 「残余空間に発見する建築」

木下 優奈、曳田 百香、足立 将博、佐藤 凜子[支部入選]

2016年度支部共通事業、日本建築学会設計競技「残余空間に発見する建築」において、工学研究科建築学専攻修士1年の木下優奈さん(山家研究室)、同1年の曳田百香さん(山家研究室)、同1年の足立将博さん(山家研究室)、工学部建築学科4年の佐藤凜子さん(山家研究室)の「ひだを育てる」が、支部入選に選ばれました。



### 第28回JIA神奈川建築WEEK横濱建築祭2017 大学卒業設計コンクール

野村 奏実[総合資格学院賞]

みなとみらい線馬車道駅にて毎年開催されている横濱建築祭の一環である大学卒業設計コンクールにて、野村奏実さん(当時山家研究室4年)の「出会い 育つ -左近山団地における保育園と学童保育の提案-」が総合資格学院賞を受賞しました。作品の詳細は48～49ページに記載されています。

## フランス留学記事

曾我部研究室修士2年  
**稲岡寛之**  
 Hiroyuki INAOKA



## フランス留学記事

中井研究室修士2年  
**三浦みづき**  
 Mizuki MIURA



私は、国立モンペリエ高等建築学校に留学しています。モンペリエの旧市街では豊かな歴史遺産が残る町並みが広がり、新市街には建築家が携わっている建築も多く活気に溢れた街です。学校はそんな中心地から少し離れた閑静な住宅地にあつて、建築を学ぶにはとても恵まれた環境にあります。

前期のスタジオは、都市計画から始めてその中で対象とする建築を選び、その周辺に焦点を当てて設計するという内容でした。授業と関連してスタジオ旅行があり、バルセロナにて建築を訪ねて周り理解を深めていきました。フランス国内はもちろん、近隣諸国にもアクセスしやすい環境にいることは大きなメリットです。

後期は、モンペリエの隣町にある野外劇場を敷地としてそこで考えられる様々な問題を建築的に解決するという内容のスタジオを選択しています。授業の初めに敷地を訪れ、そこで感じたことを抽象的なモデルやドローイングで表現するというのが印象的でした。また設計と並行して敷地に関連する映画や芸術作品を見て設計のインスピレーションに繋げていき、最終的にそれらが設計にどう影響しているのかをプレゼンするという授業が行われ、幅広い視点で建築を考えるという意味でもとても刺激的でした。

様々な国から多くの留学生が来ているこの環境で、彼らから学ぶことは多くとても大切な経験となっています。

私が留学を決めたのは、留学関連の書類提出の締切り日でした。TOEFLのスコアがなかなか上がらず語学力に自信がなかったことや、留学に対する漠然とした不安から、一度は留学を諦めたこともありましたが、しかし、中井先生や国際センターの方と何度も話し合いをし、フランスへ行くことを決めました。

フランスでの生活が始まってから1ヶ月ほどは、学校のことや寮のこと、日常生活のことなどわからないことだらけで不安な日々が続きました。しかし少しずつ慣れてくると、生活を楽しむ余裕が出てきました。街中を歩き回ったり、近隣の街へ出掛けたり、長期休暇の際にはフランス国内だけでなく他のヨーロッパの国々に出掛けたりなど、1日1日がとても貴重なものとなりました。学校での授業も初めは何をやってもよいかかわらなかつたり、自分の考えをうまく伝えることができなかつたりと、とても苦労しました。しかし徐々に苦労することもなくなり、日本との違いや、他の学生の考えを知ることがとても楽しくなりました。

今では留学を決めるまでにどうしてあんなにも悩んだのだろうかと思うほどです。留学前に感じていた不安は、全てどうにかなくなってしまったばかりでした。不安よりも楽しく刺激的なことがたくさんあります。毎日の生活そのものが勉強となっています。諦めずに勇気をだして留学を決めて、本当によかったなと思います。



## デンマーク留学記事

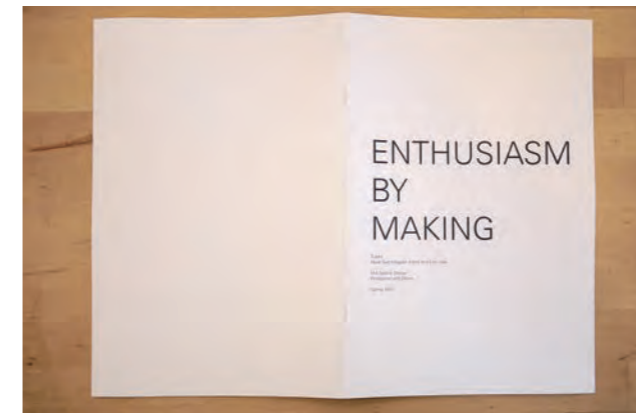
山家研究室修士2年  
**大岡晃**  
 Akira OOKA



デンマークは、なんだかすごく良い場所だった。人はいつも幸せそうにしている。なんでかはわからないが、生活がとても充実しているのだろう。デンマークで1年を通して暮らすことでしか見えないものがある。日本に四季があるように、デンマークにも四季がある。日の出から日の入りまでの時間、気候、習慣、言語、文化など様々な違いから大きなものを学べる。生活と建築の距離が近い。日常の中に美しくデザインされたものが広がっている。そして、人々は何が美しいか判断する術を持っている。

今年は、日本とデンマークの交友が150周年ということで日本から飛行機で約12時間離れた国であるにも関わらず、日本との接点は大きいがあった。日本の建築家が何人もデンマークを訪れていた。デンマークと日本の建築が語られると何か似たような物を感じることもあるが、時には違いにも気づくことがある。

それぞれの価値観を持ってデンマークと日本を考えて欲しい。この国を交換留学先に選んだことは、間違っていない。交換留学で出会った建築の仲間と会えることを楽しみに、またいつかデンマークに建築を通して戻っていきたいと思う。



各国からの留学生たちと街歩き [フランス]



バウスベア教会前 [デンマーク]



ノアプロ地区におけるパピリオンプロジェクト [デンマーク]

日本留学記事

曾我部・吉岡研究室

Cécile Gottardi

国立モンペリエ高等建築学校より



When I arrived in Japan in September 2016, I had no idea what would happen to me in this country. But the University of Kanagawa and the Sogabe Laboratory were very helpful and kind to all the students in exchange. This laboratory is more a family than anything else. Every student gets heavier and his way of thinking and designing architecture is really interesting to me.

I had different types of courses, each other helping me to understand their specificity in architecture. Even though sometimes I could not understand everything because I did not speak Japanese, I caught their most important aspect.

I had the opportunity to work on their project, to create an urban design furniture that must be in a home. I saw my project come true because they built it in December. Their way of working is really great for the students in exchange, and I hope that one day in France, we could build our own project during our study. I did an internship for 4 months and half at the MIKAN agency, and it was really interesting for me and thanks to Mr.SOGABE and another architect, I could learn more about Japanese architecture. Japan is a very beautiful country, with a real culture that transforms my way of thinking. This is completely different from France. I was lucky to have seen many architectural projects realized by a Japanese architect. These are probably the best memories I have, as well as wonderful meeting. Thank you Sogabe Laboratory, i'll never forget this year.



日本留学記事

曾我部・吉岡研究室

Léa Bec

国立モンペリエ高等建築学校より



Kanagawa University became in September 2016, my new school and then I had the chance to integrate the Sogabe Laboratory. At the beginning, it was difficult to communicate and to understand the organization of this class. But with the time, I could understand goals of this laboratory. Every projects have really important responsibilities because they aren't fictive projects. Each student participate to real projects and built in the real life. This way of working is very different from France but I think it's an effective learning and enrichment for each students. Then I participate to projects with Japanese student and even if communications were difficult, it was very interesting to exchange some ideas.

During this year, I also made two internships which allowed me to discover the way of work in agency in Japan. I understand the importance of the model during the creation. Japanese are so patient to realize each details of the project.

Moreover with some travels during this year, I saw new architectural conceptions, spaces and traditions. All of these will be enrichment for my future work. I have a new point of view of architecture but also of the culture and of way of living. Share our culture and discover others ways of life was wonderful. Travels are one of the best enrichment to find inspiration in our work of creator and then I was so glad to spend this year in this University and Laboratory and to meet all these students and professors.



神奈川大学工学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻 沿革

- 1928 米田吉盛が「横浜学院」創設(旧横浜市中区桜木町)
- 1929 専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
- 1930 六角橋に移転、横浜キャンパス開設(5月15日 創立記念日)
- 1949 学制改革により「神奈川大学」設置
- 1952 神奈川大学整備拡張計画(設計:山口文象/RIA)
- 1965 神奈川大学工学部建築学科創設(初代学科長:谷口忠教授、定員80名)、  
8号館(建築学科研究室、製図室)竣工
- 1967 12号館(建築学科総合実験棟)竣工
- 1971 大学院工学研究科建築学専攻修士課程設置
- 1973 かな会(建築学科同窓会)設立
- 1982 同済大学(中国)、武漢理工大学(中国)と学術交流協定を締結
- 1985 建築学科創設20周年記念誌発刊
- 1990 大学院工学研究科建築学専攻博士課程設置
- 1994 建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
- 1998 横浜キャンパス再開発開始(2002年完了)
- 2002 成均館大学校(韓国)と学術交流協定を締結
- 2003 RAKU(デザインコース年鑑)vol.1発刊
- 2005 国立台湾科技大学(台湾)と学術交流協定を締結
- 2006 建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入  
第1回東アジア大学建築学術交流セミナー(以後毎年開催)  
日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
- 2008 神奈川大学創立80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
- 2010 デンマーク王立芸術アカデミー建築大学(デンマーク)と学術交流協定を締結、交換留学(部局間)開始
- 2013 国立台湾科技大学(台湾)と交換留学(部局間)開始
- 2013 国立モンペリエ高等建築学校(フランス)と学術交流協定を締結、交換留学(部局間)開始
- 2015 建築学科創設50周年



8号館

RAKU バックナンバー



RAKUは、神奈川大学工学部建築学科建築デザインコースで2005年から発行しています。第6号以降は毎月多彩なテーマの特集を組み、単なる学生作品紹介誌を超えた建築誌としても楽しめるように企画しています。vol.12から新たに学外から編集者の長島明夫氏、デザイナーのqp氏を起用し、さらにパワーアップしました。読んで眺めてお楽しみ下さい。  
(建築デザインコース主任 中井邦夫)

編集／原山雅也、佐藤滉子、石井佑果、庄子利佳、田中啓介、西藏祥大、遊佐舜、亀岡貴彦、秋山晃士、稲村一晃、浜崎隆一、紀冉、李勇太、市川貴一、印東尚朗、木村捷希、武藤匠、加藤正佳、東田萌、下山智加、枝川和樹、丹羽貴行、須山高志、森島駿平、田村駿介、城間リカルド、伊藤将吾、櫻井浩平、松川英莉奈

監修／中井邦夫、田野耕平、吉岡寛之、上野正也、須崎文代  
特集ページ編集／長島明夫  
表紙写真／qp  
デザイン／qp

「RAKU Vol.13」 発行／神奈川大学工学部建築学科建築デザインコース  
発行日／2017年7月30日 [横浜キャンパス] 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

